偶然という名の奇跡２～社長令嬢のジレンマ～

城ノ内 ジョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偶然という名の奇跡２～社長令嬢のジレンマ～

【Ｎコード】
Ｎ２５５７Ｃ

【作者名】
城ノ内　ジョウ

【あらすじ】
ついに始動したＴＣＣ。そこに現れた一人の少女。そして少女の悩みと新たに発生した事件。さまざまな事件が混ざり合い、複雑に絡み合った結末は意外なものに！

プロローグ（前書き）

これは
「偶然という名の奇跡」の続編です。前作を読まなくても十分楽しめますが、より楽しむために前作を先に読まれることをお勧めします

プロローグ

ある人は言った。この世には偶然など存在しない。あるのは全て必然だけ。

と。この言葉について考えてみよう。言葉の意味をそのまま解りやすくすると、たまたま、とか、まぐれ、とかそういう意味に相当する現象は全て存在しない。どれもなるべくしてなった。つまり最初から決まっていた出来事だったということになる。あの有名人が売れるようになったのも、あいつが有名私立大学に受かったのも、どれも規定事項だった、ということになる。

なぜこんな話を始めたかというと、俺は今、偶然と必然について、とても考えているからだ。俺はというと、断然偶然は存在すると思う。なぜかというと、俺は造物主や神の存在を信じていない。どれも規定事項だというのなら、それを規定したやつがいるはずだ。必然派のやつらはそういうものの類を信じているやつなのだろうと思う。

俺は神を信じない。そんな都合のいい話があるわけない。自分は毎日必死に勉強してきた。きっと神様はそれを見ていて下さっていた筈だから、きっと合格をプレゼントして下さるに違いない。こんな自分勝手な話がある筈がない。もしそれが本当なら、神ってやつはどんだけ暇なやつなんだ。俺の生活の一部でも熨斗をつけて進呈してあげたい。

と、まあ今までくだらない話を続けてきたわけなのだが、こんなことはどうでもいい。実際神なんかいてもいなくても俺には関係なさそうだし、信じているやつをバカにしようとも、邪魔しようとも

思わない。話は逸れたが、偶然についての話だ。なぜ俺がこんなに熱弁し始めたのかというと、実のところ、俺自身、偶然の存在について少々疑い始めたからだ。

なぜ俺はツイていないのだろうか。俺自身に責任はないはずだ。となると必然とか運命とかいう言葉を使わざるを得なくなってしまう。上記で説明したとおり、俺はそんなもの信じていないのだが、今ははっきり言い切れないのだ。

また話が逸れてしまったので、結論から言おう。現在俺はまた笹倉の事件に続き、事件と呼べる、またこれがめんどくさそうな、出来事に遭遇してしまったのだ。今回のきっかけは岩崎で間違いないのだが、最終的に事件を拡大していったのは岩崎ではなく、俺だったと言わざるを得ない。

α1

どうも。あたし、日向ゆかり。十六歳。世界有数の大企業、日向グループ総裁、日向純一郎の一人孫娘。何を隠そう、このあたし、できないことなど小指の先ほどもないスーパー美少女お嬢様なのだ。何をやらせても常にナンバーワンのこの才能、見る者全てを虜にする美貌に加えて、日向の跡継ぎという肩書きまで持っているあたしはもう天下無敵。向かうところ敵なし。

いや、一人いた。あたしのおじい様。日向純一郎だ。基本的には優しいおじい様であたしの言うことは何でも聞いてくれるんだけど、一方言い出したことは意地でも変えない、頑固者でもあるんだ。この頑固魂を発揮してしまったのは、昨日の事だ。

その内容だけど、九月から高校に通うことだった。理由は社会勉強。あたしは自慢じゃないが、ハーバードの大学の卒業証書を持っている。なぜかというと、答えは簡単。ハーバードの大学を卒業したからだ。向こうには飛び級の制度があるので、一足早く十六にして大学を卒業してしまっている。

だからこのおじい様の発言には断固抗議したよ。今更日本の高校で学ぶことなんか何もないし、社会勉強だって中学までは日本の学校にいたんだから問題ないって。だけどそんなことで前言を覆すようなおじい様ではなかった。ま、解ってたけどね。

ということで仕方なく、高校に通うことになってしまった。向こうの年度は九月から新年度を迎える。だから卒業式は七月。それで編入は九月からということで、今、高校に通っている。年齢的には高校一年だから、そのレベルの授業を受けている。

通ってみて解ったんだけど、これが意外に楽しくて、なんて展開には全くならず、毎日毎日つまらない日々を送っていた。今まで周りは年上ばかりだったせいか、どいつもこいつもガキに見える。てか実際ガキだった。男は特に仲良くする気にならなかった。

あたしの美貌と財力に目がくらんで寄って来る男もたくさんいた。はっきり切り捨ててやっているのに次から次へと害虫のように沸いてくる。中でも最悪だったのは、えーっと、名前なんて言ったかな？確か山内だか山口だかなんかそんなん。そいつが結構な資産家の息子らしく（うちに比べたらまだまだ微々たる物なんだけど）、体中から自信を発しているようなやつだった。実際自信満々でこともあろうに教室で、しかもクラスメート全員の前で告白して来やがったのだ。

「君が好きなんだ。僕と付き合ってくれないかな？僕たちお似合いだと思うよ」

あたしの嫌いなものトップスリーは自信過剰なやつ・空気読めないやつ・相手のこと考えないやつ。そいつは見事に全て当てはまったので、特典として、こう言い返してやった。

「ごめん、あたしあんたみたいなやつが一番嫌いだから」

そしたらそいつは、相当ショックだったらしく、奇声を上げて、あたしに襲い掛かってきた。きっと断られたことなかったんだろうね。あんたの周りの人間見る目なさ過ぎ。でもこういうやつも結構いたから扱いにも慣れていた。あたしはそいつを返り討ちにして病院送りにしてやった。

それからあたしに話しかけてくる女子が少しずつ増えていった。理由を聞いてみると山内を病院送りにしたのがよかったらしい。あれの自信過剰振りに迷惑を被った女子は少なくなかったようなのだ。それからしばらくあたしはクラスの女子と仲良くし始めたのだ。時には遊びに行ったりもしたし、遊びに来たりもした。

そんな生活がだいたい一ヶ月くらい続いた。しかしある日を境に突然あたしに話しかけてくるやつはいなくなった。それはあたしの机の上に花瓶が置かれた日だった。その花瓶には菊の花が添えられていた。なるほど。こう来たか。まああたしは気にしなかった。これも見方を変えれば社会勉強。日本の社会にはこういう輩がいるっていうことが解った。

こんなあたしの態度が気に入らなかったのか、いわゆるいじめは日に日にひどさを増していった。こんな子供の遊び、日向の力を行使すれば、あっという間に犯人を見つけ出して、そいつを家ごと社会的に抹殺することなど赤子の手をひねるようなものだったが、あたしはそうしなかった。本当に子供の遊びだと思っていたし、こんなことする連中にかまっているほど暇人ではない。それにまだ日向の力はあたしの力ではない。あたしはスーパー美少女お嬢様なのだ。この程度のことで他人の手を借りるほどあたしは落ちぶれていない。

β1

いつの間にかやってきた秋はいつの間にか過ぎようとしていた。動物たちは季節の移り変わりを匂いで感じることだできるらしいのだが、我々人間にはそれができない。ではどうやって感じるのかというとずばり気温である。今俺は季節を感じることのできる屋上に来ている。俺の体感は冬の訪れを教えてくれた。

現在午後五時過ぎ。さすがにこの時期になると肌寒さを感じる。そして早くも日は傾き、あたりはうす暗くなってきている。そういえば日の傾きでも季節の移り変わりを感じることができるな。この時間になると残っているやつらは部活動をやっている人間に相違なく、だからこんな時間に屋上に来るやつなど皆無に等しかった。

笹倉が転校してから二ヶ月の月日が流れた。麻生の落ち込み具合は半端ではなく、十年ぶりくらいに風邪など引いたりして、最終的には赤信号無視して原動機付き自転車と正面衝突して絶賛入院中である。右手と左足を骨折し、全治一ヶ月の大怪我を負ったが、幸い命に別状はない。

それよりかわいそうなのは加害者となってしまった少年である。彼は何も悪いことはしていないのだ。さらに麻生をよけるため、必死に頑張った結果、原付から大きく吹っ飛ばされ、ガードレールに激突。両手プラス鎖骨を骨折し、全治二ヶ月の重傷を負った。本当に同情をしないではいられない。彼に幸あれ。

一方岩崎はというと、笹倉の事件を解決し、多大な感謝に気を良くし、あの後すぐ

Ｔｒｏｕｂｌｅ　Ｃｏｎｓｕｌｔａｔｉｏｎ　Ｃｏｍｍｉｔｔｅｅ
略してＴＣＣを設立した。直訳すると『お悩み相談委員会』である。

よくいるよね。社交辞令を真に受けて舞い上がっちまうやつ。しかも生徒会の公認を受け、部室までゲットしている。構成員は岩崎、麻生、そして俺という三人。俺はもちろん麻生も許諾をしていない。麻生はともかく俺は断固反対だった。面倒事が嫌いな俺が何ゆえ面倒事を募集するような団体に加入しなければならないのか。誰か解る奴いたら教えてくれ。その旨をとうとうと岩崎に説いてやったのだが

「まあいいじゃないですか」

の一言で一蹴された。

疑問点はまだあり、部の設立には構成員五名、加えて顧問となる教師一名が必須条項として挙げられている。これまでの二ヶ月、俺は顧問なんて一度も見たことないし、構成員も未だ三人のみ。詳しいことは聞いていないが、これからも聞く気はない。泥沼になりそうだし、おそらく違法な手口を使っているに違いない。俺はまだ前科持ちにはなりたくないので共犯になりそうな発言、行動は控えようと思う。

さて、そんなダークな設立背景は置いといて、めでたく（この場合、誰にとってめでたいのか定かではないが）落成式を迎えたＴＣＣなのだが、案の定全く客が来ず、毎日閑古鳥が鳴いている状態なのだ。

俺は当然だと思っていた。なぜかというと今のご時世、悩みを抱

えている人間がたくさんいるようで、カウンセラーなる職業が存在している。実際うちの高校にも月に二回くらいの割合でカウンセリングルームを占拠し悩み相談を実施している。そんな職業がある昨今、なぜ、よりによってこんな間抜けな名前をした団体に相談を持ちかけなければならないのだろう。しかも高校の最低学年である俺たちに。たかだか十五・六年生きた俺たちに『人生いろいろありますよ』などと言われた日には笑うに笑えない。みんな口をそろえてこういうだろうよ。『お前に何が解る』と。

と、まあ俺はこの状況をそれなりに理解し、享受していたわけなのだが、享受していない奴がいた。

岩崎である。

なぜ相談者が来ないのか、と憤り、最近は輪をかけて機嫌が悪い。それはもう最悪に近い。暇で、何もすることがないにもかかわらず、部室に行かないとキレるし、今日なんてホームルームが終わるや否や、俺のかばんを持って部室に遁走しやがった。

麻生が入院してからは部室で雑誌すら読ませてもらえない。だから俺は今ここにいる。どうせかばんは取られたままだし、あと三十分もしたら見つかってしまうだろう。しかしこのゆったり過ぎる時間が好きだった。まあこんなことが起きると解っていたならこのゆったり過ぎる時間など投げ出して、裸足で逃げ出していただろうが。

この直後である。彼女と出会ったのは。俺は今でも、そしてこれからもずっと信じている。あれは偶然であったと。

α12

いじめらしきことが始まってから約一ヶ月が経った。季節的には冬。十一月半ばになっていた。その日は授業が終わってしばらく経ってもあたしは学校にいた。あたしの机が異常に汚れていることがあたしのせいだと思っている無能教師の命令で、あたしは机やらロッカーやらの掃除をしていた。

気がつけばあたしはクラス中が敵になっていた。最初は避けているだけだった奴らも今では殺気立っていた。あたしは一ヶ月も続いているこのいじめに嫌気がさしてだんだん学校に行かなくなっていた。もう面倒だし。あたしは元々高校なんて行く必要のない人間なわけだし。

掃除が終わるともう午後五時を回っていた。日が傾き、きれいな夕焼けを作っている。この夕焼きをもっと見たくて、あたしは屋上に行くことにした。屋上に出ると、さっき教室の窓越しに見たものと比べ物にならないくらい大きくきれいな夕日が地平線に消えようとしていた。あたしはその大きく美しい夕日に吸い込まれているように無意識に近づいていたようで、気がついたら屋上の端にあるフェンスのところまで来ていた。フェンスを両手で掴み、こうやって夕日を見ていると、だんだん怒りがこみ上げてきた。

なんでこのあたしがあんな奴らに振りまされにゃならんのだ。あたしは叫んだ。

「バカヤロー！担任の無能！佐藤の間抜け面！」

あたしは思いつく全ての悪口を言いまくった。さすがのあたしも我慢の限界だったみたいだ。やってられん。何だこの生活は？そして言い終えるとあたしは無性にフェンスを乗り越えたくなった。そしてすぐさま実行。フェンスのない夕日は一段ときれいに見えた。そしてあたしは理由は無いが飛びたくなった。そう思った矢先、後ろから全然感情のない声がこんなことをあたしに言った。

「飛び降りるつもりか？」

β12

俺は時計を確認した。あと三十分は平気だろう。そう思い、寝転がり、料理雑誌を広げたとき、屋上のドアが開く音がした。俺の場所からはドアは死角であるため、誰が来たのか解らなかった。が、しかしかなり高確率で岩崎だろう。今日は早かったな。あきらめて雑誌を閉じたが、岩崎どころか人影自体なかなか現れなかった。

俺がその人物の姿を拝めたのはその人物が屋上の端にあるフェンス付近に歩いてきたときだった。相手は俺の存在に気がついていないらしい。その姿は岩崎に見えないが、女子であることを制服が物語っていた。そして上履きの色を確認。俺たちと同じ一年であることが解った。

しかし屋上に何の用があるのか解らなかった。先ほども言ったが、この時間に来るやつはほとんどいない。怪しいな。俺がしばらく様子を見ていると、あにはからんや、突如として、その女子は奇声を上げた。そして次々と電波に乗せることのできないような罵声をはきまくった。中には特定の人物を思わせるものもあった。

一通り悪口を言い終えた女子は、肩で息をしたまま、やおら、フェンスを登り始めた。このあたりで俺は見かねて少女に近づいてその背中に話しかけた。

「飛び降りるつもりか？」

少女は振り向いた。が、返事はない。俺は大人な意見を述べさせてもらう。

「飛び降り自殺はお勧めできない。これは周りの人にかなり迷惑を

かけうるからだ。降りたところは敷地内だから、近隣の住民には迷惑かけないが、学校関係者・警察関係者には少なからず迷惑にかけるはずだ。掃除しなきゃいけないし、その前にここまで来なくてはならない。おそらく授業は急行になるだろう。どうしても自殺したいなら薬にしておけ。睡眠薬なら文字通り眠るように死ねるはずだ」

ここまで言い終えてもまだ返事がない。さてどうしよう、と思った矢先、かすかに聞こえる蚊の鳴くような声でこう言った。

「あたしが何したって言うのよ」

そういうとその少女は目から大粒の涙を流し始めた。これにはさすがの俺も慌てたね。とっさに謝ったが何の効力もなく、ダムが崩壊したかのように流れ落ちる涙はどんどん量を増していった。最初はむせび泣いているようだった声も涙とともに大きくなる。結局俺はどうしていいか解らず、その場に立ち尽くしていた。

α|3

振り返ったその先には、実につまらなそうな顔をした少年が立っていた。何でこんな時間に屋上にいるんだ？怪しいな。

そいつはあたしが黙っているのをいいことになにやらえらそうなことを言い始めた。

しかし飛び降りをしようとしているであろうやつにこんなこと言うか？いつものあたしなら相手にしない。

でも今のあたしはいつものあたしとはかけ離れていた。

ストレスもたまっていたし、いっそのことそいつにぶちまけてやろうかと思ったが、口から出た言葉はあまりに弱々しく、情けなく、あたしの口から出た言葉とは思えないようなものだった。あたしもただのちっぽけな少女に過ぎなかったわけだ。唐突に今まで普通じゃないような振る舞いをしていたあたしがバカバカしく思えて、気がついたら涙を流していた。

充血したあたしの目からこぼれ出る涙は、とどまるところを知らず、本当にこのまま止まらないのかもしれないと思った。そいつは突然泣き出したあたしを見て、かなり焦っていた。こういうやつがいるから涙は女の武器とか呼ばれているんだな。おそらく泣いているあたしのほうが冷静だったと思うね。

それからは涙で景色が滲み、周りを見ている余裕などなくなり、それ以上そいつの焦っている顔は見ることができなかった。

そして永遠かと思ったあたしの涙もとうとう終わりを告げ、激昂

していた気持ちも落ち着いてきた。しかしすっきりしたね。やはり金とストレスは溜め込むものじゃないな。

そんなことを考えてからようやく、目の前にいたそいつの存在に気付いた。てか思い出した。そいつはあたしが泣き始めたときと同じポーズのまま、あたしが泣き終わるのを待っていたようだ。

「落ち着いたか？」

そいつはさっきと同じように全く感情のこもっていない声色であたしに問いかけた。

「うん、だいぶ」

あたしはいったい何をしているんだろうね。あとこいつも。

「はいよ」

こいつはあたしに何か手渡した。あたしは反射的に受け取ってしまったが、あたしの手の中には冷たい缶のお茶があった。この肌寒い中に冷たいものはないだろ！

あたしの思考をトレースしたようでそいつはもう一言つけ足した。

「目、冷やしな」

相変わらずその声には感情はなかった。が、あたしには感情の変化があった。涙は止まったもののあたしはさっきまでものすごい勢いで泣いていたのだ。確認していないがきっと眼ははれているに違いない。あたしは素直に従った。冷たい缶は腫上がった眼には気持ちよかった。

沈黙。順番から考えてあたしが何か言う番なのか？しかしあたしから言うべきことなんて多くはないぞ。その多くない言うことの一つであるさっきの行動の動機は言いたくないし、もう一つは恥ずかしいから言いたくない。なんでこんなことに気を使わなきゃいけないのか解らないが、あたしはいろいろ考えていた。

そんなあたしの心情を知ってか知らずか、そいつは口を開く気配がない。それどころか、自分の世界に入り込んでいてあたしの存在を忘れているような気さえする。

そしてそのまま時は流れ、気が付くと下校時刻になり、それを告げるチャイムが学校全体に響き渡っていた。

「帰るか」

「ん？う、うん」

さっきの空白はなんだか未だに理解できないが、こいつの一言で帰宅が決定した。なんかあたしこいつに振り回されてないか？

屋上をあとにして、校舎内を昇降口に向かって歩いていたのだが、あたしの、もしかしたら一緒に帰らなきゃいけない流れなのか、っていう心配をよそに、

「俺寄るとこあるから」

と、言って、二階まで降りたところで足を止めた。

結局名前も聞くことなく、言うこともなく、お互いの帰路に着くことになるんだ。どうやらあたしはそんな感じを表情に出していた

らしく、そいつは苦笑気味に顔を破綻させた。そしておもむろにかばんから一枚のプリントを取り出して、あたしに渡した。あたしは疑問符を頭の上にたくさん浮かべながらそいつを窺うと、そいつは穏やかに微笑みながら、

「興味があったら顔出しな」

そういうときびすを返し、暗い廊下に消えていった。

あたしの手の中に残ったプリントには『人に言えない悩みを持っている生徒諸君に朗報。生徒による生徒のためのお悩み相談所ＴＣＣ設立のお知らせ』と書かれていた。

β13

俺はいつもの通学路を歩いていた。学校の最寄り駅を降り、徒歩で十分ほどの道のり。

利用している私鉄は朝であるにもかかわらず、ラッシュのラの字もなく、それ以前に人がほとんど乗っていない。地元の人間しか利用しない、どこにでもあるようなローカル線なのだ。おかげで毎朝座って通えるわけなのだから文句など言う気はさらさらないのだが、一つだけ言わせてもらうと本数が少なすぎるね。いくらなんでもこの通学時間に十五分に一本はないだろう。

さて、そのことは置いておいて、俺は昨日のことを思い出していた。今まで不本意ながら面倒事に多々巻き込まれてきた俺の第六感が耳元で叫んでいる。『あれは始まりの合図だ』と。

しかし、と俺は思う。俺にもいくらかは言い分がある。見ず知らずとはいえ、同学年の女子がフェンス越しに聞くに耐えない罵声を吐いた後、フェンスを乗り越えたのだ。自殺すると思うだろう。止めようと思うだろう、普通。説得の言葉は我ながらどうかと思うが、それを言い終えた直後、意味深なことを言って泣き始めたんだぞ。焦るだろう、普通。

その場にいても俺にできることはないのだが、逃げ出すのもアレだったから泣き止むまで待った。泣き止んだら泣き止んだで、実に微妙な雰囲気になってしまい、どうしようかと思っていたら冷たい缶のお茶を持っていることに気付いた。

あれは屋上に来る前に、学校内に備え付けてある自動販売機で買ったものだ。当然ホットを買おうとして、ホットのボタンを押した

んだが、あのくそ自販機の野郎、冷たい奴を出しやがったんだ。今思い出しても腹が立つ。仕方ないから違うものをもう一つ買ったのだが。ホットの方は自分で飲んだ。冷たいのは忘れていたわけだが、とりあえずこの微妙な雰囲気を打開するために渡してみた。

案の定、変な顔をされた。困った俺はもっともらしいことを言ってどうにかごまかした。仕方ないとはいえ、失態だったな。この女子は確実に厄介ごとを抱えている。そんなことを考えていたら時間は結構経っていて、俺は帰るか、と切り出した。せめてもの悪あがきとして、俺はあの行動言動の動機は最後まで聞かなかった。それを聞いたらおしまいだと思ったからだ。

と、ここまでで終わっていれば、このままで何もなく過ぎていく日常だった。しかし、俺はこのあと最大の失態を犯してしまった。なんで俺はアレを渡してしまったのだろうか。昨日に戻れるなら殴ってでも止めてやりたい。

しかし、渡した理由は解っていた。俺も病んでいたのだ。岩崎の暴挙に耐えかねて相談者が来ることを望んでいたのだ。結果あの行動に出たというわけだ。はあ、かわいそうな俺。そしてあの女子と別れたあと、部室に行き、岩崎の尋問を適当にかわしながら帰った。

あの様子だと、昨日の今日でも相談を持ちかけてくる可能性もある。岩崎もさらに機嫌を悪くしているかもしれない。頭が痛い。こんなにいい天気なのにな。

教室に入ると、自分の席に座っている岩崎は、予想通り、仏頂面だった。こんな予想当たらなくてもいいんだが。

「よう」

「おはようございます、成瀬さん」

朝の挨拶もそこそこに、岩崎は早速愚痴り始めた。

「どうして相談者が来ないのでしょうか？」

未だこの事実が信じられないようだ。事実を無視しているから進歩がないんだよ。

「きっと皆さん大した悩みがないんですね」

どうあっても自分のミスだとは考えないらしい。

「私はこんなに大きな悩みを抱えているのに」

岩崎はチラッと俺を見て、はあー、っとわざとらしくため息をついた。

「俺が原因だと言いたいのか？」

「そうです。成瀬さんのその鈍感さが私の悩みの一つなんです。いったいいつになったら気付くんでしょうね」

何でこいつに俺の鈍感さについて悩まれなくてはならないんだ。俺は適当に流しておいた。

しかし、こんなに参っている岩崎を見るのは初めてだった。実に新鮮だ。岩崎はいつも元気で、参っていたのは俺のほうだったからな。まあ俺は今も参っているのだが。

それから岩崎は机に突っ伏したまま口を開かなかった。どうやら本気で悩んでいるらしい。それがＴＣＣについてのことなのか、さ

っき言っていた大きな悩みという奴なのか俺には解らなかったが。

直後、チャイムがなり、担任が教室に入ってきてホームルームを始めた。

α14

一時間目の始まりを告げるチャイムが鳴ったとき、あたしは教室にはいなかった。今保健室にいる。体調不良ではないが気分は悪かった。もうやってられん。本気で辞めたい。

あたしは生まれが生まれだからかもしれないが、人一倍プライドが高い。バカにされるのはピーマンより大嫌いなのだ。昨日の放課後のことが気になったから一応来てみたが、来なきゃよかったね。

とりあえず学校に着いたらまず教室に行ったのだが、そしたらまたあたしの机がドロドロのベトベトになっていた。あたしはキレた。自分の机を思い切り蹴飛ばし、クラス中の注目を集めると、感情を押し殺した低い声で言った。

「これやったの誰？」

シーンと静まり返った教室はみんなうつむいてあたしを見ない。一人ひとり問い詰めてやろうかと思ったが、その必要はなかった。

窓側からくっく、っと声を殺したような笑い声が聞こえてきた。その声の主は気持ち悪い笑みを浮かべながらあたしに近づいてこう言った。

「ごめんねー。俺たちみんな知らないんだー」

あたしの目の前に出てきたのは三人。典型的な遊び人の様相だった。金髪ロンゲ。制服をだらしなく着て、しゃべり方までだらしな

い。名前なんて全く知らないけどあたしは直感で思った。

「あんたら、なんか知ってるでしょ？」

「言ってんだろ？みんな知らないって。朝来たらこうなってたの」

一番でかい奴が答えた。やったかどうか知らないが、何か知っているのは明らかだった。

「うそつけ。答えろ」

「しつこい」

気に触ったのか、声色が変わった。怒りの混じった低く脅すような声。だけどあたしはそんなんじゃびびらない。もう一言言ってやろうとしたら誰かが間に入ってきた。

「もういいだろ。そんなにケンカ腰になるな」

「山内」

誰かと思えば、そいつはいつぞやあたしに告白してきた調子乗りボンボンだった。山内か。一番初めに言った奴が正解か。山内は金髪三人組を言いくるめると、あたしのほうに振り返った。

「ごめんね。あいつら本当に短気で」

そんなことはどうでもいい。短気のほうが扱いやすいし。

「あんたは知らないの？」

あたしは転がっている自分の机を指差して聞いた。山内は申し訳なさそうな顔をして、

「ごめん。知らないんだ。あいつらが言ってたことは本当だと思うよ」

と言った。あたしは全然納得してなかったが、適当に返事をした。みんな知らない？うそに決まっている。全員がグルになっているに違いない。

あたしは呼び止める山内の声を無視して、ドアに向かった。教室を出て階段の前で担任に会ったがそれも無視して保健室に向かい、今に至るというわけ。

さっきは頭に来たけどもういいよ。許してあげよう。教師はもちろん、おじい様にも言わないであげる。良かったね、あたしが寛大で。心が広くて。温厚で。

何となくいろいろ考えていたけど、気が付いたら寝ていた。起きたら外は暗くなり始めていた。どうやらあたしは七時間以上寝ていたらしい。楽しみにしていた昼食も食べ損ねた。おなか減った。仕方ない、帰るか。

保健室には誰もいなかったからそのまま出て、教室に向かった。

机は朝のままだった。必要なものをかばんに詰め込み、口を閉じようとしたとき、一枚のプリントがひらひらと床に落ちた。それは昨日の放課後、屋上で変なやつにもらったものだった。

β14

窓の外はたくさんの生徒で溢れていた。放課後になるといつもこうだ。その生徒はだいたい三種類いる。部活に行く奴、帰宅する奴、そして特にようはないが学校に残る奴。俺は最初か最後か微妙なところだ。

結果から言わせてもらうと、俺は今部室にいる。今日は来るしかなかった。他に手はなかった、というか他に手はあったのかもしれないが選択する暇がなかった。選択肢を見る暇もなかった。俺だって学習する。昨日かばんを取られたことは頭に残っていたからホームルームが終わるとともに、まずかばんを確保した。しかし甘かった。ホッとしたのがいけなかったのかもしれない。

暴君と化した岩崎はこともあろうか、かばんの代わりに俺の首根っこをむんずと掴むと、そのまま部室に向かって走り出した。というわけで部室にいるのだが、相変わらず暇だ。

「今日は暇ですねー」

今日も、だろ！という突っ込みをすんでのところで飲み込む。

「何がいけないのでしょうか？」

「さあな」

ほぼ全てだろうよ。来たくなるような要素を探すほうが難しい。

「成瀬さん！何でそんなに無関心なんですか！名ばかりとはいえ副部長なんですよ！ちょっとはまじめに考えて下さい」

「誰が副部長だって？」
「成瀬さんですよ！」
「部長は誰だ？」
「私に決まってるじゃないですか！」

初耳だ。つまり俺はあんたの部下か。いつの間にそんなことになってしまったんだ。

「とにかく成瀬さんも原因を一緒に考えて下さい」

面倒だ。こんな阿呆な団体、さっさと撤退しろよ。とはさすがに言えないので、適当にそこそこまともなことを言うことにする。

「やはり信用がないんだろ。相談てのは少なからず近しい人にするもんだ。もしくはそれ以上に信用がある人だ。俺たちの場合、不特定多数の人を相手にするんだから後者しかない。つまり信用を高めるしかない。この人たちなら何とかしてくれると思われなきゃいけないんだ。俺たちはそう思われてないんだろうよ。あるいは単純に知名度がないのかもな」

岩崎は図星をつかれたようで、ううっ、とうなり、黙り込んでしまった。これで少しは大人しくなってくれたら幸いだ。

「じゃあ具体的にどうしたらいいのでしょう？」
「信用度を高めるには何か問題を解決するしかない。どっちにしろまずは一人目だな」

うーん、と岩崎はまたうなった。

「難しいですね。もっと簡単に集まってくると思ったんですが」

あんたは簡単に考えすぎだ。しかもまだ序の口も序の口。本当に難しいのは相談を受けてからだ。『好きな人がいて・・・』とかならまだいいが、『親が離婚しそう』とか『家庭内暴力を受けている』とか言われたらどうするんだ。もしくは思いもよらないような相談が来たらどうする。『それは我々の手には負えません』じゃ済まないぞ。相談てのは少なからずプライバシーが関わってくるような内容だ。聞いた以上は何かしらの処置をしないと許してもらえないだろうよ。ま、こいつはそこまで考えてないんだろうが。せめて俺に火の粉が降りかかってこないようにしてもらいたいね。

それから俺は岩崎の無理難題を適当に受け流していたら、時刻は午後五時を回っていた。

「今日もやっぱり来ませんかね？」

岩崎はふう、とため息をつき、すねたように口を尖らせながら言った。

「・・・・・・さあな」

俺は一瞬返事が遅れた。それは相談しに来そうな人物に一人、心当たりがあったからだ。昨日屋上に来た変な女子。今日は来ないのか、それともこんな変な団体には関わりたくないのか、あるいは人を頼りたくないのか。あいつの泣き顔は助けてくれと言っているように見えたのだが。

などと考えていると、変なところで妙に鋭い女、岩崎は一瞬の間と俺の思案顔に目ざとく反応した。

「成瀬さん、何か隠してませんか？」
「俺が何を隠そうとあんたには関係ない」
「昨日の放課後のことですか？」
俺は閉口せざるを得なかった。ここまで鋭いとはさすがに予想外だ。
「吐きなさい！ネタは上がってるんですよ！」
岩崎は俺のネクタイを掴み強引に自分のほうに引き寄せた。何言ってんだ？こいつは。刑事ドラマの見すぎだ。しかも証拠のしの字もないじゃないか。
「おい止めろ！これは脅迫だぞ」
「違います！これは拷問です。それにバレなきゃ平気です！」
確かにそうかもしれないが、そうなってくると刑法とか民法とかっていう問題じゃなく、憲法違反だ。それに俺が通報すれば一発でバレる。まさかこいつ俺を殺す気か？
俺は岩崎の手を払い、鬼のような威圧から逃げ出すと、部室の真ん中にあるテーブルを挟む形で対面した。これ以上距離を縮められないと解ると、岩崎は手元にあったものを手当たりしだい投げてきた。
「物を投げるな！しかも全部俺のものじゃねえか！」
「止めません！さあ観念して全てを話して下さい。ええ、きっと怒りませんから！」
すでに怒ってるじゃねえか！しかも怒る怒らない以前になぜ全て

を話さなきゃいかん。こいつはプライバシーという言葉を知らないのか。

俺のものを投げ終えた岩崎は、次に部の備品に手をつけた。自分のものは投げたくないようだ。この野郎、理性吹っ飛んでるように見えて意外と冷静だな。

最初は文房具だったが、それも投げ終えると、食器を手に取った。そりゃまずいだろ。マジで俺を殺す気か。

しかしこの夫婦喧嘩みたいなやり取りは意外な方法で幕を閉じることになった。

岩崎がティーセットを両手に持ち振りかぶったところで、開かずの扉だった部室のドアが開かれた。俺と岩崎はそろってドアのほうを見る。初めてそのドアを開けたという偉業を達成したそいつは、俺の予想通りの人物だった。

α－5

あたしは今、ＴＣＣと書かれたネームプレートのついている部室の前にいる。来てしまった。不覚。さすがのあたしも弱っているのかもしれない。人を頼るなんて情けない。

しかしそう思いながらもあたしはここにいるのだ。理由はおそらくあの男。興味がある。何か今まであった奴とは違うにおいがする。相談するか否かは置いといて、とりあえず中に入ってみよう。

コンコン。

ノックした。応答なし。

コンコン。もう一度。

またまた応答なし。

ドアノブを握る。あ、開いた。

そこにはティーセットを両手に持って、大きく振りかぶり、今から投げますよってポーズをしたかわいらしい女子と、両手を前に出して静止を促しているようなポーズをとっている例の変な男がいた。

「・・・」
「・・・」
「・・・」

三人は見つめ合い、無言。そのとき確かに時は止まった。

先に動き出したのは男のほうで、しゃがみこみ、床に散らばったもの拾いながら女の子に向かってこう言った。

「客人だぞ、部長殿」

「わ、解ってますよ！成瀬さんはちゃんと片付けといて下さい」

男の言葉に女の子も息を吹き返す。どうやら男は成瀬というらしい。

成瀬は片付けるのを止めていた。さっき拾っていたのは自分の物だったらしく、かばんに詰め込んでいた。

「断る。あんたがやったんだろ」

「じゃあ成瀬さん代わりに応対してくださるんですか？」

成瀬はあたしのほうをチラッと見る。そして、

「それも断る」

と、言った。あたしはちょいと頭に来たから口を挟むことにする。

「ちょっと！あんたが来いって言ったんでしょ！」

「強制はしてない」

カチンと来た。そして理解した。こいつは嫌なやつだ。昨日のは何だったんだ。あたしは何か言ってやろうとしたら女の子ににらまれた。思わず開きかけていた口を閉じる。

「どういうことですか？」

女の子は成瀬に問いかける。うわっ！この娘マジで怖い！そこら辺のヤンキーがナスに見える。

しかし成瀬はそんな威圧感じていないようで、

「あんたには関係ない」

さらっとこう言った。女の子が机を持ち上げにかかったところで成瀬はあたしの横を抜け、さっさと部室から逃げていった。

「追わなくていいの？」

あたしは恐る恐る聞いた。しかし女の子はさっきの威圧が嘘のように消えていた。そしてあきれたような口調で言った。

「いいですよ、もう。明日問い詰めますから」

女の子は床に散らばったものを拾い集めだした。あたしも一応手伝うことにする。

「で、何かあったの？」

ブチギレモードから元に戻ったようなので聞いてみる。

「よくは解らないんですけど、たぶん女の子絡みです」

よく解らないのにアレか。いいのか？それで。

「女絡み？」

また聞いてみる。女の子は浮気性の彼氏を責めるような口調でこう言った。

「いつものことなんですけどね。また女の子にちょっかい出したようなんです。昨日の放課後なんですけど」

やっぱ男なんてみんなそうなのか？一人の女じゃ物足りないんだろう。と、思ったところで気が付いた。昨日の放課後？それって・・・。

「それもしかしてあたしかも・・・」

女の子がゆーっくりこっちを見る。ふむ。これが目で殺すってやつか。などと暢気に言っている場合ではない気がする。もしかしたらあたし殺されるかも。

最後に鉛筆を拾い終わり、片付けが終了すると彼女はふーっと息を吐き、あたしに身体ごと向き直った。

「ありがとうございます。お客様に手伝っていただくなんて本当に恐縮です。どうぞ座ってください。飲み物を用意いたします。紅茶でいいですか？」

あたしはこの変化についていくことができ、ただうなずくことしかできなかった。とりあえず座らせてもらう。

しかし居心地悪いな。なんてタイミングで来てしまったのだろうか。下手すりゃ殺されてしまうかもしれない。いや、本当に。

ところでこの二人の関係はいったいなんだろうか。まあ仲悪くは見えないが、特別良くも見えない。成瀬の反応を見ている限りでは付き合っているようにも見えないし。ケンカするほど、ってやつなのか？

そうこうしているうちに紅茶を入れ終えた彼女がこっちにやって来た。

彼女はあたしの正面に座って、自分で入れた紅茶を一口飲んでからゆっくり話し始めた。

「繰り返しになりますが、申し訳ありませんでした。先ほどは大変お恥ずかしいところを」

「あ、いえいえ。あたしも変なタイミングで来てしまって」

あたしとしたことが畏まってしまった。しかし、コロコロと表情が変わる人だな。

「とりあえず成瀬さんとの事を聞いてもいいですか？昨日成瀬さんと何をしていたんですか？日向さん」

とりあえずそこなんだ。そんなに気になるのか？まあ大した話じゃないんだけど。しかしどう切り出せばいいのか。むー。あれ？そういえば・・・。

「ねえ。あたし自己紹介したっけ？」

そういえば何であたしの名前知ってんだ？あたしの記憶ではまだしてないと思うんだけど。というかする暇なかった。

「あたしのこと知ってんの？」
「知ってますよ。日向さんは有名ですから」
げっ！やはりいじめっていうのは生徒間じゃ筒抜けなのか？しかも編入生だからな、あたしは。と思ったのだが、
「あの日向コンツェルンのお嬢様ですからね。それに見た目も目立ちますからね」
ああ、そうか。あたしはスーパー美少女お嬢様だった。忘れてた。最近自分を見失いかけたからな。
「ああ、そっか。そうだね」
「それで、成瀬さんとは何を？」
すかさず話を戻された。いや、そらす気はなかったんだけどね。
あたしは昨日の流れをざっと説明した。誤魔化すとあとが怖いから、結構丁寧に説明した。だけど泣いたところは割愛させてもらった。恥ずかしいし、直接関係ないしね。
「で、別れ際にこれをもらったわけ」
もらったビラを渡した。
「なるほど。じゃあ今日ここに来たのは相談ですか？」
机から身を乗り出して、今度は子供のような目をしている。もうキラッキラしている。本当にやりにくいな、この人。ていうか、相談持ちかけられて嬉しいのは解るけど、それじゃ相手も話しにくい

し、根本的に喜ぶところじゃないでしょ。

まああたしは最初から相談を持ちかける気はなかった。

「違う違う。それはもう済んだから」

「そうですか。じゃあ成瀬さんは余計なお世話だったわけですね。悪く思わないで下さいね。あの人はああいう人ですから。それで今日来た用事はなんですか？」

何か一気に言っていたけど何言っているか解らなかった。

まあそれは置いてといて、うーん、どうやって誤魔化そうかな。考えてなかったな。

「えーっとあたしも悩んでいた時期が、まあ、あったんだけど、そのときにやっぱ人に悩みを聞いてもらって、楽になった、かなって思った、ような気がしたわけで・・・」

何言ってんだ？あたしは。彼女もそう思ったらしく、

「つまり？」

って聞き返された。つまり、

「まあ、あたしにできることがあれば、協力したいなー、なんて・・・」

思うことは、まあ多少はなくはなかったりするのは当たらずとも遠からずというか、と言おうと思ったけど、彼女の机を叩く音に遮られた。

両手で机をぶっ叩いた彼女は、勢いよく立ち上がり叫んだ。

「ＴＣＣに入って下さるんですね！」

「えっと、あたしも人並み以上に忙しいからそんなに手伝えるか解らないけど、あたしにできることがあるなら」

「ありがとうございます！じゃあ入部ということで、さっそく書類を作成することにしましょう。あ、いいですよ。こっちのほうでやっておくんで。心配なさらないで下さい。私は生徒会にも顔が広いので、明日までに承認して下さるように頼んでおきます。役職は何がいいですか？やっぱり日向さんは会計ですかね？いや、資金提供を頼んでいるわけではないですよ！そんなことといきなり頼むわけないじゃないですか！でも日向さんがもし快く了解してくださるんでしたらお願いしちゃったりしてもいいですかね！」

という感じで、一方的に押し切られてしまった。

「じゃあ今日はこの辺でお開きにしますか」

あたしの入部が決定したことに気を良くしたのか、部長を名乗るこの少女は解散を促した。あ、そういえば・・・。

「ねえ、名前まだ聞いてなかったよね？」

すっかり忘れていた。というかあたしはほとんどしゃべっていない気がする。

「そういえばそうでしたね。申し遅れました。私は岩崎といいます。

さっきの人は成瀬さんです。もう一人いて現在は入院中ですが、麻生さんです。男性です。部長は一応私が担当しています。成瀬さんが副部長です。みんな日向さんと同じ、一年生です。よろしくお願いします」

と、簡単な紹介を受けた。部員はたったの三人。まああたしを入れて四人か。校則に違反していないか？もちろんあたしはそんなこと言わなかった。

「明日から放課後、部室に来て下さい。じゃあ帰りましょう」

こうしてあたしはこの怪しげなＴＣＣという団体に加入することになった。しかしこの人たちの仲間なのか？あたしは。何か嫌だな。

β－5

さて、彼女はちゃんと相談しただろうか。

俺は久しぶりに夕焼けに染まる風景を見ながら帰宅していた。最近は意味もなく学校に残っていたから帰りはいつも真っ暗だったからな。

俺は部室でのことを考えていた。俺がいたら悩みを打ち明けにくいだろうと思って、逃げ出してきたわけなのだが、あの女、性格ひねくれてそうだからたぶん相談してないな。何しろ人を頼ることを知らなさそうだ。

昨今の世の中、人を信じることができなくなってきているが、一人で生きていけるほどたやすい世の中でもないだろう。おそらく、今まで人を頼る必要などなかったんだな。自分の運と才能を信じて生きてきたのだろう。そこに突然の壁。どんな壁にぶち当たっているのか知らないが、少しは助けになるといいが。

α16

あたしは今日も一日保健室で過ごし、放課後、例の部室の前にいた。ホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴ってからもう二十分も経過していた。鍵を持っていないあたしは、待ちぼうけをくらっていた。

何をしているんだろうか、あの二人は。さすがに掃除も終わっているだろう。あー、掃除といえばあたしの机やロッカーはどうなってんだろうか。もうどうなってもいいけど昨日の朝の時点でベトベトドロドロだったからなぁ。もっとグロテスクになっているかもしれない。ちょっと見てみたい気も・・・やっぱりしない。どうあれあたしはバカにされるのが大嫌いだ。タマネギより嫌いだ。

ところで今あたしはマイナーな部活動ばかりを集めた旧館というところに来ている。十年くらい前に生徒の大幅増加により新たに建てられた校舎があるのだが、その際に使われなくなった旧館をこうしてリユースしようということになったらしい。よって旧館にはほとんど人がいない。誰かがやって来たら、その足音でたちどころに解ってしまう。

何でいきなりこんな話をしたかというと、今足音がこの旧館に響き渡っているからだ。しかし何かがおかしい。音に一定のリズムがない。例えるならば、リズム感のないドラマーによって奏でられているエイトビート自己アレンジバージョンって感じ。

その妙な足音が近づくにつれ、あたしは力が入り、身構えていたのだが、現れたのはあたしの待ち人である二人に相違なかった。

岩崎さんは普通に登場したのだが、成瀬は後ろ向きだった。どういうことかというと、成瀬は岩崎さんに首根っこをむんずと掴まれ、そのまま引きずられて来たようだ。

「お待たせしました。少し成瀬さんの捕獲に手間取りまして」

捕獲って・・・。

「おい！いい加減に手を離せ」

成瀬は相変わらず後ろ向きで、そのままの体勢で叫んでいた。岩崎さんはしぶしぶという感じで手を離した。成瀬はこちらに向き直りながら制服の襟を直した。そしてようやくあたしの存在を確認。さて、どうしたらいいのか。

「こちらが我々ＴＣＣの新たなる仲間、日向さんです！」

あたしが悩んでいたら、岩崎さんが紹介してくれた。しかしなんだかくすぐったい。一度会っているわけだし。

「日向？」

成瀬は首をかしげる。

「そうです！かの有名な日向コンツェルンの一人娘さんです！」

岩崎さんはあたしの代わりに答えた。そしてあたしの代わりに自慢げに胸をそらした。

「あんたが威張ってどうする」

あたしも同感だ。

「で、日向のお嬢さんがこんな普通の高校で何をしている」

「ああ、別にあたしも来たくなかったんだけど、社会勉強っていうことで無理矢理編入させられたの」

「なるほど。で、ここにいる理由は？」

あんたが呼んだんだろ、だから。

岩崎さんもそう思ったようで、成瀬に抗議していた。

「成瀬さんが呼んだんじゃないですか？」

何やら怒っていらっしゃる。この人の機嫌は本当にコロコロ変わる。

「俺は勧誘したわけじゃないんだが」

「どういうことですか？」

あたしには意味が解っていたが、ここは黙っていた。成瀬は、まあいいや、と言って岩崎さんによって開錠されたドアを開け、中に入っていった。あたしたちも後に続いた。

β16

今日も岩崎に捕まり、鬼のようなありあまるパワーによって部室にやってきた俺は、進入部員と簡単な挨拶を交わしてから、部室の中に入った。

新入部員ね。おそらく相談しないとは思っていたが、まさか入部するとはさすがに予想外だ。こんな怪しげな団体に自ら入るやつがいるとは世の中広い。さらに驚くことに日向とはね。

新たな話し相手を得た岩崎は、まさに水を得た魚。楽しそうに話していた。これは俺にとってもいいことだった。部室で雑誌が読むことができる。これは素晴らしいことだ。二人のときは雑誌を開いた瞬間、怒鳴られていた。いやよかった。これで少しは岩崎の機嫌も安定するかもしれない。今までの岩崎の機嫌の不安定さといったら、富士の樹海の方位磁針並みだったからな。

「ところで、」

岩崎のマシンガントークを遮って、日向が口を開いた。岩崎が首をかしげる。

「いつもこんなんなの？」

こんなんとは、今の状況のことだろう。相談者の来ない部室など、岩崎のトークショー会場でしかない。

「そうなんですよ。何かいい案はないですかね？」

岩崎は一転、困ったような表情をした。この質問に日向も困った表情になる。

「悩んでる人が少ないとは思えないけどね」

日向は当たり障りのないことを言った。まあこの意見には俺も同感だ。要は頼りになるかならないか、だ。何回も言うようだが、こんな怪しげな団体に悩みを打ち明けようと思うやつなんていない。まだ教師にでも相談したほうがましだ。

「もっと大きく宣伝したら？」

わりとまともな案だが、俺の名前は伏せておいてもらいたい。こんな怪しげな団体に関わっていたとなると恥ずかしくて外を歩けなくなってしまう。将来就職活動とかにも影響が出そうだ。

「簡単に宣伝とは言っても、生徒会下の団体なんで生徒会に申請しないといけないんですよ」

「へえ。いろいろ面倒なんだね」

「はい。難しいんですよ」

何やらへこんでいるようだが、さらに面倒なことになる前に口を挟まさせてもらう。

「肝心の相談だが、ちゃんと悩みを解決してやれる自信はあるのか？」

「当たり前じゃないですか！そうですね、例えば何がありますかね？」

どんなものが来るか、考えてもいなかったらしい。世間では根拠

なしに自信満々なやつのことをバカと呼んでいる。

「やっぱ恋愛関係じゃないの？」

素直に日向が答えた。

「あー恋愛ですか。それは考えてなかったですね。私自身、今悩んでますからねー」

恋愛の悩みなんて一番ポピュラーだろ。しかも聞かれてないことを答えているし。

「日向さんはどうですか？恋愛経験多そうですけど」

「いや、あたしもあまりないな。実際付き合ったことないし」

「そうなんですか？でもよく告白とかされるでしょう？」

「告白されるけど、告白したことないし」

「うわー。うらやましいですねー」

「岩崎さんこそ結構告白されてそうだけど」

何だ、この会話。全く入れない。女の会話だ。

「そうですか？でもされないですね、告白。たぶん成瀬さんのせいですね」

唐突に自分の名前が出てきた。

「俺が何だって？」

「成瀬さんが四六時中一緒にいるから、私は告白されないんです！」

「そんなのはお互い様だろ」

というか、俺はなるべく離れようとしているのに、あんたがくっついてくるんだろ。

「成瀬さんが告白されないのは自分のせいですよ。直したほうがいいですよ、その性格！」

「大きなお世話だ」

「別にどうでもいい話ですけどね」

どうでもいいなら、俺に話を振らないでいただきたい。

「とにかく、恋愛関係の相談なら俺はお手上げだからな」

「そんなのは熟知してます。成瀬さんは乙女心がまるで解ってないですからねー」

「そりゃ最悪だね」

何だ？こいつら。昨日会ったばかりのくせにすっかり仲良くなりやがって。乙女心なんてものはたぶん一生解らないだろうよ。それは自分でも解っているが、ここまででかい声で言われるとさすがに腹が立つな。というか、ここは問題じゃないんだよ。

「要するに、恋愛に関しての悩みを解消してやれるやつがここにはいないんだよ」

ようやく理解したのか、岩崎は難しい顔をした。

「確かにそうですね。それについては検討の余地がありますね」

部の設立から検討し直してもらいたい。

岩崎は手帳を取り出し、メモを取ってから、
「他には何があると思いますか？」
と言った。日向は悩んでいるようだが、俺が言うべきことは決まっていた。
「いじめ、だな」
俺は二人の様子を窺いながら言った。
「なるほど。いじめですか」
先に答えたのは岩崎だった。日向は黙っている。表情に変化はない。
「うちのクラスにはなさそうですね。特進クラスということも関係してそうですが。日向さんのクラスはどうですか？」
「あたしも知らないな。というか、あまりクラスのこと詳しくないし」
「確かに。たった二ヶ月程度では細部まで見えてこないですよね」
「あのさ。ちょっと気になったんだけど」
「何ですか？」
日向は突然話題を変えた。岩崎がそれに応じる。日向は俺の手元を示し、
「あんた、料理するの？」
と言った。そして俺の料理雑誌を手に取った。

「ああ、まあな」
「一人暮らし？」
「そうだ」
「成瀬さんの作ったものはなかなかおいしいですよ」

岩崎は会話に入り込んできた。またしても若干自慢げである。

「へえ。岩崎さん、食べたことあるの？」
「はい！泊まりに行ったときにいただきました」

『泊まり』という言葉に反応し、日向の顔が少し歪んだ。念のため言っておくことにする。

「勘違いするなよ。こいつの他にもあと二人いたんだ」
「ああ、なるほど。ところであたしも食べてみたいんだけど」
「いいですよ」

俺の代わりに岩崎が答えた。俺の代わりに答えるならば、俺の気持ちを代弁してほしい。今の答えは、俺の気持ちと正反対だ。

「成瀬さんは毎日、お弁当を自分で作っているので明日の昼食のとき、ここに来て下さい」

この会話の主人公的立場にいる俺なのだが、俺の気持ちが何一つ反映されないのはどういうことだろうか。俺を差し置いて話がどんどん進んでいく。

「じゃあ成瀬さん。明日はお弁当を三つ作ってきてください」
「ちょっと待て。何で今の会話の流れで三つになるんだよ」

「いいじゃないですか。一つも二つも三つもあまり変わりませんよ。問題は作るか作らないか、です」
「断る」

若干哲学的な言い回しをしてもだめだ。何で俺があんたたちの弁当を作らなければならない。

「これは親睦を深めるためにやるんです。仲間である我々は、もっと互いに知り合わなければいけないんです。そのための第一段階として成瀬さんの作ったお弁当で昼食を一緒に食べるんです」
「親睦を深めるだけなら一緒に飯を食うだけで事足りるだろ。それに放課後こうして部室でいろいろしゃべるだけでお互いを知ることができる」
「成瀬さんのお弁当が必要不可欠なんです！つべこべ言ってないでいいから作ってきて下さい！お願いしますよ！」

最終的にこの一言で押し切られて終了。俺は論理的に言葉を並べていたのだが、暴力の前では役に立たなかったらしい。結局乙女心なんて解らないものなのだ。

解ったことは日向が意外と世渡り上手だということだ。昨日で岩崎には逆らってはいけないと悟ったのだろう。その成果が今日のいくつかのセリフに現れていた。

長いものには巻かれろ。

実は日向グループが今の地位にいるのはこの手口かもしれない。

そして今日解ったことで一番の大物は日向が心に抱えている問題についてだ。俺はいじめの可能性が高いと見た。リアクションは薄

かったが、話題の変え方が急で不自然だった。理由としてはあまり強いものではないが、可能性はいくらか高くなった。的が絞れれば少しは動きやすくなる。動くかどうかは別にして。

そしてもう一つ解ったことは、俺は自分で思っている以上にお人好しだということだ。この性格を直さないと、俺は一生面倒ごとに巻き込まれていくことになるかもしれない

α－7

あたしは少し後悔していた。あんな部に入らなきゃ良かったかも。何であいつあんなに鋭いわけ？しくじった。泣いているところを見られたやつに自分から近づくとは。助けてくれって言っているみたいじゃないか。

でも、昨日は普通に楽しかったな。しゃべっていただけだが、あんなにしゃべったのは久しぶりだ。あの二人の漫才みたいなやり取りも面白かった。この学校に来たときはつまらんやつばかりだと思ったけど、あの二人は違う気がする。いい意味で変わった人たちだ。これからも付き合っていきたいと思った。正直あの鋭い質問には驚いたけど、あまりリアクションを起こさなかったし、そのあとの会話も普通だった。話題の変え方が少し不自然だったかも知れないけど、それだけじゃ断定できないだろうし。

そんなことを言いつつも、あたしは教室に来ていた。昨日の今日だし、一応用心して授業には出ておこう。

予想に反してあたしの机はきれいだった。きっともう飽きたのだろう。こういうことをやる奴らは、被害者の反応を見て楽しむんだ。ターゲットがいないと面白くないんだろうよ。

続々と入ってくるクラスメートたちは、あたしがいることに驚きながらも、なるべく眼を合わせないようにしていた。だが、一人だけ話しかけてくるやつがいた。

「おはよう。久しぶりだね」

山内だった。

「最近来てなかったけど、どうかしたの？病気？」

あたしは山内の質問に対して、ああ、とか、うう、とか生返事で答えていた。終始笑顔だったのがとても気持ち悪かった。顔立ちは普通にいいのだが、何を考えているのか解らなくてとても嫌だった。

いつの間にかホームルームが始まって、いつの間にか授業が始まった。

授業が始まってから気付いたのだが、ドロドロベトベトとともに、机の中に入れておいた教科書たちもきれいさっぱり消えていた。何一つない。

あたしがあきらめ半分で探していたら、隣の（あたしの席は窓側の一番後ろだから、つまりあたしの右の）席の女の子があたしの机を叩いた。彼女の名前は確か、阪中みゆきだったと思う。あたしがそっちに顔を向けると、彼女は前を向きながら机の下の教科書をあたしに差し出してきた。受け取ってみると、それはあたしの教科書たちだった。彼女はあたしがいない間、教科書たちを保管していてくれたのか。なんていい娘さんだ。親の顔が見てみたい。久しぶりに人の温かさに触れた。昨日はＴＣＣの二人に触れたが、岩崎さんは温かいを通り越して、もう熱かったし、成瀬は逆に冷たかった。

彼女は相変わらず前を見て板書をしていたのだが、あたしが凝視しているのを、気配で察知したのか、頬がほんのり赤くなっていた。うーん、本当にかわいいな。その素直な反応にあたしは惚れそうになった。

下手すりゃ、自分が標的になってしまうかもしれないのに。今どき人のために行動できる人なんてそうそういない。授業が終わったあと、こっそりお礼を言った。

そして昼休み。山内が何やらうるさかったが、全てトイレットペーパーのごとくさらっと流して、成瀬の手作り弁当が待つであろう、部室に向かった。

β17

「楽しみですねー。早く日向さん来ないですかねー」

部室で長机をはさみ、俺と岩崎は向かい合って座っていた。目の前には三つの弁当箱。三つとも同じプラスチック製の使い捨て弁当箱だ。

もうお解かりだろうが、三つとも俺が作ったものである。作ってしまった。いや、作らされてしまった。さすがに今回は作ってやる気など、全くなかった。俺の分ですら作る気なかった。　じゃあなぜ作ったのかというと、こともあろうに、岩崎がうちに押しかけてきやがったからだ。今朝七時、オートロックを難なく突破して俺の家のチャイムを鳴らした岩崎は、玄関を開け、出てきた俺に対して最初に発した言葉は、弁当のことだった。朝の挨拶もない。そこからは言うまでもなく、俺は産業革命期の労働少年のごとく、ごみのような賃金で働かされた。岩崎の口から出た賃金の額は、百五十円。つまり『ペットボトルおごってあげますよ』だった。

俺たちが部室に来てから五分ほどして日向がやってきた。

「お待たせ。で、例のぶつは？」

「ちゃんとありますよ。さあ早くいただきましょう！」

日向が机に着くや否や、二人仲良く、合掌して、

「いっただっきまーす！」

と、ハミングした。日向が一口食べる。

「お味はいかがですか？」

俺ではなく、なぜか岩崎が日向に感想を聞く。

「うん！予想以上においしいね」

「ですよねー！」

おいしいと言われているにもかかわらず、俺は全然喜べない。むしろバカにされているような気がするのは俺の被害妄想か？

「あれ？成瀬さん食べないんですか？では私がいただきます！」

岩崎が俺の弁当を横取りしようとする。俺は当然それを阻止する。

「人のまで食おうとするな！どこまで食い意地張ってるんだ」

「お、女の子になんてこと言うんですか！」

「女の子として扱われたいならそれ相応の行動をしろ」

「いいですよー。どうせ私は女の子らしからぬ行動をしてますよ！」

岩崎は頬を膨らませて、腕を組み、そっぽを向いた。『私は怒ってますよ』というアピールだろう。

「良かったですねー。日向さんみたいなかわいー女の子が入部してきて！」

「え？ちょっ、あたし？」

日向は突然自分に話を振られて驚き、戸惑っているようだ。岩崎

は戸惑う日向を無視して、俺の顔をじっと見ている。どうやら俺の返事を待っているようだ。いったい何がしたいのか、サッパリ解らん。しかし誤魔化しきれそうにないので答えてやることにしよう。

俺は日向を見た。日向も俺を見ていた。少し緊張しているように見えたが、たぶん気のせいだろう。

「俺は・・・」

「俺は？」

二人とも俺に言葉を繰り返し、続きを待っているようだ。

「俺はもっと普通の女性のほうが好きだな」

「・・・」

「・・・」

沈黙。これをきっと嵐の前の静けさというんだろう。だんだん俺の言っていることが理解できてきたみたいで、二人の表情が険しくなっていく。うーむ、恐ろしい。

「それじゃ私たちが普通じゃないみたいじゃないですか！」

「そうだよ！そりゃあたしは大企業の一人娘だけど」

日向はさりげなく付け足した。自慢のつもりだろうか。

「それも含めて普通とは言えないな。第一、こんな変な団体に参加している以上、どんなによく言っても一風変わっていると言わざるを得ないな。創設者は論外だ」

バン！と二人が同時に机を叩き、プラスチック製の弁当箱を俺に

向かって投げつけてきた。中身が入っていなかったのが不幸中の幸いだ。

この後の展開はいつかと同じだった。違ったのが、岩崎一人ではなく、日向も加わり、二人仲良く俺に部室の備品を投げつけてきたことと、投げつけてきたものが物的なものだけではなく、俺に対しての不満を言葉という名の爆弾にこめて投げつけてきた、ということだけだった。俺は昼休みの終了を告げるチャイムが鳴るまで、かわし続けることしかできなかった。

α18

放課後。部室ではまた昼休みと同じような展開になった。今度はあたしは参戦しなかったけど。

しかし昼休みはびびったね。あいつの弁当が、普通においしいから普通に食べていたら、岩崎さんに突然話を振られたからね。その内容にもびびった。そりゃ自分で美少女と言っているくらいだから、かわいいとは言われ慣れているけど、正直あれはないでしょう。柄にもなく、少し緊張してしまった。顔も少し赤くなっていたかもしれない。だからあいつの発言には余計に腹が立った。しかしあたしはいったいどんな返事を期待していたのだろうか？なぞだ。まあ物投げまくっているうちにだんだん楽しくなっちゃって、そんなことどうでも良くなっちゃったから忘れちゃった。

しかしこの二人は毎日こんな感じだったのだろうか。よく続いているよね。おそらくこれが二人のコミュニケーションの取り方なんだろうね。きっと本当はすごい仲良くて、お互いのこと知っているんだと思う。成瀬はあれだけ物を投げられても全然怒らないし、岩崎さんは、まあすごい怒っているけど結構簡単に許しちゃうし。二人ともすごいいい人だけど、やっぱり成瀬は特にすごいんだと思う。だから普段まじめな岩崎さんも成瀬には気を許して甘えてしまうからあんな態度になっちゃってるんだよ、きっと。とりあえずあたしはこの二人が気に入ってしまったのだ。興味津々なんだ。

とりあえず思考をこの辺でストップして、二人の会話に入りながら部室を後にして下駄箱に向かった。自分の下駄箱を開け、靴を取り出すと中から何か落ちてきた。手紙のように見える。あたしは少

し緊張した。瞬間的に連想した手紙の差出人はクラスの連中、特にあの金髪三人組だった。

しかしその予想ははずれ、手紙の裏側には見たこともない名前が書いてあった。ふう。そこに書いてある名前を、あたしは声に出して読んでみた。

「横山大貴」

やっぱりあたしには心当たりがなかった。しかし二人は違ったようだ。

「聞いたことある名前だな。ラブレターか？」

「誰か知ってるの？」

「成瀬さんに聞いても無駄ですよ。半年経った今でも、クラスメートの名前、全員言えないような人ですから」

成瀬の代わりに岩崎さんが答えた。たまにいるよね、そういうやつ。そういうあたしも全然覚えてないけど。

「あんただってそんなに変わらないだろう」

「そんなことないですよ？私は交友関係広いです！一学年だけでも百人は下らないでしょう」

成瀬は全く信じてないようだ。それよりあたしは岩崎さんに聞きたいことがある。

「岩崎さんはこいつのこと知ってるの？」

「知ってますよ。横山さんは生徒会の副会長さんです」

へえー。初めて知ったよ。生徒会とか全く知らないや。全然興味なったからなー。成瀬は今でも興味なさそうだ。

「それでどんなやつなの？」

今のあたしは少し興味がある。なんせ久しぶりだからなあ、こういうのも。少なからずはしゃいでいるのが自分でも解る。

「顔は十人並みなんですけど、人柄の良さが理由で人気みたいですね。性格も明るくて楽しい人みたいですよ！成瀬さんとは正反対ですね」

ふーん、なるほど。よくいるタイプだな。あたしは人当たりがいいやつって何となく受け付けないんだよね。何か裏がありそうで。山内もそんな感じ。

興味なくなったのが顔に出ていたようで、岩崎さんにも伝わってしまった。

「あれ？あまりタイプじゃないですか？」

「うん。ちょっと苦手なタイプかも」

呼び出しには行く気ないし。もしかしたらいたずらかもしれないしね。

「そうなんですか」

岩崎さんは、もったいない、と言いたそうだった。

「じゃあ帰ろうか！」

でもあたしは少し元気になった。いいことなかった最近に比べて、今日はいくらか楽しかった。

α19

土日をはさんで月曜日。あたしは今日も朝から学校に行ってみた。金曜日にグロテスクになっていたあたしの机はものの見事にきれいになっていた。誰かが掃除しているに違いない。なかなかいい仕事をするね。

ホームルームを適当に終え、授業が始まった。相変わらずとても暇で、とてもつまらない授業だった。こんなんじゃ絶対理解できないし、身につかないね。

つまらない授業はやたらと長く感じた。四時間目が終わったときにはもうくたくただった。暇疲れってやつだ。

昼休み、あたしは部室に向かった。部室には成瀬が一人でいた。めずらしい。

「あんた、今日は逃げないの？」

挨拶は置いといて、あたしは成瀬に話しかけた。

「かばんを人質に取られてるからな」

あ、そう。かっこ悪いね。

雑誌を広げて読み始めた。それはどうやら料理雑誌のようだ。

「今日はあたしたちにお弁当ないの？」

あたしは思い出したように聞いてみた。あれはなかなかおいしかったな。

「あるわけないだろ。あれが最初で最後だ」

まあ期待してなかったけどね。今気づいたが、成瀬は自分のお弁当を食べ終えていた。ということで、あたしは成瀬の正面に座り、昼食に取り掛かることにした。

「ところで岩崎さんは？」

一応聞いとかないとまずいだろ。

「あいつは昼食べ終わった瞬間、どっか行った」

「どこに行ったの？」

「さあな」

「じゃあ何しに行ったの？」

「確かクライアントを探してくるとか言ってたな」

クライアント。確かにそろそろ相談者がほしいね。このままの暇な団体になってしまったらまずいだろ。一応生徒会下にいるわけだから、部費が出ているのだろうな。つまりこの団体はただの金食い虫に他ならないってわけだ。しかしふと気になったことがある。

「でもクライアントって探すものなの？」

「解らんが、あいつなら見つけてくるかもしれないな」

確かに。無理矢理連れて来そうだな。それについて学校側に告訴されたら笑い話にもならない。

「しかしいるかなー。こんなところに相談に来る人」
「いるじゃないか。ここに」
ここにはあたしと成瀬しかいない。つまりあたしのことか。
「このまま相談受ける側にいるつもりか？立場を変えるなら今のうちだぞ」
確かに相談者が来たらもう立場を変えられないかもしれない。来たら、の話だけど岩崎さんなら連れて来てしまうかもしれない。でもあたしにもプライドがある。いまさら立場を変えるような格好悪いマネ、絶対にできない。
「最初に岩崎さんに言ったけど、あたしの問題はもう解決してるの。だからあたしには相談するようなこと、もうないよ」
「俺にはそうは見えないが」
成瀬の目はとても深い色をしている。いつものやる気のない眼ではない。あたしはその目に少し圧倒された。
「あんた、ほとんど授業出てないだろ？」
あたしは思いがけないところを突かれて閉口した。
「あんたはいろんなものに恵まれているから今まですべて自分の力でやってこれたんだろう。人に頼ったことなんてないんだろう。だから頼り方が解らないかもしれない。だったらラッキーじゃないか。こんなおあつらえ向きな団体があって。あいつはきっと喜んで相談に乗ってくれるぞ。喜んで、というのはどうかと思うがな」

「あたしはあんたたちに相談することなんか何もない」

あたしは自然と声を大きくした。

「あたしは人を頼る必要なんかないんだ。あたしはスーパー美少女お嬢様なんだ！」

「じゃあ何で屋上で叫んでたんだ？どうしてここに来たんだ？」

成瀬は熱くなっているあたしを差し置いて、いつもより落ち着いているように見える。成瀬はしばらく黙り、あたしの返事を待っている。あたしは黙っていた。言うべき言葉は解っている。自分の行動だ。その理由くらいは理解している。だけど言いたくなかった。言葉に出すと取り返しがつかなくなりそうな気がしたから。

代わりに成瀬が口を開いた。

「どうしていいか解らなかったからじゃないのか？」

「解ったようなことを言うな！」

あたしは両手で机をぶっ叩いた。成瀬は黙ってあたしを見つめている。あたしはその深い瞳に耐えられなくなって瞳をそらした。なんだか心を読まれてしまいそうで怖かったからだ。

あたしはまたいすに座り、途中だったお昼ご飯を急いで食べながら言った。

「とにかくあたしは相談することなんて何もないから」

それから成瀬は何も聞いてこなかった。あたしも何もしゃべらなかった。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴るまでの間、あたし

は成瀬を見ることができなかった。岩崎さんに早く来てほしかったのだが、彼女は結局部室に来なかった。

β18

「成瀬さんは先に部室に行ってて下さい」

ホームルームが終わるや否や、岩崎は俺にこんなことを言った。部室に行くことがもはや日常となってしまった今では、その岩崎の言葉になんら疑問を感じない。

「で、昼休みの釣果は？」

「ボウズでした」

岩崎は少し残念そうに答えたが、直後、眼に力を宿し、付け加えた。

「ですから、放課後また探してきます！」

「今から探しても無駄だろう」

前にも言ったが、普通放課後に校内に残っているやつは何らかの用事があり、それなりに忙しいやつだ。暇なやつはさっさと帰っている。つまり俺たちにかまってくれるような暇なやつはもういないということだ。しかし岩崎は意外なことを言った。

「いえ、大丈夫です。当てがあるので」

「当てだと？」

妙なこと言いやがる。その当てとやらがよほど当てになるようで自信満々に教室を出て行った。

うむ。とても嫌な予感がするな。まさか本当に見つけてくるので

はないだろうか。とりあえず、俺は部室に向かった。

部室に着き、鍵を開けて中に入る。思ったとおり、日向はいなかった。おそらく遅れて来るということもないだろう。予想通りというか、予想以上というか、やはり日向は相当なプライドの持ち主だった。これで向こうから相談を持ちかけてくるという確立はかなり減ったな。とりあえず何か問題を抱えていることも、抱えている問題についても、大体のことは解っている。

あいつは関与してほしくないと言っていたが、あいつの行動はそうは言っていない。誰かに助けてほしいのだが、助けの求め方が解らないのだ。あいつが求めてこない以上、こっちから動くしかないな。もしかしたら何かできるかもしれない。

コンコン。

部室のドアがノックされる。岩崎や日向はノックなどしない。では誰だろうか。

俺はいぶかしみながら、座るために引いた椅子をそのままにして、ドアに向かった。ドアを開けるとそこには長身の女生徒が一人、立っていた。

「岩崎さんはいますか？」

「今はいないが」

「では中で待たせてもらってもよろしいですか？」

「それはいいが、いつ来るか解らないぞ？」

「構いません。待つのは意外と嫌いではありませんので」

俺は了承し、中に通して適当に椅子を勧めた。

「飲み物は紅茶でいいか？」

「はい。ありがとうございます」

俺はティーセットに紅茶を用意し、彼女の正面に座った。紅茶を渡すと、彼女はミルクや砂糖を入れずに一口、口をつけた。

何というか、只者じゃない感じの人だな。上履きの色から三年だと解るが、はっきり言ってもっと上に見える。教育実習の教師だと言われてもなんら違和感がない。そのまま信じてしまえる。背は俺と同じくらいか、もしくはもうちょい低いくらいだが、姿勢がいい分、実際より高く見える。細いのも高く見える理由の一つかもしれない。

一つ一つの動作が洗練されていて、日本舞踊でも踊っているように見える。口調といい、動作といい、落ち着き具合といい、育ちの良さを感じる。日向とはまた違ったタイプのお嬢様のようだ。日向が欧米の現代風お嬢様ならば、この人は純和風のお嬢様っていう感じだな。腰まで伸びた黒髪にはきっと和服も似合うだろう。

「あなたはここの部員ですか？」

一口、口に含んだ紅茶を味わった彼女は、視線を俺に向け、質問してきた。

「ああ。一応書面上はな」

「書面上、とは？」

「部長氏が勝手に俺の名前を書いて提出したんだよ」

「そんなんですか。彼女ならやりかねませんね」

何やら意味深なセリフだ。この人は岩崎のことをよく知っているようだ。まあここは丁重にスルーさせていただく。

俺からも一つ質問させてもらう。

「あんたは何者だ？」

岩崎と深い仲の人間など怪しいやつで相違ないだろうから、あまり聞きたくなかったのだが、事件に巻き込まれてからじゃ遅すぎる。まあ、社交辞令でもあるな。

彼女はすっと姿勢を正して、改まった。

「申し遅れました。私は一ノ瀬晶。第六十代目生徒会長です」

何代目とか全く知らんが、確かにそう言われてみれば納得する。この人は現在の生徒会会長だ。

「生徒会長がいったい何の用だ？今更書類不備にでも気付いたのか？」

それならとっとと解散を命じてもらいたい。

「いいえ。構成員が足りていないことは最初から気付いていました。しかし岩崎さんの熱意に免じて眼を瞑りました。それに今回の私の行動に生徒会は無関係です。もちろん学校側も関係ありません」

そうか。解散はなしか。少なからずがっかりしている俺に、彼女はさらに追い討ちをかけるようなことを言う。

「今日は一人の相談者として来させていただきました」

なるほど。そういうことですか。岩崎の言ってた当てとはこのことか。なら肝心の岩崎がいないのはどういうことだ。

「それは自分の悩みか？」

彼女は悩みを他人に相談するようなタイプに見えない。彼女なら何でも一人で解決してしまえそうだ。どちらかというと他人の悩みを背負い込むタイプに見えるね。

「なぜそう思ったのですか？」

「あんたは他人に悩みを相談するほど弱い人間に見えない」

「それは婦女子に言う言葉ではないように思いますが」

「・・・次からは気をつける」

彼女はあきれたように息を吐いた。

「岩崎さんも大変ですね」

「どういう意味だ？」

意味は解らないが、なんとなくバカにされたような気がする。彼女はこの質問に対して彼女はにっこり微笑んだ。どうやら誤魔化されたようだ。

それから彼女は急に真面目な顔になった。

「あなたの言うとおり、私の相談というのはある人物の問題についてです」

「それはそいつに頼まれてやっていることなのか？」

「これは私の独断です」

「もしそいつがあんたのこの行動を望んでいなかったとしたら？」

これは俺の頭の中の誰かが何度も叫び続けている質問でもある。果たして相談されてもいないのに俺から動くのは日向のためになるのか。

「あなたも誰かの悩みを背負っているのですか？」

「さあな」

しばらく沈黙が続いた。彼女は俺の表情から俺の本心を探り出そうとしているように見える。何分そうしていたか解らないが、とても長く感じた。実際は一、二分だったと思う。

彼女が突然真面目な顔をにわかに崩し、やわらかく笑った。

「私は自分のために私のやりたいことをやるだけです。彼の望みと私の行動は無関係です」

つまりそいつが望もうが望むまいが関係なく、自分の思うように動くというわけか。

「こういう考えはお好きではありませんか？ではこういうのはいかがでしょう」

俺の無言をどう感じたのか、彼女はまた新たな考えを発表した。

「誰か個人のため、というのではなく社会全体から見たとき、どちらがいいのか。つまり社会意思によって見解を決めるのです。より多くの人によい結果をもたらすにはどういう行動をしたらいいのか、考えるのです」

なるほど。誰か個人のベストのために行動するのではなく社会全体のベターのために行動する。こういう考え方もあるな。

「あんたはどっちなんだ？自分の意思か、社会意思か」

「さあ、どちらでしょう？」

どうやらまた誤魔化されてしまったようだ。頭がいいようだが、ある意味岩崎より扱いにくい人だな。

彼女は俺の反応を見てまた柔らかく笑った。

「あなたは本当に岩崎さんの言っていたとおりの人ですね」

ちょっとむかっときた。だから言い返すことにする。

「何を言われたか知らないが、あいつの言うことをあまり信じないほうがいいぞ」

「はい。前向きに善処させていただきます」

「お二人ともずいぶん楽しそうですね」

いつの間にか岩崎が部室に入ってきていた。いつにも増して不機嫌そうである。

「岩崎さんがこの方を気に入っている理由がよく解りましたよ」

「一ノ瀬さん、そのセリフ、嬉しいけど嬉しくないです」

何やら複雑である。

適当に話してから、本題に入った。

「お二人は横山大貴という生徒をご存知でしょうか？」
「はい。あの二年生の副会長さんですよね」
岩崎は応対する。横山という生徒、確か日向にラブレターを送ったやつだ。
「そのとおりです。私と横山は幼いころからの長い付き合いでして、家族ぐるみで仲の良い関係なのです。私の彼のことを、役員とか友人ではなく家族のように思っています」
静かにしゃべる一ノ瀬の表情は少し明るい。横山との仲の良さが伺える。が、一転、泣きそうな顔をしてうつむいた。
「その横山ですが、現在警察に捕まっています」
「え？どういうことですか？」
岩崎はとても驚いているようだ。俺も少なからず驚いた。まさか警察に捕まっているとはね。一ノ瀬は俺たちの動揺を無視して自分のペースでしゃべる。
「正確には勾留なので、一般に言う、捕まっている状態とは少し違うかもしれませんが、とりあえず容疑者として警察の支配下にいます」
「いったい何があったんですか？」
焦れた岩崎は話を促す。一ノ瀬はそれに応じるようにうなずくと、顔を上げ、しっかりした態度に戻り事件の概要を話し出した。
「罪名は傷害罪だそうです。被害者は他校の生徒だったのですが、お互いの供述に食い違いが生じているんです」

「なるほど」

岩崎はいつの間にか手帳を取り出していた。供述の食い違い。たいていこういう場合はどちらかが嘘をついていると見て間違いない。普通は不利な立場である被疑者がそうである可能性が高いわけなのだが。

「私は彼が捕まってからすぐに行き、面会をしました。彼の話では絡まれていたうちの女子生徒を助けるために力ずくの行為に出たようなのです。彼の家は明治から続く柔道場の名家ですかれは二段という腕前であり正義感の強い人なので、その様子を見て、居ても立ってもいられなかったのでしょう」

「つまり被害者の他校の生徒はそう言っていないんですね？」

一ノ瀬が話しやすいように岩崎が相槌を打つ。

「はい。その生徒たちは女子生徒などいなかった、横山が突然襲い掛かってきた、と供述しているんです」

「その女子生徒ってやつは誰だか解っているのか？」

「解っています。一年生の阪中みゆきさんです」

阪中みゆき。ふむ。聞かない名前だな。同じ学年か。俺には心当たりがなかったが、岩崎は違ったようだ。

「隣のクラスの人ですね」

と説明してくれた。交友関係が広いかどうかは微妙だが、顔と名前くらいは結構知っているようだ。

「で、こいつは何と言っているんだ？」

「彼女は無関係を主張しています」

なるほどね。簡単にだが、一応現状くらいは理解できた。ここで話を元に戻そう。

「それで、あんたの依頼ってのは何だ？」

「彼を助けてほしいのです」

まあ予想はできたが。

「言っておくが俺たちは普通の高校生だ。そんな依頼は弁護士にでも頼んだらいい」

「彼は以前家族関係に問題があり、少し荒れていた時期がありました。そのときに一度捕まっているのです。相手方も悪かったということで不起訴処分になっていますが、今回は違います。さらに過去に前科のようなものもあるので真実を見ずに起訴処分にされてしまうかもしれません」

新たな情報だな。少なからず俺も岩崎も驚いた。

「起訴処分にされてしまったら彼は有罪になってしまうでしょう。ですから検察が不起訴になるように働きかけてください」

少年犯罪が横行している昨今では、暴力事件などよくあることだ。慣れてしまっている検察はあまり深く調べずに判断を下すかもしれない。この場合、矛盾的な発言をしているのは被疑者だけで、被害者の証言を有力にする証拠ばかりあるのだ。被疑者が嘘をついている、で済まされてしまうかもしれない。

「私は立場上、表立って協力できませんが、できる限りのことはし

たいと思います。だからどうかお願いします」

確かに学校側の人間である生徒会長が、いくら副会長のためとはいえ、勾留中の人間を助けるようなマネはできないだろう。学校側としてはできるだけ穏便に済ませたいはずだ。下手に掘り返してさらにやばいものが出てきたら困るだろうし。

加えて俺も困る。国家機関が関わっているような事件には断じて関わりたくない。

「お任せ下さい！」

どうすれば首尾よく断ることができるだろう、と考えていた俺の耳にこんな言葉が飛び込んできた。発言者は言うまでもなく岩崎だ。何を考えているのだろうか。おそらく何も考えていないに違いない。

「おい！解っているのか？警察が関わってきているような事件だぞ？こういうのは専門家が動くことであって一高校生たる俺たちが関わるような事件の大きさでは・・・」

「何を言ってるんですか！大きな事件だからこそやるのです！くわえて生徒会長直々の依頼。ここで断ったからＴＣＣの名折れです！」

折れても大した損害にはならないし、第一こんな誰も知れないような団体に名前も何もあったもんじゃない。

「これを解決すればＴＣＣの名前が一気に全校に轟くでしょう！一ノ瀬さん、喜んで引き受けましょう。いや、こちらからお願いしたいくらいです！」

ぶん殴ってでも止めるべきだった。岩崎の返事により、依頼受理

が決定してしまった。

一ノ瀬は、どこで入手したのか、警察の長所を置いてご機嫌に部室をあとにした。相談者第一号にしてはハードル高すぎないか？岩崎は燃えているようだが、俺はかなりダウナーな気分だった。はあ。

「何ですか？やっと待ちに待った相談者が来たんですから、ため息なんかつかないで下さい」

これから先のことを考えればため息の一つや二つ、つきたくもなる。

「あんたのせいだよ。どうして面倒な仕事ばかり持ってくるんだ。あんたのせいで俺は最近不運の連続だ」

「成瀬さんがツイてないのは私のせいではありません。それは成瀬さん自身のせいですよ。人のせいにするなんて格好悪いですねー」

こいつが余計な事をしなければこの件に関しては俺が関わる余地なんて全くなかったはずだ。

「それに一ノ瀬さん自身が相談を持ちかけてくるなんて私にも予想外でした」

また訳解らんことを言う。

「お前が連れてきたんだろ？」

「私は、生徒会に悩み相談が来たらこっちに回して下さい、とお願いしようと思っただけです」

なるほど。さっきのはすれ違いだったというわけか。だが、結局

はあんたせいじゃないかと思うんだが。

「それより成瀬さんは燃えてないんですか？」
「この面倒極まりない状況で燃えられるんだ？」
「無実の罪の人が捕まってるんですよ？これほど正義感を刺激するシチュエーションは滅多にありません。この状態でどうしたら燃えないでいられましょうか？いいえ、いられません。燃えない成瀬さんがおかしいんです！成瀬さんには正義感がこれっぽっちもないんですか？」

ほっといてほしいね。俺は自分のことで精一杯なんだよ。

これ以上何を言っても無駄だと思った俺は、おとなしく調書に目を通すことにした。

α110

あたしは迷っていた。昼休みの手前部室にはとても行きづらい。しかし行かないのもなんだか逃げたように思われる気がするし。

放課後になってもあたしは校舎内をうろうろしていた。

予想通りというか予想以上というか、やはり成瀬はすごいやつだった。あたしは何も言ってないのに結構深いところまで見抜かれている。これ以上一緒にいたら全てを見抜かれてしまうかもしれない。

いっそのこと、全てを話し、助けを求めれば、最高の形で解決してくれるかもしれない。でも成瀬には甘えちゃいけない気がする。これからもこう言った関係を続けていく上でとても大事なことに思えるからだ。

だからとは言え、逃げるつもりも毛頭ない。あたしは全てを見抜かれようと絶対に逃げない。何を言われても、そんなことはない、って誤魔化してやるんだ。

しかし今すぐ部室には行けないな。確固たる覚悟ができるまでしばらく校内をぶらついていよう。

あたしはもう何度目か解らないが、教室の前を通った。するとさっき通ったときには誰もいなかったはずの教室の中に人影が見える。あたしがとっさに、あたしの机に何かしているのだろう、と思った。

気付かれないようにそっと教室に近づき、ドアの隙間から中を覗いてみると、案の定その人影はあたしの机に何かしていた。ただ、

していた『何か』というのはあたしが考えていたのと全く逆のことだった。そいつはあたしの机をきれいに掃除していたのだ。

「あんただったんだ」

あたしはそいつに近づいて声をかけた。そいつはあたしがこんな時間までいると思わなかったのか、ものすごい驚いていた。そいつの名前は斉藤一貴。うちのクラスの学級委員をやっているやつだ。

「ひ、日向さん！何でここに？」

「それはこっちのセリフ！何でこんなことしてるの？」

「そ、それは・・・」

彼は顔を赤くしている。

「実は僕、キリスト教徒なんだ」

「え？」

いきなり何を言い出すんだ？まああたしはアメリカ暮らしが長いからあまり違和感を感じなかったが。それにしても質問の答えになってないんじゃないか？

あたしのそんな疑問は直後に解決されることになる。

彼は恥ずかしそうにしゃべり始めた。

「アメリカにいた日向さんに胸張っていえるような信者ではないんだけど」

宗教に疎い日本人がはっきり自分がキリスト教だと言える時点で、

半端な信者ではないと断言できる。中途半端な信者ならこんなにはっきりと言い切ることはできないだろう。

「口に出すのも恥ずかしいんだけど、人との出会いって神が起こした奇跡だと思うんだ。だからきっと日向さんとこの高校で出会えてのも奇跡だと思う。だから何とか助けてあげようと思ったんだけど・・・」

彼は言葉を区切り、うつむいた。泣いているのかと思ったが、再び上げた顔は恥ずかしそうにはにかんでいた。

「でも僕は弱虫だからこんなことにしかできないんだけど」

夕日に染まる教室で、彼は窓を背にしていて、あたしからは逆光だったけど、彼の表情は輝いているように見えた。

あたしは胸が苦しくなった。彼は、こんなこと、と言っていたが、彼が机をきれいにしてくれていたおかげであたしは授業を受けることだできているんだ。あたしの居場所が確保できているんだ。

「あたしは神様なんて信じてないんだけど、今日はちょっと信じたくなったよ」

意味の無い行為なんて一つもないんだ、きっと。

「今日あたしがここに来たことも、きっと、斉藤の行為を見ていた神様が導いてくれた、一つの奇跡なんだね」

斉藤一貴は顔を赤くしていた。

「そう言ってもらえると、冗談でも嬉しいよ」

もちろんあたしは冗談のつもりなど少しもない。本当にそう感じたんだ。そう伝えたかったけど止めておいた。あたしにこんなこと言われても困るだけだろうし。

「ささ、あとはあたしがやるから。今日は帰って」

「ぼ、僕も手伝うよ！」

「いいから。こんなとこ見られたらあんたもいじめられるよ」

あたしがそう言うと彼は突然動きを止めた。そして帰る支度を始めた。やはりこれ以上は無理か。いじめは怖いらしい。

ちょっと残念に思っていたら、彼はドアの前でくるっとあたしに振り向いて、

「脅迫されているだけでみんな日向さんのこと嫌いじゃないよ。もちろん僕も！」

と、言った。最後のほうは声が小さかったけどちゃんと聞こえた。

「早く帰りな。じゃあね」

あたしは彼に背を向けたままそう言った。にやけている顔を見られたくなかったから。

今度ミサにでも行ってみようかな。

β19

俺は大きく伸びをしながらパイプ椅子の背もたれに寄りかかった。夕日が赤かった窓の外もすっかり暗くなっている。

会長さんが持ってきた警察調書を一通り読んでみたが、横山は圧倒的に不利な立場にいることが解った。目撃者も横山の傷害行為を有力なものとしている。まあ突破口がないわけではないが、あまり期待できるものではないだろうな。

「おい」

俺は調書を読みながら手帳にまとめている岩崎に声をかけた。岩崎は顔を上げる。

「何ですか？」

とても嫌な顔をされた。作業を中断させたのがいけなかったようだ。俺は気にせず言う。

「調書を見る限り、横山の無実を立証するのはかなり難しいぞ。どうするつもりだ？」

「むー、とりあえず阪中さんにアプローチしてみましょうか。あと横山さんにも」

ふむ。こいつにしては悪くない考えだ。だが、マイナスにならない、というだけでこの行動がプラスに繋がるかというと必ずしもそうはならない。

「そうですねー、横山さんは日向さんに任せておきましょうか。私たちは阪中さんですね。今日は遅いので明日から具体的に動きましょう」

やけに楽しそうに見える。やっと依頼が来たから舞い上がっているのか、難関だから燃えているのか解らないが、とりあえず誤った判断を下しそうな状態ではあるな。

あと日向のほうだが、協力してくれるだろうか。来るかどうかも不明なわけだし。

「そういえば日向さんはどうしたんですかね」
「さあな」
「何か知っているような雰囲気ですね」

この時折異常なくらいに鋭くなるのはなぜだろうか。その辺の構造について詳しく知りたいのだが、こいつのことなどどうせ理解できないので聞いたりはしない。そして俺は日向のことでこいつに話すことはない。今のところは、まだ。いずれ協力してもらうために話す日が来るかもしれないが、それは今ではない。

予想どおり俺の無言に対して岩崎は、機嫌が悪くなったが。

さて。これから先、来るか来ないか決めるのはあいつであって俺ではない。つまり俺がどうこう考えたところで全くの無意味。考えることは他にある。

しかし急に忙しくなってきたな。抱えている問題はまだ解らないことの方が多いし、横山のことに関しては期限が決められている。

やれやれだ。

それから不機嫌な岩崎を適当に丸め込み、六時を過ぎた辺りで下校した。

α－１１（前書き）

これは
「偶然という名の奇跡」の続編です。前作を読まなくても十分楽しめますが、より楽しむために前作を先に読まれることをお勧めします

α111

あたしが机の掃除を終えるともう外は真っ暗になっていた。ふう、疲れた。

あたしは掃除をしながらずっと考えていた。つまらないやつばかりだと思っていたこの高校もよくよく見てみるとなかなか捨てたもんじゃない。そんないやつらが、今のあたしみたいな目に合うなんて考えられない。あたしみたいに心が強い人ばかりではないはずだ。こんな子供みたいないたずら、あたしは一切相手にしない。でも、バカみたいに心を悩ませている人だっているかもしれない。それ以上に無視され、村八分にされることが何よりつらいだろう。そんな人がいるのは耐えられない。

あたしは自分が体験してみて解った。集団で無視されることのつらさ。バカにされることのつらさ。それに加えて、普通の幸せのありがたさ。人に差し伸べられた手の暖かさ。だからあたしはこんな人たちを助けてやりたい。困っている人たちに、悩んでいる人たちに手を差し伸べてやりたいんだ。最初にＴＣＣに訪れたときは岩崎さんに言った言葉はかなり曖昧だったけど、今度は違う。あたしは積極的に助ける側の人間になりたいんだ。

よし！気持ちの確認終わり！早速部室に行って成瀬に啖呵切ってやりたいけど、もういないだろうから、今日のところは帰るとしよう。明日からはちゃんと部室に行こう。

気合を入れ直したあたしは電気を消して、教室をあとにした。

β110

さて、最初の相談者が来てとうとう動き出した我々ＴＣＣは、アクション第一弾として調書の裏付けが行われようとしている。最初に生徒会副会長横山大貴と、その横山が救出したであろう少女、阪中みゆきだ。

岩崎は阪中を捕獲しに、彼女の元へ行った。なぜかというと現在は放課後で、阪中は帰宅部だからである。時間上の問題から事情聴取は必然的に放課後にしか行えないわけだし、放課後になれば帰宅部阪中が帰ろうとするのは必然的のこと。しかし俺たちの立場では帰ってもらっては困る。だから捕獲である。

というのは、岩崎の説明である。放課後にやるのが必然なら事前にアポ取っておけばいいはずだ。それに言うに事欠いて捕獲はないだろう。せめて任意同行にしておけ。人権侵害を訴えられたらどうするんだ。

岩崎が出て行ってから結構な時間が経った。そろそろ帰ってくるだろうと思ってた矢先、部室のドアノブが動いた。

「なんだ、あんたか」

俺がそう言うと入ってきた人物は、

「何だとは何よ。なんか文句でもあるわけ？」

と、不機嫌そうに応答した。

日向だった。しばらく来ないかと思っていたが、意外に早く復活したな。

「今日はどういったご用件ですか？」

「し・つ・こ・い。あたしは相談を受ける側の人間だ」

どうやら昨日何かあったらしい。何があったか知らないが、不安定だった意思が固まっている。

「それなら丁度いい。あんたにやってほしいことがあるんだ」

「・・・依頼あったの？」

驚いているようだ。まあ俺もそうだが。未だにこの事実を信じることができない。デキレースという解釈のほうがまだ信じられる。

とりあえず俺は日向に簡単な事件の概要を説明した。

「へえ。なんだかややこしい事件だね。それで、あたしは何をすればいいの？」

「あんたには横山の話を聞いてきてもらいたい」

「解った。で、主に何を聞いてくればいいの？」

「事件の概要でいい。あとは横山の気持ちとか思惑とか、そんな感じの主観的な話を聞いてきてくれ」

「了解。じゃああたしはもう行くね」

そう言うと自分の荷物を持ってさっさと部室から撤退した。なんだか知らんが、相当やる気になっているようだ。昨日のように動揺

がない。岩崎のやる気が伝染したんだろうか。まあ俺は俺で独自にやらせてもらうとしよう。

不意にドアの向こうが騒がしくなる。そしてドアが開いた。

「遅れましたー！」

そう言って入ってきたのは岩崎だった。岩崎の右手の先には手首を掴まれて少し怯えている、大人しそうな女子生徒がいた。

俺の横に岩崎が座り、その正面に女子生徒が座った。そしてそれぞれの目の前にはティーカップ。いつの間に買っていたのか、茶葉はオレンジペコである。

岩崎がコホンとわざとらしく咳払いをして、その場を仕切り始めた。

「初めまして。申し遅れました。私はＴＣＣ部長の岩崎です。この人は成瀬さんです」

無駄に大きな声を出して自己紹介をした。そして右手の手のひらを上に向けて彼女に差し出した。『今度はあなたの番ですよ』という意味らしい。

彼女はしばらく困惑したようにおろおろしていたが、何とか意味を理解したようで、

「えっと、阪中みゆきです」

と言って、軽くお辞儀をした。

「今日お呼びしたのは他でもありません！」

さらに声を張り上げる岩崎。阪中みゆきと名乗る少女は必要以上に怯えている。これじゃまともに話を聞けないだろう。

「少し落ち着け」

立ち上がろうとしている岩崎を制して、いったん場を落ち着かせる。阪中は少し安心したようだ。

「あんたに聞きたいことは横山大貴についてだ

表情が変わった。どうやら初めて現状が理解できたようだ。

「警察にも質問されたかもしれませんが、もう一度私たちの質問に答えてください」

今度は岩崎が俺を制し、阪中に話しかけた。仕切り役を取られたくないようだ。俺は争う気など全くないので、あっさり譲ることにする。

「横山さんはあなたを助けるために被害者である他校の生徒に暴力を振るったそうですね。それは本当ですか？」

「いいえ。私は無関係です」

「午後五時頃、事件があったとき、あなたは何をしていましたか？」

岩崎は事情聴取のように話を進めていく。

「友達を一緒にいました。下校途中でした」

岩崎は手帳を見ながら阪中の答えを聞いている。そして俺のほうに顔を向けると小声で、

「調書どおりですね」

と言った。阪中はおどおどしている様子とは打って変わって、きっちり返事をしてくる。一度聞かれていることだから、というだけではない気がする。俺から質問。

「横山はあんたのことを助けたとはっきり証言している。以前から交友はあったのか？」

「私は副会長であるということだけしか知りません」

これも即答だな。ちなみにこの答えも調書どおりだ。

「じゃあ何で横山はあんたの特徴を正確に答えることができたんだろうな」

「私には解りません」

阪中は部室に入ってから一度も俺の目を見ていない。

「それはそうだが、横山があんたを示したのは何でだろうな」

「・・・」

「そのときそこにあんたがいたからじゃないのか？」

この質問に対して、阪中は突然立ち上がり、

「わ、私用事を思い出したので、あの、帰ります」

「え？ちょ、ちょっと！」

岩崎が止めようとしたが、俺はそれを制した。

「悪かったな。無理矢理連れてきたりして」

そう言って阪中の帰宅を促した。

阪中が部室を出て、その足音が消える。そこで岩崎がため息をついた。落胆を感じさせる。

「結局調書以上のことは得られませんでしたね」

「まああまり期待していなかったが」

横山に有利な証言は横山自身の口からしか出てきていない。

「やっぱり横山さんが嘘をついているんですかね？」

岩崎が独り言のようにつぶやいた。はっきり言ってその解釈のほうが納得できる。だが、そうできないのが俺たちの立場だ。

「そうだとしたらさっきの俺の質問はどうなる？」

横山は助けた女子生徒の特徴をしっかり上げているのだ。さらにその特徴と見事合致した人物がいるのだ。そして当事者二人の間に交友はないと互いに証言している。ならなぜ横山は阪中みゆきを示したのか。

「それはそうですが・・・。成瀬さんはどうお考えですか？」
「とりあえず横山の証言を信じるしかないだろう。そう考えると、嘘をついているのは阪中・目撃者・被害者ということになる」

はっきり言って信じ難い。

「被害者が嘘をつくのは解ります。自分たちの罪を隠せますし、自分たちに恥じを掻かせた人物に仕返しができますからね。でもなぜ阪中さんと目撃者が嘘をつくのでしょう。特に阪中さんは絡まれていた人物を庇い、助けてくれた人物を罠にかけているのでしょうか？」
「嘘をつくことに何らかのメリットがある。または真実を言うことに何らかのデメリットがある、のどちらかだな」
「嘘をつくことにメリットがあるというのは、つまり横山さんを警察に送りたかったということですね？」

そういうことだ。簡単に言うと復讐だ。これの場合、黒幕は阪中でほぼ間違いない。本来なら被害者である阪中が中心でないと、この説はありえないからだ。おそらく加害者を庇うというデメリット以上のメリットが嘘をつくことで発生したのだろう。あるいは被害者である他校の生徒もグルかもしれないな。

「では真実を言うと発生するデメリットというのはどういう状態のことですか？」
「簡単に言うと脅迫だな」

岩崎は少し考える顔をしてから、なるほど、とうなった。

「つまり阪中さんが真実を言うことで不利益を被る連中から圧力をかけられているということですね」

そういうことだ。一番解りやすいのは阪中に絡んでいた連中が黒幕であるという見解だが、この説には少々無理がある。

「そうなると阪中さんに絡んでいた他校の生徒ではないように思えますが」

意外なことに岩崎も同じ考えに辿り着いたようだ。

ナンパを邪魔された上に、返り討ちに遭い、ボコボコにされた。復讐するには十分な動機だが、如何せん時間が足りない。これは結構大掛かりな小細工だからそれなりに時間が必要だ。少なくとも、阪中については、真実を言わないように脅さなければならない。そして目撃者がいたならばそいつらも脅さなければならない。つまりこの説の場合はまだ見ぬ誰かが黒幕ということになるな。

「これから何をしたらいいんでしょうか？」

「そうだな。阪中と横山の情報を集めよう。徹底的にな」

「なるほど。やってみましょう」

果たしてどうやって集めるんだろうか。興味はあったが、違法な手段であるような気がして聞かないでおいた。

日向には直帰を要請して今日のところは解散することにした。

α112

あたしは成瀬の指示を受けてからすぐ動き、今警察にいる。なかなか面会の許可が下りなかったが、奥の手として自己紹介をしてやった。そのあとはスムーズに事が運び、今は横山を待っている状態である。

成瀬の話を聞いただけだが、あたしの直感は横山の無実を主張している。

いくら通学路とはいえ、目撃者が全員うちの生徒というのはおかしい。あと例の女子生徒の証言もおかしい。根拠としては弱いわけだが、そこまで考えたところでガラスの向こうのドアが開き、警官に両脇抱えられた横山が登場した。あたしは立ち上がり、軽く頭を下げた。横山は驚きを隠せないようである。

「驚いた？」

あたしはそう言って、また椅子に座りなおした。あたしの言葉に正気を取り戻した横山はため息をつき、ガラス越しにあたしの正面に座った。

「かなり驚いたよ。まさか君が来てくれるとはね」

「嬉しいでしょ？最愛の人が来てくれて」

「正直微妙な心境だね。来てくれたのはとても嬉しいが、君には知られたくなかった」

そう言って、横山は悲しそうに眼を伏せた。この人は本当にあた

しのことを好いてくれているのかもしれない。
「ラブレターの件だが、もう忘れてくれていい」
「どうして？」
理由は聞くまでもないだろう。
「無実ではあるが、こんなところに入っているんだ。君を好きだという資格すらない」
相当律儀な男のようだ。こんな男が理由なく暴力を振るうとはとても思えない。
「それはあたしが決めることだよ。何があったのか教えてくれない？噂でしか知らないんだ」
もちろん話の概要はかなりディープなところまで理解している。だが、今日いったい何の用で来ているのかは言わないほうがいい気がした。
「あたしには知る権利があると思うんだけど」
「そうだね。君には誤解されていたくない」
そういって話し出した。
横山は家が道場なのだが、部活も空手部に所属している。横山はその日、部活を休み、生徒会の仕事をしていたという。六時から道場の会合があったため、部活は早退しようと考えていたらしいのだが、どうせなら、ということで、休みを取り、普段顔を出せていない生徒会のほうに赴いたようだ。仕事を終えたのが、午後五時前後。

問題なく会合に間に合う時間だったのだが、駅までの道のりで遭遇した。

三人の男が一人の女子を囲んでいた。四人とも高校生らしく、制服を着込んでいた。男三人は知らない制服だったが、女子は自分と同じ高校の制服だった。

「僕だってバカじゃない。ただのナンパならただ前を通り過ぎただけだっただろう。だけど彼らは実力行使に出たんだ」

そこまで見ていた横山は止めに入った。突然邪魔された男たちは激昂した。だが、横山は殴りかかってくる男たちをあっさり片付けたようだ。

そのあと、女子生徒は礼を言い、帰っていったという。

「その直後、誰かが通報していたようで、警察がやってきて今に至る」

横山は深くため息をついた。横山の行動は間違いなく暴力行為であり、三人とも軽傷とはいえ、怪我を負ったのはまぎれもない事実。しかし三人から手を出してきたのだったら正当防衛が十分成り立つはずだ。

「助けた女の子のことはどうしたの？言わなかったの？」

「もちろん言ったさ。彼女の身元も解り、すぐに証言も取りに行ったはず」

「じゃあ何で？」

「彼女は事実を否定したんだ。自分はそのときそこにいない。絡まれてもいないし、助けられてもいない、とね。目撃者も三人いるのだが、なぜか三人とも僕から仕掛けたと証言しているんだ」

圧倒的に不利な立場だ。どう考えても横山が嘘をついているとしか思えない。

「正直な話、信じてもらえないかもしれないが、僕は嘘をついていない。今自分がなぜここにいるのか、一番解っていないのは僕自身だ。誰かにハメられているとしか思えない」

それだ。この流れ、誰かが横山を罠に嵌めているとしか考えられない。今のところ、それを行うことができる最たる人は例の女生徒か。

「助けた女の子とは面識あったの？」
「いや。まるで知らなかった」
「じゃあなんで身元が解ったの？」
「似顔絵を描いてもらった。そこから身元が判明したんだ」
「なるほどね。あんたが知らないうちに恨みを買うようなことしたんじゃないの？」
「全くないとは言えないけどね」

あたしは冗談で言ったんだけど。まあ全くないと言えるやつがいたら、そいつはナルシストでかなり高確率で人に迷惑かけながら生きているね。

「事情は解った。とりあえずあんたの言うこと信じるから」
「ありがとう」

あたしは部屋を出ようとしたが、不意に思い出したことがあって、振り返った。

「ラブレターのことだけど、本当に忘れていいの？」
「ああ、忘れてくれ。今の僕は君に相応しくない」
「あんたが忘れてくれって言うなら忘れるけど、それって少しおかしいと思うよ」

横山は、あたしの言っていることが理解できないというような顔をした。あたしは気にせず続ける。

「あんたはあたしにどういうところを好きになってほしいの？格好つけてるところ？そうやって偽っているところ？勾留された人は告白しちゃいけないの？あたしはそうは思わない。冤罪ならなおさらだ。あんたは胸張って何度でも言うべきなんだ。自分は無実だと。あたしは相手の立場とか身分とか肩書きとか気にしない。それは相手にあたしの身分とか立場とか肩書きとか気にしてほしくないから。今の状況、格好悪いとか思ってるなら、お生憎様。そういうプライドも大事だと思うけど本当に大事なものは何なのか、もう一度考え直したほうがいいよ。忘れてくれって言ってたけど、こっちから願い下げだね。今のあんたは最低だよ」

一気に言ってやった。言い過ぎたなんて思わない。あたしはそういう性格だし、本当にそう思ったからだ。でも本当にどうでもいいやつにはこんなこと言わない。

あたしがドアを開けると、横山があたしの背中に話しかけてきた。

「今の僕は忘れてくれていい。もう一度告白するから。もちろん、不起訴でここを出てからね」

あたしは振り返り、微笑みだけで答え、ここを出た。

それから岩崎さんからのメールを見てから直帰した。

β111

明けて翌日。俺は懲りもせず部室に来ている。これからやることは、昨日行ったそれぞれの事情聴取のまとめである。ちょうど今終わったところなのだが、現在の状況は、

「・・・」
「・・・」
「・・・」

早い話が三人とも黙り込んでいる状態である。二人は何を考えているのか知らないが、きっと考えすぎなんだよ。難しく考えてもはっきり言って現状は変わらない。

「とりあえず全面的に横山の言っていることを信じるとする。そうなるとおかしいのは何だ？」

黙っているよりはましだろう。せっかく三人で集まっているのだから、意見交換したほうがよっぽど有意義だ。

「そりゃあ、例の女の子と目撃者でしょう。三人組のほうは適当に嘘をつく理由があるけど、女の子と目撃者にはないからね」

まあ普通の意見だな。

「確かに目撃者の人たちが嘘をつく理由はないかもしれません。でも阪中さんは解りませんよ？」

それは昨日俺が言った意見だな。日向は驚いた表情になり、岩崎に質問した。

「阪中？阪中みゆきのこと？」

「そうですけど。言ってませんでしたっけ？」

「聞いてないよ！例の女の子って阪中さんだったの？」

「そういえば日向さんは阪中さんと同じクラスでしたね」

そうだったのか。それでこの驚き様だったわけだ。

「それでさっきの岩崎さんが言ってたことはどういうことなの？」

日向が話を元に戻した。

「阪中さんが横山さんを恨んでいる場合です。横山さんもその可能性を否定していません」

「それあたしも考えたけど、冤罪で警察に突き出すって、相当恨んでるでしょ？無意識のうちにそんなに恨まれるようなことするかな？」

横山には誰かに恨まれているという自覚はない。恨みを買うような行為を取っていないのにもかかわらず、阪中から恨みを買ったということになる。つまり横山の無意識の行為によって、阪中が恨んでいるということになる。さらに横山は阪中のことを知らないと言っている。可能性は限りなくゼロに近い。

「かと言って目撃者が黒幕というのも考えられないと思うんですけど」

「確かにそうだね」

事件の当事者は通報後すぐに事情調書を受けるが阪中と目撃者は時間差がある。だから目撃者には阪中を脅迫する時間がある。しかし目撃者は阪中を探さなければならないし、他にも目撃者がいたかも解らない。

「そう考えると一番簡単な見解は事件に無関係な人物が黒幕だということだね」

そういうことになるな。ところで、

「阪中ってどういうやつなんだ？」

「んー、あまり知らないけどいい子だよ。大人しくて気が弱いところがあるけど素直で真面目だと思う」

「人を恨んで罠に嵌めたり、誰かを脅迫したりするやつか？」

「それはないと思うよ」

まあ、俺も直感でそう感じたが。

「そうだとすると阪中は脅迫されている可能性が一番高いな。問題は誰が脅迫しているかだな」

「それはやはり被害者の仲間とか？ひょっとしたら目撃者も仲間だったりするかもしれませんね」

岩崎が言っていることは、被害者と目撃者がグルということだ。もしかしたら横山を嵌めるために、阪中を襲ったのかもしれないな。

「もしくは真犯人は一人でそれ以外の人間はみんな脅迫されているだけかも」

岩崎の意見に付け足すように日向が言う。なかなか頭がいいな。

この場合も計画を練ってからの行動だと思える。事後にシナリオをでっち上げるのはほぼ不可能に近い。何にしても横山をターゲットにした計画だろうな。横山の下校を狙って網を張れば、できなくはない。だが、とても面倒な計画だ。よほどのマイナスな感情を横山に対して持っていた、ということか。
そこまで考えてから、俺はふと時計を見た。時刻はすでに五時半を回っていた。

「もうこんな時間か」

俺の言葉につられて二人が時計を見る。

「あっ！」

日向が叫んだ。

「ど、どうかしましたか？」
「あたし用事あったんだ！先帰るね。また明日」

そう言うと、日向はあわてた様子で荷物をまとめ、部室から出て行った。

α113

あたしはあわてて部室を出ると、少し早足で歩いた。この事件に興味がないわけではないし、少なからず知り合いも関わっているから解決してあげたいが、今日のところはこれ以上意見出そうにないし、あたしの考えではまだまだ情報が足りない。だから今日はこの辺でお暇させていただくことにしよう。

こんな言い訳じみたことを考えながら、あたしが向かっているのは教室だ。昨日はすっかり忘れてしまっていたが、斉藤が来ているかもしれない。これからは自分で掃除しようとしていたのだ。今日こそ行かねば！そう思うと、あたしは自然に小走りしていた。

教室に着くと、案の定、斉藤がいた。すでに掃除を始めていたようだが、不幸中の幸い、まだ始めたばかりのようだった。

「本当に変なやつだね、あんたは」

あたしは少し呆れたような口調でこう言った。

「ああ、日向さんか」

斉藤は手を止め、振り返ってあたしを確認した。あたしは近づき、斉藤から雑巾を奪った。斉藤は驚いている。

「もういいから。あとはあたしがやるよ」

「僕も手伝うよ！」

「いいから。あんたもこうなるよ？」

あたしは自分の机を指さす。

「・・・別にいいよ。それよりも大事なことだ」

この前とは違う態度の斉藤に驚いた。こいつも覚悟を決めたらしい。きっとあたしが何を言っても揺るがないだろう。あたしはそんな斉藤を見て、

「そう」

としか言うことができなかったが、内心はすごく嬉しかった。

それからあたしたちはお互い口を利かなかった。あたしはあたしで恥ずかしかったし、こいつもこいつで恥ずかしかったのだろう。

さすがに二人でやると仕事が早く、太陽が完全に沈む前に終わった。

「あー、疲れた」

「うん」

「今日はありがとね」

「うん」

やけに口数が少なくなってるな。何か話しかけるのも億劫になってきた。だからあたしと斉藤は向かい合ったまま、黙り込んでいた。

「何してんだ？」

この沈黙を破ったのはあたしでも斉藤でもなかった。ドアの外に

見える人影がその声の主であるようだ。聞き覚えがあるな。と、思ったのと同時に嫌な予感がした。

ドアの外にいる人物は動かなかったが、もう一つ人影がやってきてあたしに向かって、

「あれ？日向さんじゃないですか！まだいたんですね」

と言った。嫌な予感が見事的中した。この状況を見られたくないランキング一位二位コンビだ。最悪だ。身体中の汗腺という汗腺がフル稼働した。それと同時に頭をフル回転させた。何か言い訳を考えなければ！

この状況を見られたくないランキング同率二位の岩崎さんが教室の中に入ってくる（ちなみにもう一人の二位はいじめの黒幕。誰かは知らん）。それにランキングダントツ一位の成瀬が続く。

「えーっと、忘れ物取りに来たらこいつがまだ掃除してたから、ちょっとその手伝い。ねっ？」

あたしは斉藤に同意を求めた。というか眼で威圧した。斉藤はあたしの意図を理解したのか、マジでびびったのかは知らないが、首を縦に振った。

岩崎さんはそいつがいることに初めて気が付いたようで、

「あなたは斉藤一貴さんですね？」

と言った。マジでいろんな人の名前知ってるんだな。まさか全校生徒知っているんじゃないだろうね。

「私も手伝いましょうか？」
「ああ、もう終わったから平気だよ」
岩崎さんの言葉に応対しながら、あたしはびびってた。成瀬の沈黙が怖い。何か言われるのも怖いが、黙っていられるのもかなり嫌だな。
「あんたの言ってた用事っていうのはもういいのか？」
やっぱ黙っててもらったほうがいいな。
「あー、あれね。もういいや。大したことじゃなかったし」
「やたら急いでいたように見えたが？」
本当に嫌なとこつくな。あたしが返答に悩んでいると、岩崎さんが変わりに答えてくれた。
「成瀬さん、人の予定をあまり深く聞くのは良くないですよ。プライバシーの侵害です。まして女の子に対して、デリカシーのかけらもありません！」
ちょっと的外れだけど、岩崎さんありがとう。
「そういうこと。あまり詮索しないでほしいね」
成瀬は聞いているのかいないのか、今日室内をきょろきょろと見回し、最終的にあたしを通り越してあたしの机を見て、そして斉藤を見る。じーっと見ている。二人が来てから黙り続けている斉藤は少しびびっている。そして成瀬は口を開く。

「お前、神って信じるか？」
「えっ？」
突然何を言い出すんだ、こいつは。いったいどんなプロセスの上にこの質問が生まれたのだろう。だが、聞かれた本人の斉藤はそんな疑問一切感じないようで、
「はい」
と、即答した。
「じゃあ奇跡は？」
「信じます」
「そうか」
成瀬の発言の意図は全く解らない。しかし成瀬はそんなことお構いなしって感じで、
「じゃあ俺は帰るから。掃除もほどほどにしてろよ」
と、言い残してさっさと教室から撤退していった。岩崎さんも、あたしたちに軽く頭を下げると成瀬のあとを追っていった。
「じゃあ僕たちも帰りましょうか？」
しばらく呆けていたあたしに斉藤がこう言って、自分の荷物をまとめ始めた。一つ聞いてみることにする。
「あんた、成瀬と知り合いだったりする？」

「いえ。今日初めて話しました」

やっぱりか。初対面であの質問をしたのか？理解できないね。何か意味があったのだろうか。ついでにもう一つ。

「岩崎さんのことは知ってたの？」

「いえ。顔くらいしか」

こちらも予想通りだ。あたしも自己紹介なしで名前言われたからな。探偵みたいな人だな。

あたしたちは適当に会話をしながら帰路についた。

β112

横山の傷害事件の調査を始めてから数日が経過した。調書の裏取りも終了したが残念ながらというかやはりというか、横山に有利な情報は出てこなかった。

「目撃者のほうも被害者の方も調書と同じ証言をしていて矛盾していなかったんですか？」

「ああ」

「八方塞だね」

現在部室にいるのは、俺・日向に加えて生徒会長が来ていた。で、岩崎はいない。いったいどこへ行ったのやら。

「現在の状況は当初と何ら変わっていない。横山が苦し紛れに嘘をついているという解釈が一番妥当だ」

「確かにそうだね」

「阪中さんが言っていた友人のお話も聞いたんですよね？」

「ああ。阪中と全く同じことを言っていた」

「そうですか」

会長は息を吐いて肩をおろした。依頼を受けたときよりも弱々しく見えるのは気のせいではないかもしれない。

「で、実際あんたはどう思ってるの？」

日向は俺に聞いているらしい。

「ほぼ確実に起訴だな」

問題になっているのは正当性についてで、実際横山は暴力を振るい、けが人が出ている。それについて横山自身も認めているんだ。阪中の存在については先ほど言ったように嘘をついているか、あるいは勾留されたことで頭がいかれたか。そんな解釈で十分だ。

「ほぼっていうことはまだ絶対じゃないんだよね？」

二人とも何かを期待しているような眼で俺を見ている。二人の立場じゃ、横山を助けたいんだろうが、絶対と言い切らないことに大した理由はない。何にしても自分の考えに絶対だと言えるほど俺は俺自身を信じちゃいない。

「なにか引っかかっていることがあるんですか？」

「あえて言うなら証言が調書に忠実すぎる」

二人の頭の上に疑問符がともる。

「それって当たり前のことなんじゃないの？」

「当たり前と言えば当たり前だがここまで忠実だと逆に不自然さを感じる」

どいつもこいつも調書に載っている質問には即答してくる。まるでマニュアルがあるかのように。横山が突然襲ってきた。少女なんていなかった。誰に聞いてもこう答えている。一字一句違わずに。そして調書にないような質問に対しては口ごもり、誤魔化しながら話し、最終的に何が言いたいのか解らないような回答しか得られていない。

「その不自然さを解消しようとすると・・・」

「誰か黒幕がいて、そいつが台本を作っているんだ！」
「つまりあらかじめ聞かれるであろう質問に対して回答を用意していたということですね！」

俺が言わんとしている内容をいち早く理解してくれたようだ。だが、はっきり言ってこの考えは突飛過ぎる。やはり机上の空論的な感じがする。

しかし二人はこんな俺の心までは察してくれなかった。先ほどとは打って変わって元気になっている。

「確かにそう考えると横山の言うことも信じられる！」
「そうですね。予期していなかった質問に対して口ごもるのもそう考えると納得できます！」

この二人は確率論と言うものを知らないのだろうか。はっきり言ってこの説が真実である確率なんて数%でしかない。それがどの程度発生しにくいものなのか理解していればここは喜ぶところではないことなんて容易に解るはずなのだが。どう言ったら現在の状況を理解しくれるだろうか。

俺が臨時的算数の授業を始めようとしたとき、荒々しく部室のドアが開いた。

「ど、どうしたの？」

驚いた日向が思わずイスから立ち上がる。会長も日向同様、とても驚いている。俺もだ。

そいつは岩崎だった。岩崎は肩で息をしていて、手を膝に当てた

まま返事はない。何かただならぬ雰囲気である。他の二人も同じ空気を感じているようでどこか緊張した面持ちで岩崎を見つめている。

「何があったんだ？」

俺が改めて聞くと、息を整えた岩崎が顔を上げ、答える。

「また傷害事件が発生しました」

部室内が沈黙に包まれる。またか。横山の事件からまだ数日した経過していないのに。

「またうちの生徒か？」

「はい。それが・・・」

岩崎はつらそうな顔をして、言葉を切った。どうやら知っているやつのようだ。

「誰だ？」

「斉藤一貴さんです」

「えっ！」

真っ先に反応したのは日向だった。

「それ本当？」

「はい。通学路に血まみれで倒れているところを発見されたそうです」

「病院の場所は？」

「駅前の市立病院です」

近いな。急げばここからでも五分で行ける。

「成瀬！」

日向が叫ぶ。ああ、解ってるよ。横山の事件に関係あろうとなかろうとそんなもんはどっちでもいい。後回しだ。

「行こう！」

俺の言葉に三人はうなずいた。

α114

あたしたちが病院に着いたとき、斉藤はＩＣＵに入っていた。病院にはすでに何人かの生徒、教師が来ていた。しばらくして斉藤の両親らしき人も来た。岩崎さんと一ノ瀬さんはあわただしく動き回り、発見当時の状況や斉藤の様子などを聞いていて、警察関係者が到着したころにはすっかり情報収集を終えていた。

あたしははっきり言ってそれどころではなかった。ＩＣＵの前をずっとうろうろしているだけだった。頭の中がごっちゃごちゃになってパニクッてたけど、それでも成瀬があたしの近くにいたおかげでまだ落ち着けていたと思う。

いったい誰が？何のために？何で斉藤が？この三つの疑問があたしの頭の上をぐるぐる旋回していた。だけどあたしの頭は現在まるっきり役立たずで何一つ有益な答えが出てこない。成瀬はいったい何を考えているんだろうか。成瀬を見るとさっきからほとんど動きがない。何やら考えているようなのだが、口を開く気配がない。

「ねえ、いったい誰がこんなことを？何で斉藤が？」

「俺が知るわけないだろう」

その答えにあたしはキレた。

「なんであんたはそんなに冷静なんだ！」

大声を出すとさらに頭にきた。表情を全く変えない成瀬に。斉藤のことより犯人探しを優先した岩崎さんと一ノ瀬さんに。事件を未然に防げなかった警察と学校に。

何もできないあたしに。

「あんたは心配じゃないのか！悔しくないのか！腹が立たないのか！」

「少し黙れ」

成瀬は低い声で言い放った。あたしは成瀬の迫力に圧倒された。いつものこいつとは違う。あんた、もしかして怒っているのか？

成瀬は少し考え込むような顔をしてから静かに口を開いた。

「俺が高校に入学してからこんな事件は一度もない。にもかかわらず、この数日間で二件も続き、事件に関わった生徒は十人弱にも上る。どう考えてもこの二つの事件は何か関係があるはずだ」

成瀬の口調は誰に言うわけでもなく、自分の考えをまとめているように感じる。

「おおよそタイプの違う二人がなぜ狙われたのか、絶対に何か理由があるはずだ」

何でこいつはこんなに必死になっているんだろうか。あたしにはそれなりに理由がある。斉藤には世話になったし、それなりに仲良くもなった。横山はあまりよく知らないし、親しくもないが、真面目に告白してくれたし、いいやつだということも解った。

だが成瀬は？成瀬にはこのどちらとも接点がないはずだ。表情はいつもと変わらないし、声色も多少低いくらいでさして変わりはない。ただ、何というか、成瀬の身体からプレッシャーにも似たオー

ラが放たれていた。

「あんた何か知らないか？」

成瀬はあたしに問いかけた。あたしは声を発することができず、ただ首を左右に振ることしかできなかった。

成瀬は、そうか、というとまだ黙り込み、一人思考の旅へと出かけてしまった。

このとき、あたしは知っていたのだ。横山と斉藤の共通点を。二人が狙われた原因を。ただ、知っていたというだけで、それが共通点であり、原因であるという自覚をしていなかったのだ。あるいは無意識に気付くことを拒んでいたのかもしれない。

これは成瀬が知らないことで、あたしが黙っていたことで、あたしが意地など張らず最初から話していたら、もっと早く気付いていたら、こんな事件発生しなかった。そのことが発覚したのはもう少しあとのことだった。

二時間くらいしたらＩＣＵのドアが開き、斉藤とともに担当の医師が出てきた。命に別状はないがしばらくは危険な状態であり、面会謝絶が解けるのは当分先になるということを聞いたあたしたちは、これからの予定を軽く話し、病院をあとにした。

α115

みんなと別れて、一人家に向かう道中、あたしの頭はパニクッていた。さまざまな感情が渦を巻いていた。怒り、悲しみ、混乱。それらとともに疑問符が仲良く頭の中でぐるぐる回っていた。先ほどの疑問は何一つ解消されていない。あいつが誰かの恨みを買うようなやつとは思えない。あれほど人畜無害なやつも今どき珍しい。そんな斉藤がどうして・・・・・。

ＩＣＵから出てきた斉藤は全身包帯だらけだった。相当痛めつけられたに違いない。それに成瀬だ。成瀬の様子も気になる。成瀬は結局あれから一言も口を利かずに帰っていった。いつもクールなあいつがなぜあんなに熱くなっていたんだ？

あたしは自ら疑問符の数を増やし、さらに頭の中に余裕をなくしていた。だからこいつの接近に全く気付くことができなかった。

「よう」

あたしは後ろから声をかけられて飛び上がりそうになった。振り返ると、久しぶりの登場、スーパーナルシスト野郎の山内が立っていた。暗いせいか、いつもと雰囲気が違く見える。

「なんだ、あんたか」

「何だとはご挨拶だな」

マジでどうでもいい。こいつと会話するならまだピーマンと会話したほうがまだ有益な気がするね。頭の中を空っぽにする方法とか

教えてくれそうだし。

何の用か知らなかったが、こいつ自体に興味のかけらもないあたしは、きびすを返して再び帰路に戻った。

「待てよ。少しくらいしゃべろうぜ」

「あんたとしゃべることなんて何もないね」

あたしははっきり言ってやった。こんなやつに構っている時間ない。まあ時間があっても構ってやらないと思うけど。

「冷たいな」

「・・・・・・」

「そういや今までどこに行ってたの？」

「・・・・・・」

「駅前の市立病院？」

「・・・・・・」

こんな感じでしつこくあとを追って話しかけてくる山内を、あたしはひたすら無視し続けていた。こいつ、いつまで付いて来るんだろうか。いい加減止めていただきたいね。

「もしかして斉藤のお見舞いとか？」

しかしなんでこいつこんなに的確に要所をついてくるんだろうか。あたしは無表情だし、もちろん一言もしゃべっていない。ヒントになるようなことは何一つしていないと思うんだが。

まさか・・・・・・。

「斉藤の容態はどうだった？あの様子じゃＩＣＵ送りかな。たぶん

死にゃしないと思うけど」

あたしは初めて山内の言葉に反応した。今なんて言った？

「それ、どういう意味？」

「まだ解らないかな？意外と鈍いんだな」

そんな安い挑発に乗るほど、あたしはバカでもお人好しでもない。だが、その一言で全てを理解した。

「あんた、まさか・・・」

「勘違いするなよ。俺がそんな野蛮なことするわけないだろ」

そう言うと、山内は気持ちが悪い笑みを浮かべた。あたしは思わずぞっとする。

「俺は後ろで糸を引いているだけだ」

すぐには理解できなかった。後ろで糸を引いている？ということは、つまり、

「この事件、シナリオ書いたのは俺だ」

繋がった。全て理解した。あたしが怒りの矛先を向けるべき相手はこいつなんだ！

「あんたが斉藤のことを・・・」

「俺だってこんなことはしたくなかったが仕方なかったんだ」

ふざけるな！そんなセリフがどうして出てくる。そんな楽しそう

な顔をしているやつからどういう理屈でそんなセリフが出てくるんだ！

あたしは隠そうともせずに、殺気を山内に向かって飛ばしまくる。しかしそんなことお構いなしに山内は相変わらず楽しそうにしゃべり出す。

「今回は簡単だった。相手はただのガリ勉君だったからな。一人で事は済んだ。面倒だったのはあの副会長だ。まさか三人を相手にあそこまで圧勝するとはな。さすがの俺も驚いた。念には念を入れて阪中を配置しておいてよかったよ。それにしても不良三人と目撃者三人はさすがに結構な出費だったぜ」

こいつはいったい何を言っているんだ？何の話だ？なぜこんなに楽しそうにしゃべれる。なぜ自慢げにしゃべれるんだ！

「あんたは最低だ！とても同じ人間とは思えない」

「全部お前のせいだ」

山内が真面目な顔になる。

「どういうこと？」

「あのとき、お前が素直に俺の告白を受けていれば、俺に恥を掻かせなければこんなことにはならなかったんだよ！」

あたしは編入した当時のこいつの告白を思い出した。

「俺は、俺はあんなに恥を掻いたのは初めてだった。だから俺はお前に復讐してやろうと思ったんだ。実際退院した直後に復讐を開始した」

あたしは気付いた。やっと気付いた。この一連の事件、中心にいたのは常にあたしだった。
あたしは急に寒気がした。

「安心しろ。お前には手を出さない。だが、お前に関わる全ての人間に不幸を与えてやろう！お前に関わることを苦痛にしてやろう！だから横山にも、斉藤にも、そして阪中にも制裁を加えてやった！これから誰かと仲良くしてみろ！そいつに不幸が訪れるだろう！そしてお前には誰も寄り付かなくなる！お前は独りぼっちになるんだ！お前を助けてくれるやつはどこにもいない！」

あたしはこの話しを聞いて、まず、ＴＣＣの二人の顔を思い浮かべた。あの二人が狙われる。あの二人が大変なことになる。そして、あの二人があたしから離れていく。

あたしは恐ろしくなった。膝が折れ、地面にうずくまった。

ヤメテヤメテヤメテヤメテ。

あたしの眼からは自然と涙が溢れてきた。お願い、あの二人にだけは手を出さないで。あの二人にだけは、避けられたくない。

そんなあたしの様子を見て、山内は満足したのか、高らかに笑った。そして近づいてきて、あたしの頭をなでながら、耳元で、

「俺に跪いて謝れ。そして俺に忠誠を誓いな。そうすれば普通の暮らしをさせてやるよ」

と呟いて、あたしの前から姿を消した。

あたしはしばらくその場から動くことができなかった。あたしのせいで、横山が、斉藤が、阪中が、岩崎さんが。そして、成瀬が。

だがふと気が付いた。あいつ、ＴＣＣの二人について何も言ってこなかった。ということはまだ二人のことは知らない。

あたしの心は一瞬で決まった。明日、ＴＣＣを辞めよう。他に方法はない。これ以上あたしのために犠牲を増やしてはいけない。犠牲になるのはあたし一人で十分だ。あたし一人で。

β113

この事件全てに何らかの関連があるはずだ。放課後の帰り道、人気のない道での犯行。横山の事件は目撃者がいるが、横山を嵌める罠ならば目撃者も共犯と考えられるから、この二つの事件限りなく似ている。

となると斉藤の事件、普通に考えれば目撃者はおそらく現れないだろう。横山の事件は性質上目撃者の存在が必要不可欠だったから用意したのだろうけど、今回は別にいなくてもいい。イレギュラー的な何かが起こらない限り現れないだろう。現れなければ犯人を捕まえるのはかなり難しい。まして俺たちは一般人であり、一高校生だ。できるはずがない。仮に捕らえたとしても、根本的な解決にはならない。やはり頭である黒幕をつぶさないとこの事件はいつまでも続くだろう。

いったいこの二人が狙われた理由は何だろうか？何か共通点があるはずだ。

放課後の屋上は静かで、平和で、何かを考えるには適しているが、やはりこのくらいの時間になると風が冷たい。コンピュータの脳は思考することにより熱を発し、そのたびに冷却ファンを回転させなければならないが、人間の脳はどうなのだろうか。コンピュータ同様、思考活動により発熱し、そのたびに冷却しなければ焼けてしまうのだろうか。

集中力が切れたのか、現実逃避なのか解らないが俺の思考は逸れていった。

赤く燃える夕日とそれに染まる秋特有の高い空は俺の心を和ませた。

がちゃ。

突然屋上のドアが開く。

「こんなところにいたんだ」

そこに現れたのは日向だった。

α116

放課後、あたしは成瀬を探していた。別に岩崎さんでもよかったのだが、彼女だと話がややこしくなりそうだし、あたしもそんなにうまく嘘をつく自信がない。うまく誤魔化せなければ岩崎さんは辞めさせてくれないだろう。

だが、成瀬ならみなまで言わなくても理解してくれそうだし、話が早そうだからだ。いやいや、それ以前にあたしのことなんてまるで興味ないから、理由も聞かずに辞めさせてくれるかも。

・・・正直、今のあたしにはこの冗談は笑えないな。

恐る恐る部室のドアを開けると、幸か不幸か誰もいなかった。もし岩崎さんがいたら、あたしは辞めることはできなかったかもしれない。辞めなくてもよかったかもしれない。

あたしは辞めたくなかった。少しも、辞めたくなかった。だが、これ以上この人たちに迷惑をかけるわけにはいかない。名残惜しい気分からか、腰を下ろそうとする自分の身体に鞭を打ち、あたしは部室をあとにした。さて成瀬はどこにいるだろう。ぶらぶら歩いているとあたしに頭に天啓がひらめいた。あたしが成瀬と初めて会ったあの場所にい行ってみよう。

目の前の扉を開けると、そこは赤一色。夕暮れ時の屋上は燃えるような赤で一面覆われていた。そこに一つの黒い影。その影はまさしくあたしの探し人その人だった。

「こんなところにいたんだ」

成瀬はゆっくり振り返る。いつぞやのようにその顔には表情はない。

「探したよ。部室には誰もいなかったし」

あたしはフェンス越しに外を眺める成瀬に近づいた。

「俺に何のようだ？」

「あたし、ＴＣＣ辞めるよ」

単刀直入に言った。あたしの心情に気付かれないように。成瀬は表情を変えず、あたしを見ている。

「斉藤の件はもういいのか？」

「見舞いは行くよ。けど犯人探しはしない」

「ずいぶん早い心変わりだな。理由は何だ？うちの部長が納得できるような答えをくれ」

あたしは用意してきたものを答えた。

「あたしは日向の跡取りだ。いろいろ忙しいんだ」

「なるほど」

口ではそう言っているが、成瀬は全く納得していないように見える。だが、思ったとおり、成瀬はこれ以上追及してこなかった。そのことを、少し寂しいと思っている自分がいる。

「じゃああたしはこれで・・・」

あたしは成瀬に背を向けた。あまり時間をかけて、山内に見つかってしまうと元も子もない。早いとこ撤退しよう。というのは言い訳で、本当は今にも泣き出してしまいそうだったからだ。

「あんた、神を信じるか？」

成瀬はあたしの背中に聞いてきた。あたしは振り返り、

「いや」

と言った。あたしは微笑んだつもりだったが、正直うまく笑えているか自信がない。

「じゃあ奇跡を信じるか？」

「いや」

「そうか。俺も信じちゃいない。そんなうまい話あるわけがない。努力や才能を根本的に否定しかねない。やることもやらず、できることもせず、神や奇跡を信じ、生きていくなんて俺は認めない」

こいつは相変わらず何が言いたいのか解らない。だが、あたしは黙って聞いていた。そんなあたしの顔を見て成瀬は柔らかく微笑んだ。そして、

「だが、自分のやれることを全てやり、できることを全てやり、それでも状況が変わらない場合、神や奇跡を信じてもいいんじゃないか、と俺は思うんだ」

学校をあとにしてから、あたしの頭の中には成瀬の言葉が無限リピートしていた。やることもやらず、できることもやらず、か。今のあたしにできることは何だろうか。以前のあたしからすると、考えられないくらい自信がない。というより、あの自信はまやかしだったのだ。

『日向ゆかり』には力がある。しかし『あたし』にはない。

さて、『あたし』には何ができるだろうか。

β114

部室に戻ると岩崎がいた。

「どこに行ってたんですか！時間はないんですよ！」

それはそうだが、焦ったってしょうがないだろう。

俺はかばんを適当にその辺に置き、パイプイスに座る。

「なんか新しい情報はあったのか？」

「いえ。あまりいいものはありません」

理解しているつもりだったが、現状は相変わらず厳しい。

「ところで日向さんは？」

「あいつはＴＣＣを辞めるってよ」

岩崎は自分の耳を疑うようなしぐさをした。

「辞める？それってどういうことですか？」

驚きを隠せない様子である。俺は感情を出さず淡々と告げる。

「そのままの意味だろうよ」

「理由は？理由は聞いたんですか？」

「家の都合だと言ってたな」

「そうですか・・・。それは仕方ないですね」

「バカ。信じるな」

社会勉強だといって放り込まれたんだ。それなのに学校生活に支障が出るような家の都合などあるはずがない。ましてや斉藤の事件からまだ一日しか経ってない。家の都合が本当だとしても日向が簡単に了承するはずがない。

「それって日向さんが嘘をついて辞めるってことですか？いったい何のために？」

「辞める本当の理由が言えないんだろ」

それ以上のことは俺にも解らん。

「日向さんはなぜＴＣＣに入って下さったんでしょうか？」

「別に入りたくて入ったわけじゃないだろ」

この部室に来た理由を問われたからとっさに嘘をついたんだろうよ。

「じゃあ成瀬さんはなんで日向さんをここに呼んだんですか？」

「何やら悩んでいたようだから、何となくな」

「でも日向さんは解決したと言っておられたのですが」

「それも嘘だ」

まあこの辺は俺の予想だ。見ている限りではいつも楽しそうで悩んでる様子は皆無だったが、何となく俺たちに隠していることがある気がした。

岩崎は身を乗り出してくる。

「日向さんの悩みを知っているんですか？」

「おそらくいじめだ」
「おそらく、ということは本人から聞いたわけではないんですね？」
確かに。ていうかあいつが認めなかったというのが正解か。
「何か根拠はあるんですか？」
「あいつはほとんど授業に出ていない。これは本人にも確認したことだ。他にも、事件の前日日向と斉藤は教室の掃除なんかしていなかった。あんな時間まで掃除していたわりに黒板もきれいじゃなかったし、それなりにゴミも落ちていた。おそらく日向の所有物を探していたか、あるいは、汚された所有物を清掃していたか、だ」
「何でこんな大事なこと黙ってたんですか・・・」
岩崎はうつむいたまま独り言のように呟いた。気のせいか、岩崎の身体はかすかに震えているように見える。
「あいつは生まれ育った環境からか、プライドが高い。加えて日向の権力。誰かの力など頼る必要がなかったから頼り方が解らなかったん・・・」
バン！
俺のセリフを遮り、岩崎が両手で机をぶっ叩いた。俺がその迫力に驚いていると、岩崎は俺を睨み、
「成瀬さんに言ったんです！何で今までそんな大事なこと黙ってたんですか！」
「い、いや。言おうと思ったんだが・・・」
勢いに押された俺は、どもった。

「そんなとってつけたような言い訳は聞きたくありません！それより日向さんを助ける手段を考えましょう！」
「おい！横山や斉藤の件はどうするんだよ！」
「もちろんそれもやります！全部まとめて解決しましょう。そうと決まればこんなのんびりしてられません！成瀬さん！何をぐずぐずしてるんですか！早く行きますよ！」

β―15

こうして日向の件まで一緒に調査し始めたのだが、どうやら表立って行われているいじめではないようだ。最近のいじめは、上履きに画鋲とか、教科書を汚したりとか、そういった解りやすいものではないのかもしれない。

だがいじめは起こっていると断言して間違いない。その理由の一つは、隣のクラスの連中の何人かにに、遠回しにいじめがないか聞いてみたところ、全員口を濁した。誰一人として、あるともないとも言わなかった。ただ決まり悪そうに誤魔化すだけだった。

いじめが行われているような兆候のもう一つとして、日向に話しかけるやつがいないこと。調査は何回か行ったが、一度たりとも日向に話しかけているやつを見かけなかった。

日向がＴＣＣを辞めた理由が解らない以上、こちらから接触することができないので確かめようもないが、いじめは行われている。これには理屈はない。勘としか言いようがない。

しかし実際こうも解らないことだらけだと何から始めたらいいのか解らん。いったい誰から始まったいじめなのか。単独なのか、複数なのか。狙いは日向だけなのか、他にもいるのか。日向が狙われる理由は何なのか。

解らないのは横山・斉藤事件の方も同じで、目撃者はやはり現れず、ここまで現れないと絶望的で、人間の記憶など曖昧で頼りないものだから、事件の当日かもしくは次の日くらいに現れない時点で

もう決まっていたと言っても過言ではない。これ以上俺に何ができるのか。

「成瀬さん、焦っても仕方ありません。少し気分転換でもしましょう。ババ抜きでもしませんか？」

「一人でやってろ」

何が悲しくて岩崎と二人でババ抜きなんかやらにゃならんのか。ババ抜きは二人でやるもんじゃねえだろう。

「なっ！私は成瀬さんを心配して・・・」

「じゃあなんか役に立つものを出せ」

「私は便利屋でも万屋でもありません！」

こんなくだらない会話している間にも横山の事件は刻一刻と終わりに近づいている。正直今日まで伸びていることが信じられない。

日向だっていくら心が強かろうとも、相手の攻撃が弱パンチでも、ＨＰは無限ではないわけであって、いつか尽きてしまうのは火を見るより明らかだ。日向が発狂したらいったい何をしでかすか解ったもんじゃない。　とにかく時間がない。しかもタイムリミットが解らないのだ。

昼休みも部室に出張って生徒会長が持ってきた調書を漁っていたのだが、結局何もいい案が出ず、予鈴によってやむなく撤退を余儀なくされたのだ。

だいたい、いじめに関していえば、俺たちは完全に無関係だ。部外者だ。というか、当事者が誰なのかすら把握していない状況なのだ。あそこのクラスの連中は話しかけたらバカみたいに食いついて

くるくせに、本題に入ると面白いくらいどいつもこいつもお茶を濁しやがった。解決しようがない。

「あ、あの！」

クラス直前で後ろから誰かに呼び止められる。俺と岩崎は同時に振り返る。そこには、

「阪中さん！何ですか？」

阪中はしきりに周りを気にしている。そして少し怯えているように見える。さらに声を小さくして、

「二人に話したいことがあります」

この一言で理解した。

「何でしょう？」

岩崎が返答したところでちょうど五限目の本鈴が鳴った。

「いくぞ」

俺は岩崎をせかした。

「え、でも、阪中さんが・・・」

俺は阪中を見た。

「悪いが俺たちは今忙しいんだ」

そう言って俺はきびすを返した。眼の端で阪中が悲しそうに顔を伏せるのを捉えた。

「え？ちょっと成瀬さん！」

岩崎は阪中に、すみません、と侘びの言葉を言い、俺の後に付いてきた。

教室に入るとまだ教師は来ていなかった。

俺が自分の席につくと、岩崎が慌てた様子で寄ってきた。

「どういうつもりですか？せっかく阪中さんがお話をしたいとおっしゃってたのに。確かに忙しいですけど、忙しいなりに何かできたと思います！」

俺は岩崎の質問を全て無視し、質問で返す。

「阪中は日向のクラスだったな」

「そうですけど・・・」

岩崎は顔をしかめた。

「今すぐ生徒会長と連絡を取ってくれ」

「え？いいですけど。何て言えばいいんですか？」

「放課後、校内放送を使って阪中を呼び出せ」

そして放課後。俺は会議室にいる。ここには俺のほかに岩崎がいる。
「成瀬さん、何でここなんですか？しかもわざわざ校内放送まで使って」
「阪中は横山の事件に関係している。そして日向と同じクラスだ。いじめと全く関係がないとは言い切れない。そんなやつが俺たちに話があるそうだ。いったい何の話だと思う？」
俺が岩崎に問いかけると、
「そりゃ、事件かいじめの話だと思いますよ」
と、答えた。
「だが、すでに一回話は聞いている。今さら、しかも向こうから、だ。つまり？」
「前言を撤回するかもしれませんね！」
そういうことだ。話が早くて助かる。
「阪中の言動を拘束していた事件の黒幕、あるいは、いじめの加害者があの状況を見ていたらどう思うだろうか？」
「告げ口をしていると思われるかもしれません！」
そうなると、真実はどうであれ、阪中は何らかの報復を受けるだろう。だからあの場ではああするしかなかったんだ。場所を会議室に選んだのも放送を使ったのも、阪中の所属している図書委員会の名前を使ったのもそのためだ。
「あのとき、阪中はしきりに周りを気にしていた。だからピンと来たんだ。ああ、近くにいるんだなって」
「成瀬さんって見てないようで、いろいろ見てるんですねー」
どうも引っかかる物言いだな。
まあそんなことはどうでもいい。問題は阪中がどのような情報を持ってくるかだな。俺の予想ではプラスになるかは解らないが、少なくてもマイナスにはならないだろう。
「成瀬さん、今回の事件は何だか積極的ですね」
「は？」

自分の世界に入り込んでいて、不意を突かれた。なんだって？
「だから、いつもは面倒ごとが嫌いで人と関わりたがらない、男らしくない成瀬さんが、何で今回に限って積極的なんですかって聞いたんです！」
確かに言っていることは間違いじゃないが、こいつ俺のことをそうやって見ていたのか。
「俺が積極的だと何か不都合か？」
「別に不都合じゃないですけど、でもおかしいです！理由を聞かせて下さい！」
言わんとしていることは解らないでもないが、改めて問う必要はあるのか？理由如何であんたに何か不利益があるのかよ。
もちろん理由はあるし、自分で理解している。だが言いたくないね。はっきり言って自己満足でしかないし、第一俺はまだ何も成し遂げてなどいない。何もしてないやつがこんなこと言ったって、ただの戯言でしかないし、有限実行なんて格好良いこと、俺にはできそうもない。
だから俺はこう言うことにする。
「それは男の子の秘密だ」
直後、俺の顔の真横を何かが通り過ぎた。その通り過ぎた何かは、俺の後ろの壁に当たり、床に転がった。それは先ほど岩崎が飲んでいた缶コーヒーの空き缶である。今度は缶か・・・。
「何で真面目に答えて下さらないんですか！私が真面目に質問してるのに、ちゃんと答えてくれないなんてあんまりです！ひどいです！失礼過ぎます！きっと私に言えない、いやらしい理由なんでしょう！そうです、そうに違いありません！」
なぜこういう発想になるのか。俺には理解不能だ。これを乙女心というのならば、俺には一生理解できないものだと改めて思う。
それ以前に俺だって、言いたくない過去や、答えたくない質問の一つや二つある。いい加減にプライバシーという言葉を調べろ。今どき子供用の辞書にも載ってるはずだ。

「前にも言ったが、あんたに全てを話す必要はない。第一あんたはやる気を出せって言ってたじゃないか」
「確かにそうですけど、何か納得できません。何で理由を教えて下さらないんですか？」
言いたくないものは言いたくないんだ。
俺はだんまりを決め込むことにする。そんな俺を見て岩崎はわざとらしくため息をついて、
「きっとこの事件をきっかけに一ノ瀬さんや日向さんと仲良くなろうとしているに違いありません。きっとほっぺにチューのご褒美を期待しているに違いありません。いやらしい。私は今までどんなお願いにも従ってきたのに、ほっぺにチューのご褒美はおろか、労いの言葉の一つも言って下さらないのに。ああ、私はきっとこのまま、蔑ろにされて、使われて、最終的にポイ捨てされてしまうのです。私がどんなに無償で尽くしても、所詮はコンビニのビニール傘と同じ扱いなのでしょう。でも私は負けません。なぜなら愛は見返りを求めないものなのだから・・・」
いい加減にしろと言いたい。今どき、どこの三流劇団だって、こんな胡散臭い芝居はしないだろう。どっかからＢＧＭまで聞こえてきそうだ。それに何か変な勘違いしているみたいだし。
誤解されても困るから、一応言っておくが、俺だって見返りなど求めてないし、見返りを求めるような働きができるとも思ってない。俺がやっていることはただのおせっかい、大きなお世話だ。俺がやらなくても解決できるだろうし、より良いエンディングを迎えることができるかもしれない。さっきも言ったが、ただの自己満足でしかないんだ。
ちなみにこれも言っておくが、俺はポイ捨てもしないし、物持ちのいい方だ。さらにビニール傘も使ってない。
だいたい俺はどんだけ嫌なやつなんだよ。誰かに聞かれたらどうするんだ！俺から言わせてもらえばこいつの方がよっぽど根性ひねくれているね。うそで評判下げようなんざ、最低だ。

まあ、誰かが聞いていたらの話だが。
俺は、鋭く睨む岩崎から会議室のドアへと、何気なく視線を移す。
少しだけドアが開いている。そしてその隙間から控え目に阪中が顔を覗かせている。
「あ、あの、盗み聞きするつもりはなかったんですけど、声かけるタイミングがなくて、その、すみません」
聞いていたみたいだな。
「こちらこそすみません。全然気が付かなくて。どれくらい前からいらしてたんですか？」
「えっと、じゅ、十五分くらい前から、かな？」
それも結構前から聞いていたみたいだ。ほぼ全て聴いていたことになるな。
「じゃ、さっきの話とか、もしかして聞こえちゃいました？」
岩崎は何やら楽しそうである。
「はい、あの、すみません」
阪中は申し訳なさそうに、うつむきながら答えた。
「別にいいですよ。でもあまり他言しないで下さいね、本当のことなんで」
どうでもいいから、早く本題に移れ！

適当に下らない会話を終わらせると、岩崎はティーセットを用意している。勝手に学校の備品を使っていいのだろうか。まあきっと会長にでも許しを得ているのだろう。
俺は、その辺に置いてあるパイプイスに座り、長机をはさんで阪中が向かい側に座る。
「一応言っておくが、図書委員会じゃないからな」
「あ、はい」
意外にも理解していたようだ。普通なら混乱するだろうが。いや待てよ。実は声をかけるタイミングがなかったのではなく、混乱し

て状況が把握できなかったから、会議室の外から十五分も覗いていたのかもしれないな。そこまでは配慮が及ばなかったな。
「何難しい顔して黙り込んでるんですか？阪中さんが困ってますよ」
紅茶を入れ終えた岩崎が俺の隣に座った。岩崎の言葉に阪中は苦笑している。
「成瀬さんは変なところで鋭いくせにこういうことには完璧に鈍感ですよね」
つい先ほど反省したばかりだが、こいつに言われるとどこか納得がいかないのは、俺の心に余裕がないせいか？
「昼休みは申し訳ありませんでした。失礼な態度を取ってしまいまして」
「あ、いえいえ。とんでもありません。私のほうこそ突然・・・」
「早速ですが、用件の方をお聞かせ願いますか？」
阪中は困ったような表情を見せて、口ごもった。切り出し方が解らないのか、なかなか話し始めない。こちらから話題を振ってみることにする。
「斉藤の事件から何かクラスで変わったことはあったか？」
俺の質問に阪中の肩がわずかに反応した。小刻みに震えているようにも見える。
「あの事件の話題はうちのクラスでは禁止されています」
「禁止されてるって先生にですか？」
岩崎の言葉に阪中は、ゆっくり首を左右に振った。
「じゃあ誰に？」
「解りません」
阪中はそう言って悲しそうに顔をうつむかせた。岩崎の頭の上には無数の疑問符が点滅しているが、それ以上何も言わずに阪中の言葉を待っている。
阪中は眼を閉じてからゆっくり顔を上げた。その表情は何かを決意したような、そんな表情だった。そして阪中が口を開く。
「お願いします。日向さんを助けてあげて下さい」

いじめが始まったのは今から二ヶ月ほど前。きっかけは解らないが、表には出てこないようなものが多く、それは学校側に申告しても絶対に取り合ってもらえないようなものだった。
狙われたのは一人の少女。始まりは菊の花だった。それからほぼ毎日、机が汚されたり、クラス中からのけ者にされたりしていた。しばらくして彼女は学校にあまり来なくなってしまった。
その少女の名前は日向ゆかり。
彼女は大企業の一人娘で、幼いころから持ち前の才能を遺憾なく発揮していたようで、身体中に自信とプライドを纏っていた。
誰に対しても物事をはっきり言うことができる性格、あらゆるものに発揮する才能、加えて見る者全てを魅了するような艶やかな容姿。そんな彼女は引っ込み思案で、臆病な自分には眩しすぎて、いつしか信仰に近い、憧れの感情を抱いていた。
彼女のために何かしたくて、でも臆病な自分には逆らう勇気がなくて、できたことは彼女の教科書を守ることだけだった。
ある日、久しぶりに学校に来た彼女は、周りに奇異の眼で見られながらも、堂々としていて、逆に周りを戸惑わせていた。
授業が始まると彼女が何かを探し始めた。
それは教科書であることに気付く。勇気を振り絞って、彼女に声をかけた。でも気付いてもらえなかった。机を叩くとようやく彼女が気付き、こちらに振り向いた。思わず顔を背けてしまった。それでも何とか教科書を渡すことができた。それからはもう授業どころではなく、彼女の動きだけが気になって全く集中できなかった。
昼休みになると彼女が小声でお礼を言った。嬉しかった。それだけで世界が一転した。しかし、彼女の世界は何も変わっていなかった。
ところどころつっかえながら、事情を話していた阪中だが、ここで話を切り、口を閉ざした。その眼にはうっすら涙が浮かんでいる。

「その日、私の携帯に一本の非通知の電話がかかってきたんです」
阪中の話によると、その電話は警告の電話だったようだ。痛い目に合いたくなければ、日向に近づくな、という意味の。
「つまり、誰かがクラス全体に圧力をかけていじめを行っていると？」
「はい」
まあ予想通りだな。クラス中の人間に嫌われるようなやつじゃないし、第一そんな状態なら、阪中や斉藤も友達をなくしているはずだ。
「それで阪中さんは、心当たりないんですか？」
「はい。知っている人はごく一部で、ほとんどの人が知らないみたいです」
「一部の人が知っているっていうのはどうやって判明したんですか？」
「それは・・・」
岩崎の質問に、阪中はまた口ごもる。確かにこの質問は重要だ。普通に生活していたのならまずこの事実には辿り着けないだろう。まさか直接聞いたわけではないだろう。
困った顔のまま、口を開こうとしない阪中の代わりに俺が質問に答えることにしよう。
「直接そいつらから脅されているからだ」
「え？」
「どうして・・・」
阪中の表情と言葉のニュアンスから、どうしてそう思うのか？ではなく、どうして知っているんだ？と言いたいようだ。岩崎も驚きを隠せない様子だ。
「言いたいことはそれだけか？他にも言うべきことがあるんじゃないのか？」
阪中は驚いた表情をしていたが、しばらくしてその表情は覚悟を決めたものになって、そして、

「横山さんの事件、私の証言を全て撤回します」
と言った。
話を聞くと、事件のあったその日の放課後、また非通知設定の電話があったのだという。その内容は、午後五時過ぎに通学路のある地点を通れ、というものだった。
「気味が悪かったのですが、言うことを聞かないと何をされるか解らなかったので、とりあえず時間どおりにその場所に行ってみました。そしたら突然知らない制服の男子に声をかけられたのです」
それからは横山の発言どおりで、最後に横山に礼を言ってその場を去ったという。
「警察や私たちに黙っていたのはなぜです?」
「先ほど成瀬さんが言ったとおりで、そのあとにまた非通知の電話がかかってきて郵便受けを見ろ、とだけ言って切られました。郵便受けにはいくつかの指示がかかれていました。家の位置まで知られていると思うと怖くなって従うしかありませんでした」
ずいぶん綿密に下準備がされていたようだ。おそらく阪中の心の動きも計算のうちだろう。
警察に嘘の供述をしたものの、やはり助けてもらった相手を陥れるようなマネはかなりの罪悪感を呼び、その日はとても眠ることができなかった。
「次の日、また電話がかかってきて、事件を調べているやつがいるようだが、その人たちにも
警察で話したとおりに発言しろ、というものでした。私は、もうこんなことしたくないと言ったんですが・・・」
言うことを聞かないと、日向ゆかりのようになるぞ、と言われたらしい。
阪中は今まで黙っていてすみませんでした、と最後にいい、話を終えた。
「あんたの言うことは理解した。だが、なんでここまで来て横山の事件には触れずに、日向のことだけを相談しに来たんだ?何か理由

があるのか？」
　まさか全てを語らずに協力を仰ぐことができるなんて本気で思っていたわけじゃないだろう。なら、言うのをためらう事実とはいったいなんだ？脅されていた、ということは、その脅しに使われた文句が阪中にとって半端じゃない恐怖になっているということか。
　俺たちの無言の圧力に屈したのか、阪中がようやく口を開く。その声は明らかに震えていた。
「私、高校に入るまでずっといじめられてたんです」
　思ったとおりだった。阪中は以前受けていたいじめのせいで、いじめという言葉にとても敏感になっていたのだ。もし、今日のことが見つかってしまったら、まず間違いなく自分が標的なってしまうだろう。そう思うと、どこかに保険を作っておきたかったのだ。
「日向さんを助けたい。でも自分が標的になったら、そう思うと、どうしても動けなくなってしまうんです！最低ですよね。結局一番大事なのは自分で、他人のことは二の次になってしまっている・・・」
「そんなことないですよ。阪中さんはとても勇気があります。誰だって自分がいじめの標的になるかもしれないと思うととても怖いです。その証拠に、一ヶ月も前から始まっていたいじめに対して、未だに誰も相談に来て下さっていません。でも阪中さんは来て下さいました。これで日向さんを助けることができます。それは阪中さんの勇気のおかげなのです！」
　いつもは意見の全く合わない岩崎だが、この件に関しては同感だった。誰しも一番大事なのは自分自身だ。それに個人主義が進み、他人とのふれあいが減ってきている今日では特に顕著になってきていると言える。他人のために自らが犠牲になるなんて、口では簡単に言えるがそう簡単に実行できることではない。そんなこと言うやつは偽善者と言われてもおかしくない。
　だが、阪中は自分にまで害が及ぶかもしれないこの状況で、証言しに来てくれたのだ。もっと早く来てくれたなら、という気持ちは

あるが、そんなこと俺が言えた義理じゃない。それに先ほど言ったとおり、この証言が事件解決に大きく近づいたのは、間違いない

β—16

授業が終わってから、三時間が経過していた。そろそろ部活動に勤しんでいた連中も仕上げに入り、グラウンドからは活気のいい声が聞こえなくなってきている。

阪中が知っていること全て話したあと、俺たちはいじめの黒幕、並びに例の非通知の電話の主について考察をしていた。

こんな時間まで残っていることから察しが付くだろうが、全く特定できていない。それどころか絞れてすらいない。阪中の証言により、少しは解決の方向に進み始めたはずなのだが、如何せん、俺たちには知らないことが多すぎた。

「それにしても不運でしたねー。教科書がきっかけで少し仲良くなれたのに、事件に巻き込まれてしまって。それは横山さんもですが。何か違ったきっかけだったら間違いなく今頃、良いお友達になれていたのですが」

確かに。今考えてみると少し気になる。何か重要なことを忘れているような気がする。どうしてこういうときに何も閃かないんだろうか。自分の頭の悪さを呪いたくなる。

「いえ。近づいたなんてそんな。たぶん私が勝手に思ってるだけで、日向さんは私なんかと仲良くしようとなんて思ってないですよ。もしかしたら神様が近づくなと言っているのかもしれません」

「そんなことないですよ！日向さんはあれでなかなか、熱い人です。助けてくれた、親切にしてくれた、そういった恩は忘れない人です。だからきっと阪中さんとももっと仲良くしたいと思っているはずで

す。間違いありません！」
「そうだといいんだけど・・・。ところで日向さんとは知り合いなんですか？」
「はい。実はつい先日まで日向さんはＴＣＣの会計を勤めていたんです。ですが、突然辞めてしまったんです。理由はよく解っていないんですけど・・・」

いじめが何らかの理由にはなっていると思うのだが、原因であるかどうかは不明である。なぜ今までここに普通に来ていた日向が、突然辞めたのだろう。

逃げ出したときもあったが、ちゃんと戻ってきたし、それどころか俺よりもやる気になって帰ってきた。さらに前日には、斉藤が巻き込まれた傷害事件が起こっている。どう考えても辞める時期に適しているとは思えない。むしろ率先して間違っていると言いたい。いったい何なんだ？似たような事件に、自分の知り合い、それもそこそこ深く関わっている人物が三人も巻き込まれているんだ。なぜここで手を引く？そりゃ、三人とも関わるようになってから日は浅いが・・・。

「そうか。そういうことか」

ここに来て、ようやく理解した。疑問を突き詰めていけば簡単に解るものだった。

「何か解ったんですか？成瀬さん」

俺の独り言に岩崎が反応する。阪中も首をかしげて俺を見ている。

「この事件は日向が中心になっている」

俺のこの発言に二人は頭の上に疑問符を浮かべた。

「よく解りませんね。日向さんは事件に巻き込まれていないんですよ？それなのに中心ってどういうことですか？」

俺は解りやすいように順序よく説明していくことにする。

「じゃあ横山と阪中が巻き込まれた事件の前日に何があった？」

俺は二人に問いかけた。

「えーっと、事件の日は土曜日なので前日は金曜日ですね。その日は確か、部室で日向さんと三人で成瀬さんの手作り弁当を食べた日です」

「そうだ。放課後に何があった？」

「放課後ですか？」

岩崎はうーん、とうなって、考え始めた。その日一日を振り返っているようで、ぶつぶつ口の中で呟いている。そして、あっ！、と胸の前で手を叩いた。

「そういえば、横山さんのラブレターを発見したのもその日でしたね！確か、日向さんは横山さんのことをご存じなかったようで、軽く特徴を話したら興味なさそうな顔をしていたのを覚えています！」

あまり記憶しなくてもいいところを覚えているな。まあ、そんなことはどうでもいい。話を進めよう。

「あんたはその日何があった？」

俺は阪中に話を振った。

「えっと、日向さんに教科書を渡したことしか・・・」

だんだんとパズルのピースが埋まっていく。俺は最後のピースを埋めるべく、もう一つ、岩崎に質問を投げかけた。

「じゃあ斉藤の事件の前日に何があった？」

俺の質問にまた岩崎は思案顔になる。だが、さっきより時間的にずいぶんと最近の話だからか、早々に正解にたどり着いたようで、回答を口にした。

「そういえば斉藤さんと日向さんが放課後、教室の掃除をしていましたね！」

掃除をしていたかどうかは怪しいが、二人で教室にいたのは事実だ。

「偶然だと思うか？」

「偶然じゃ、ないですよね・・・」

ここまで説明すれば二人とももう理解できただろうが、俺はこれらのパズルの最後の一ピースに該当する言葉を口にすることにする。

「日向と、直接にしろ間接にしろ、接触したやつが事件に巻き込まれている。つまり日向に近づいたやつが事件のターゲットになっている」

この事件の発端は全て日向にあったというわけだ。おそらくこの事件の黒幕はいじめの黒幕と同一人物で間違いない。この事件はいじめの延長線上にあったのだ

「でも私たちはどうなんですか？こういうのもなんですが、時間だけ見ても、私たちのほうがお三方より圧倒的に日向さんと関わっていると思うのですが」

「確かにこれだけ速やかに関わった連中を狙っているにもかかわらず、俺たちには何のアプローチもないのは不自然だ。つまり俺たちと日向との関係はまだ知られていないってことだろう。だから日向はＴＣＣを辞めていったんだ」

「どういうことですか？」

「日向も何らかの形で自分がこの事件の発端であることに気付いたんだろう。そこで俺たち同様、この不自然さに疑問を持った。そして、まだ俺たちとの関係を知らないに違いない、と推測し、ならば気付かれる前に関係を絶ってしまおうとした」

日向の性格から、おそらく気付いたのは辞職宣言をした日の前日。つまり斉藤が事件に巻き込まれた日の解散後だろう。

まだ謎は多いが、これで俺たちが進むべき道は決まった。やらねばならないことも結局元をたどれば一つだったようだ。

「この事件を解決するにはいじめを推し進めているやつを探し出して、そいつをどうにかするしかないな」

「ですが、いじめについて私たちはほとんど何も情報を得ていません」

だが、いじめは確実に日向のクラスがメインで発生している。つまり日向のクラスに重点を置き、探りを入れれば何らかの情報は手

に入れることができるはずだ。

「的が絞れれば情報を得ることはそんなに難しいことじゃない。情報が手に入れば、運がよければ犯人が解るかもしれないし、犯人が解らないまでも、それに通ずる手がかりが手に入る。少なくとも今までよりは数段調査しやすい状況にはなったな」

俺自身はあのクラスの人間にあまり詳しくはないが、岩崎は、自称だが、人脈はあるようだ。その辺の情報の獲得は岩崎に任せるとして、他に新たな問題が浮かび上がる。

「相手は実力行使を辞さない。実際の数は解らないが、結構な数の人間を動かせるようでもある。これ以上被害を増やさないように行動しなければならない」

二人はこの考えに異議はないようだ。

「とりあえずあんたはこれから事件が解決するまで俺たちと日向に近づくな。つらいかもしれないが、これ以上無茶をしても意味がないし、自ら遠のいた日向の意思を無駄にする」

「はい・・・」

俺がこう言うと、阪中は少し考えるような顔をしたが、うなずいてくれた。いろいろ言いたいことはあるようだが、一応納得してくれたようだ。

それで俺たちだが、

「一応聞いておくが、俺たちはどうする？結構危険な仕事も出てくるかもしれないぞ？」

「決まっています！事件解決以外に私たちに選ぶ道はありません！」

岩崎からは予想どおり、男らしい返事が返ってきた。今回に限り、その男らしさは頼もしいね。まあ、時と場合によってはかなり厄介だが。

「すみません。私がこんな相談持ち込んでしまったために危険なことに巻き込んで・・・」

今更だな。まあ実際、この事件に巻き込まれたのはもっと前からだったし、あの時ああすべきだった、と悩む時間があるなら、これからどうするか、悩んだ方がよっぽど有益だろう。さっさと解決したほうが教育上もいいだろうしな。おお！我ながら前向きだ。

「そんなことないですよ！私たちはお悩み相談委員会です！相談に乗るのが仕事なんです。それに阪中さんも巻き込まれた側の人じゃないですか！謝る必要はありません。あとは私たちに任せて下さい！必ずや解決して、日向さんを悪の組織から救い出してみせます！」

無駄に力の入った演説だな。そういえば元を辿ると俺を巻き込んだのはこいつじゃないのか？やはり俺がツイていないのはこいつのせいなのではないか。

まあそれは置いといて、時間がないので、さっさと話を進めることにしよう。忘れていたが、この話し合いは一応、図書委員の会議ということになっているので、あまり長いこと粘っていると少し怪しまれるかもしない。それ以前に教師か事務員に怒られるかもしれない。

俺は阪中に話しかける。

「それで、実際日向を嫌っているようなやつは解るか？逆に仲良さそうなやつでもいい」

俺の質問に阪中は首を横に振った。

「日向さん、あまりクラスにいないから、よく解らない」

そうだろうな。まあそんなに当てにしてはいなかったさ。だが、予想に反して、阪中は直後に、あっ、と言い、

「日向さんによく話しかけている人なら・・・」

と言った。阪中の様子からだと、いまいち当てにならなそうだが、どっちにしろクラスに近づく必要があったので、そいつの名前を聞いておいた。そいつのことは岩崎が知っているようで、早速明日から接触してみることになった。

そこでとりあえず今日の話し合いは終了にして、先に阪中だけでも帰すことにした。一人で帰すのはいささか不安ではあったがこの時間ならちょうど下校時刻だし、通学路にはたくさんの生徒がいるだろう。目撃者を巻き込んでの事件ではあるが、さすがに十人二十人となると相手も犯行を思いとどまるだろう。

「今日は思ったより真相に近づけてよかったですね！」

荷物を取るために会議室から部室に向かうまでの廊下で、隣を歩く岩崎がこう言った。これが、今日の会合を終えての岩崎の感想なのだろう。俺とは違う意見だった。

「よかったかどうかは知らんが、これで事件は解決に向かうだろうよ」

確かに今まで堂々巡りのような調査に比べたら、この展開は解決の方向に向かっていると言える。ただ相変わらずその道のりは面倒極まりない。ため息も自然と出てくる。

「すぐにため息を吐くのは止めて下さい！負のオーラを出してちゃ、解決できるものも解決できませんよ！誰に無理だと言われても我々だけはできると信じなきゃいけないんです！成功の秘訣はまず信じることなんです」

信じたからって犯人は見つからないし、証拠だって出てきやしない。精神論に意味があるかどうかは置いといて、どっちにしたって証拠探しは走り回らにゃならんのだ。さらに派手に動き回ることができないのである。あまり眼につくような動きをすると、俺たちがターゲットになってしまう。ある程度動かなくてはならないのだが、動きすぎるのはまずい。かなり面倒である。最悪と言ってもいい。

はあ。

β―17

昨日、阪中の口から告げられたそいつは、なかなかのいい男だった。中身はまだ何とも言えんが、少なくても俺の知る世界では格好がいいと言える人物だった。

「申し訳ありませんが、少しお時間いただけますか？」

放課後、突然押しかけてきた俺たちに対して、そいつは快く笑顔で応対してくれた。若干だが、笑顔の表情に警戒心が含まれていると感じられるのは、俺の気のせいではないだろう。なぜなら、

「私たちは、お悩み相談委員会、通称ＴＣＣのものですが、」

と、前置きがあったのだから。俺だったらこんな意味不明な呼称を持つ団体の構成員に話しかけられたら問答無用で断る。この時点で人の好さが感じられる。

放課後とはいえ、それなりに人の目があり、結構込み入った話をするため、大変申し訳ないのだが、我らが部室に任意同行してもらうことになった。

「そろそろ聞いていいかな？僕に何の用？君たちは何者？」

もっともな質問だ。

何も訳を言わずに部室に連れて来られて、紅茶などを目の前に用

意されているのだ。聞きたいこともいろいろあるだろうが、この二つが一番の疑問なのかもしれない。

「改めて自己紹介を。私はＴＣＣ部長の岩崎です。こちらは成瀬さんです。私たちは先ほど申し上げたとおり、生徒たちの悩み事の相談を受けて、解決するための団体です」

「へえ。知らなかったな、そんな部活があったなんて」

「以後お見知りおきを。もし何かありましたら、伺いますが？」

「残念ながら、今のところ大丈夫だよ」

質問に答えながら、宣伝をする岩崎に対して、特に感想はないようで、淡々と返事をしている。この辺りにも、人の良さを感じさせるね。俺ならば、ここで変なやつと断定していただろう。

「それで、僕に何の用？」

ここからやっと本題に入る。俺たちの目的に関わることであり、人の目を気にしなければならないことだ。

「その質問に答える前に、まず私の質問に答えて下さい」

返事はないが、聞こえているだろうし、表情に変化がないので、岩崎は肯定と判断したようで、質問を開始する。

「あなたのクラスの日向ゆかりさんが不当な扱いを受けているらしい、というのをご存知ですか？」

「・・・それはいったい誰がそんなことを言っていたんだ？」

一瞬の間があった。その間に関しては人によって解釈が異なりそうだが、少なくとも驚いている様子である。その質問には、いじめ

の存在については全く知らなかったための質問というニュアンスではないような感じがした。

「私たちの下に、日向ゆかりがクラスメートからよくない対応を受けているから助けてやってくれ、といった内容の依頼がありました。誰かは言うことはできません。高校に所属している団体とはいえ、相談者のプライバシーに関わることですから、ＴＣＣには守秘義務がありますので。先ほどの質問に対しての返事ですが、今日あなたの前に参上仕ったのはこのことを聞くためです。それでこのことに関してご存知でしたか？」

「いや・・・。で、なんで僕なんだ？まさかうちのクラス全員にこうやって聞いて回ってるとか？」

「まさか。聞いた内容から推測すると、おそらく黒幕はクラス内の人物です。全員に聞いて回るわけにはいきません。相談者に、協力してくれそうな人を聞いたところ、あなたの名前を教えて下さいました」

そいつは、なるほど、とうなずいて、しばらく考え込んでいた。そして、

「解ったよ。僕に何ができるか解らないけど、できる限りのことはしよう」

「ありがとうございます」

「で、さっそくだけど何をやればいいかな？」

今できることなどあまりないが、俺の中に沸いた一つの疑問を早めに解消したいね。

岩崎はそいつの質問を受けて、俺のほうを見る。俺に意見を求めているようだ。

「とりあえず早めに日向に接触しておきたいな。今から教室に行ってみよう」
「今から？もう放課後だし、いない確率のほうが高くないか？なら明日にでも会えば・・・」
「思い立ったが吉日と言うだろ？それにあまり人目がないほうがいい。授業がある間は接触しにくい」

俺に意見にはどうにも賛成できないらしい。何やら理由があるようにも見える。

「何も今から呼び出そうと言っているわけじゃない。とりあえず教室に行こうと言っているだけなんだ。教室にいなければそれでいい。それとも今教室に行きたくない理由でもあるのか？」
「そんなことはないが・・・」

挑発的なセリフだが、日も暮れてきたこの時間に水掛け論をするほど暇じゃない。

この質問に対して、そいつは歯切れの悪い返答をしたが了解してくれたようで、一緒に教室まで同行することになった。そこそこ裏事情を理解している俺は、放課後日向が残っている可能性が高いことを知っていた。

α-17

いったいあたしには何ができるのだろうか。

この自問自答にあたしは答えを出せずにいた。この状況を脱するにはいったい何をすればいいのだろうか。全く思いつかなかった。

あたしはいつも放課後遅くまで残っていた。それも意識的にではなく、気が付いたら外はもう日が暮れていた、という感じである。どうすれば。どうすればいい。解らない。何一つとして解決策が導き出せない。自分の無能さと弱さにはほとほと嫌気がさす。

山内にあたしが原因だと言われたあのときから、解りやすい物理的ないじめはなくなっていた。だが、誰とも話せないのは何よりもきつい。それも誰にも相談できない。あたし一人で解決しなければいけない状態なのだ。なのにこの現状・・・。

でもあたしがこうして我慢していれば、これ以上犠牲者は出ない。あたしが犠牲になれば。

今日はもう帰ろう。そういえばあたしは放課後遅くまで残っていては不自然なんだ。嘘とはいえ成瀬たちには忙しいと言ってあるんだ。さっさと帰らないと。

帰り支度をしていると、教室の外に足音。こんな時間に教室に来るやつなんてほとんどいないはずだ。少し興味はあるが、あたしにはどうしようもない。誰であろうと話すことなどできないのだから。

そう考えて帰り支度に専念しようと思った矢先、この教室の前で足音が止まり、直後ドアが開いた。

「やあ。まだいたんだ」

「・・・・・・。何の用？あんたと話すことなんて何一つないんだけど」

「そう言わずに。ところで日向さんて、誰かにいじめられてるの？」

は？何を今更。こいつは頭がいかれたのか？それなら大歓迎だが、それにしては様子がおかしい。この教室にはあたししかいないのに、こいつは猫かぶっているんだ？あたしにはとっくに正体を明かしているじゃないか。しかもその柔らかなセリフとは裏腹に表情は険しく、禍々しく歪んでいる。

「そのことについてこの二人が話ししたいらしいんだ」

その言葉とともに背中から二人の生徒が登場した。その二人は・・・。

「初めまして、日向さん。私はＴＣＣ部長の岩崎です。こちらは成瀬さんです。ある人からクラスメートから不当な扱いをされているから助けてやってくれという依頼を受けて、参上仕りました」

「何で・・・」

あたしは二の句がつなげなかった。何でこの二人が山内と一緒にいるんだ？そいつはあたしの敵なのにどういうこと？

「山内さんには協力者として、あなたのクラスの情報を提供していただくことになりました」

協力者？こいつが？一番選んじゃいけないやつだ。どうして、よりによってこいつなんだ。

あたしは舌を抜かれてしまったように全く口が利けなくなってしまった。頭も回らない。いったい何が起こっているの？どうしてこんなことになってしまっているの？

「もう少し時間があるときにお会いしたかったのですが、どうやら日向さんに関わった人を傷つけるという内容のようなのでこんな時間になってしまいました。申し訳ありません」

そこまで推測できていたんだ。でもその推測も配慮も全く意味がない。だってこいつが、山内が黒幕なんだ。

「でもこれからは私たちは日向さんの味方です。何かあったら私たちに相談してください。お役に立ちますよ」

「そうだよ。僕も協力するよ」

得意の善人スマイルを浮かべて岩崎さんの言葉に賛成する山内には、吐き気を催す。この男が身内にいる時点でこの相談は何の意味もなさない。この協力者が倒すべき相手の頭なのだ。

山内からしたら絶好のポジション。これ以上ない位置を勝手に用意してもらったようなもの。これではこの二人も遠からず危険な目に合ってしまう。

「あたし、別にいじめになんてあってないから」

絞り出すような声であたしは三人に訴えかける。

「大丈夫ですよ！私はこう見えて結構強いですよ。成瀬さんは弱いかもしれませんが、頭はいやらしいくらい良いです。そして山内さんは以前合気道をやっていたような人です。そんな簡単には負けませんよ」

「なんで僕が合気道やってたこと知ってんの？」

「私は何でも知ってるんですよ。だからなかなかいろいろな人にも顔が聞くんじゃないですか？」

「まあそうだね」

なんだか和やかな雰囲気で会話が進んでいる。あたしの気持ちも知らないで・・・。

あたしは机をぶったたいてその会話を打ち切らせる。二人は驚いてこちらを向く。

「あたしのことは放っておいて！あたしはいじめられてもないし、こんなこと望んでもないの！だからもうあたしには関わらないで！・・・迷惑なの、迷惑なのよ！あたしの気持ちも知らないで、勝手なことばっか言わないで！もう放っておいてよ・・・」

あたしは二人に迷惑をかけたくない。何をしようともあたしに関わるときっとろくなことにならない。というのはきっと建前で、あたしは二人に嫌われたくなかった。疎まれたくなかった。だからあたしのほうから関係を絶ったんだ。逃げ出したんだ。でもこれじゃ何の意味もない。どうしようもない。

知らず知らずのうちに涙を流していたあたしに、成瀬が近づいてきた。

「何よ・・・。あんたももう放って・・・」

成瀬はあたしの言葉をさえぎってあたしの頭をなでた。そして、

「あんたを救ってやるよ」

成瀬は穏やかに微笑んだ。まるで、何もかもお見通しだというように・・・。

β―18

調査とは言ってもできることなどほとんどない。せいぜい日向に張り付いて怪しい行動をとるやつがいないか見張るくらいしかない。クラスの連中は何も答えてくれない。協力者は知らないという。がっかりだ。

だが、全く使えないというわけでもなさそうだ。おそらく無意識的だろうが、俺にとって有益な情報がいくつか入ってきた。まだはっきりしたことは言えないんだけど。

正直な話、証拠なんてものは出てきやしないだろう。そりゃ事件自体は簡単なものだし、首謀者は所詮高校生。決定的な証拠を完全に処分できているはずなど、ありはしない。ただ、それは警察が動いているときの話である。事実、現在警察は動いていない。当たり前だ。殺人事件や強盗などが起きたわけではない。

かと言って、俺たちだけで証拠を探せるかというと、それは愚問である。確実に無理だ。まあ世間的に言えば、この程度の事件、警察の手を煩わせるほどのことではないのだろう。この事件の本質に関係してるのは、一人の少女と、まだ限度を知らないわがままな子供が一人。死者も出ていない。到底重犯罪だということができない。

斉藤のことは事件と言えるし、軽い犯罪であるはずがないのだが、このいじめと関係が証明できない以上、警察に訴えてもスルーされること請け合いなのだ。

そうなると我々に残された手段はおのずと限られてくる。この手

は前回も使ったな。

「成瀬さんは今何を考えてるんですか？」

相も変わらず、現在ＴＣＣの部室で、放課後である。そして岩崎と二人。

「俺が今考えなきゃいけないことはあまりないな」

「そんなの解ってます！日向さんを救う手段についてどういう考えをもっているか聞いているんです！」

悪いが俺はマインドスキャンは心得ていないから、お前の言いたいことを逐一把握してやれないんだよ。このセリフは前にも言ったな。言った相手は違ったが。

「実際どうなんですか？黒幕の正体はおおよそでも掴めているんですか？」

ぶっちゃけると、俺たちは日向のクラスの連中全員の話を聞き終えていた。協力してくれた者がほとんどだったが、協力してくれなかった者もいたな。はっきり言ってトラウマに近いものを感じる。将来、警察や探偵にはなりたくないな。

「まあだいたいはな。全然証拠はないが」

岩崎は、証拠はない、というところで少し顔をしかめた。

「それはなかなかいい感じですが、それって勝てるんですか？」

先ほども言ったが、勝つ方法もある。

「その方法を今考えてる。なかなかいい方法がないからな」

いくつか方法はあるのだが、実際へまをやるわけにはいかないから、なるべく勝率が高いものを選びたい。

「なあ、聞きたいんだが」

「何ですか？」

「斉藤や横山みたいに実力行使に出るとしたら、黒幕は現場にいると思うか？」

「黒幕のタイプによると思います。肉体派だったら出てくるんじゃないですかね」

それならばいいんだが、これも可能性の話になってしまう。こっちの場合、失敗は許されないのだから運頼みみたいな方法はできるだけ避けたい。まあ下っ端を問い詰めればいいのだが、そんな拷問じみたマネもできるだけ避けたい。というか面倒だ。どうせだったら一網打尽にしたい。そっちのほうが一発で終わって楽だ。何とかして黒幕を引っ張り出したいのだ。

「つまり成瀬さんは現行犯を狙って罠を張りたいとお考えなわけですね」

「そういうことだ」

岩崎は、そうですねぇ、と言って黙り込んでしまった。相手もこれだけ事件を起こしながら、決定的な証拠を未だ残していない。多少なりとも頭が切れるやつだということが窺い知れる。それを上回るような罠を張らなければ意味がない。というか、俺たちの存在を露呈してしまうから、簡単に言えば俺たちの負けである。

「だいたい狙われる人のタイプが解ってるわけですから、何とか予想したらいいんじゃないですか？」

それであらかじめターゲットになりうると予想したやつを尾行して、現行犯で抑えるってか？もちろん冗談だよな？そんなむちゃくちゃな提案受けるわけがない。たとえそいつが絶対襲われると解っていても日時が解っていなきゃ、ただただ時間を浪費するだけだ。却下だ。

「じゃあ襲撃時刻も相手もこっちで作っちゃえばいいんじゃないですか？」

ん？それは、なかなか名案だな。つまりこっちからある人物を日向に近づけてしまえばいいわけだ。そしてその事実を例の黒幕に教える。そうすれば次の日、少なからず近日中に処刑を決行するというわけか。岩崎にしては、悪くない発言だ。むしろいい。しかし、

「あんたもなかなかあくどいこと考えるな。要はおとりってことだろ？」

「悪いほうに捉えないで下さい。あくまで協力者を募るんです。それに何かを得ようとするには、それ相応の犠牲はつきものですよ」

自己犠牲という言葉を瞬時に思い浮かべたが、そんなこと口が裂けても言うことができないので余計な発言は自重することにする。

「だが、それでは黒幕が来るかどうか解らないな」

「う・・・。確かにそうですね・・・」

どうしましょう、とうなって、また黙り込んでしまった。

しばらく考えていたが、どれもパッとしない。面倒だからさっさと終わらせてしまいたいのだが。もうすぐ師走だ。定期テストも待っている。こんな面倒なことにかまけている暇はないんだ。そろそろ切り上げたい。

「思ったんですけど・・・」
「何だ？」
「成瀬さんは黒幕が誰だか、大体検討が付いているんですよね？」
「まあな」
「じゃあこんなまどるっこしいこと考えてないで、直接呼び出してしまったらいいじゃないですか」
「さっきも言ったが、しらばっくれられたらどうするんだ？」
「だから――――すればいいんですよ」

岩崎はまたしても名案を説いた。何だ、こいつ。今日はおかしいほど冴えてるな。喜ぶべきところなのかもしれないが、ちょっと不安になるのは俺の気のせいか？もしかして、

「実はあんたが黒幕なんじゃないだろうな？」
「・・・成瀬さん。それはもちろん冗談ですよね？」
口は笑っているが、目は全く笑っていない。それどころか俺の目が正常ならば全く逆の感情がまざまざと浮かんでいる。

「もちろん冗談だ。我ながらつまらなかったな」
「本当です！全く笑えないです！この期に及んでまだそんな冗談言うなんて成瀬さんは頼もしいですねえ。私の助言なんて要らなかったんじゃないですか？」

これ以上機嫌を損ねるとこの語の計画に支障が出るんじゃないかというくらい、恐ろしい表情で俺を威圧する岩崎。どうやら怒って

いるらしい。

「あんたにはいつも助けられてる。これからもそうだろうよ」
「本気に聞こえませんね」
「ついでと言っちゃ何だが、頼みごとを聞いてもらえるか？」

俺のこの発言に、岩崎は少し驚いたような表情をしている。今まで俺がこんな改まって他の見事をしたことなどないからだろう。声を出さずに首を縦に振って肯定の意を表した。

「この計画を実行するに当たって、あんたの自慢の交友関係が必要になる」
「はい？」

岩崎は理解できなかったようだが、時が来ればいずれ理解できるだろう。率先してそうしてくれるかもしれない。まあ何というか、長かったがたぶん、おそらく、明日で事件を解決することができるだろう。簡単にいくかはそのときの運しだいだろうが、うまくいくように手を尽くすしかないね。これでうまくいかなければツイていなかったと思うだけだ。

もしうまくいっても、たまたまラッキーだったと思うだけ。俺たちの努力の成果とか実力とか、ましてや奇跡であるはずなど小指の先ほどもない。ただの偶然に過ぎないんだよ。

β—19

やることが決められているとはいえ、はっきり言って、あせる必要など皆無で、いつも同じのんびりした午前中を過ごした。そして四限が終わり、昼休み。俺たちは隣のクラスに行った。

「すみませんが、山内さんと阪中さんを呼んでいただけませんか？」

岩崎はクラスの出入り口にいるやつにそういい、連中を呼び出した。呼び出された二人は少し困惑顔をしてるように見える。

「何ですか？」

「何か急用？」

二人はそれぞれの反応で俺たちを出迎えた。

「お二人のお耳に入れたい情報を持ってきました」

二人はさらにいぶかしんだ。理解できないというような感じである。

「ほう。それはどんな？」

「聞いて驚いて下さい！」

岩崎は二人の質問を聞き、そう答えた。そしてどっかのクイズ番組の司会者のごとく、深夜番組の合間合間のコマーシャルのごとく、溜めに溜めてこう言い放った。

「なんと！例の事件の下手人らしき人物を捕らえることに成功しました」

二人はとりあえず驚いておこう、といった感じで驚きの表情を見せた。岩崎的にはその何倍かのリアクションを期待していたようで、少しがっかりしていた。

まったく何回言えば気が済むんだ？しかるべき発言をするときには声の大きさというものを考えてもらいたい。一応公衆の面前であることを忘れているのではないだろうか。

「それは本当かい？」

「マジです！大マジです！こうなったらもう事件は解決したも同然ですね。大船に乗った気持ちで待っていて下さい！あとは下手人を締め上げれば黒幕のこともすぐに吐いちゃうでしょう。はっきり言って私は怖いですよ。いろいろ情報を持っていますからね」

本当に怖いことを言う。おそらく脅迫すると言っているのだろう。俺はこいつの仲間でいいのだろうか。真剣に考えてしまうね。

「ところで、」

こう言ったのは山内だった。こいつは岩崎に恐怖を抱かないのだろうか。俺には関係ないと思っているのだろうか。頭がいいのか、悪いのか。

「阪中さんは何でここにいるんだい？」

「それは阪中さんがこの事件の依頼主だからです！」

突然地雷を踏んだ。阪中は案の定、びびりまくって周りを見てい

る。この前の俺の配慮はいったいなんだったんだ。

「それって言ってよかったの？」

山内は苦笑いで岩崎に問いかける。

「全然問題ありません。というかこのままじゃ我々の完全完璧勝利が不動のものになってしまって、面白くありません。これくらいのハンデを差し上げないと」

山内は、ふーん、と興味なさそうに相槌を打った。その表情にはかすかだが変化が見られた。

「あと、こんなところでそんな大きな口を利いてもよかったの？黒幕がいるかもしれないよ？」

「構いません！どうせ勝つのは我々です。結果が同じならばあとはどう面白く演出するかを考えなければなりません。これがその演出です。それに黒幕さんは全く怖くありません！現場には現れずに命令だけ出して、汚い仕事は下っ端さんにやらせる。そんな卑怯なやつに私は屈したりはしません！どうせ自分が傷つくのが怖いんです。弱虫さんの泣き虫さんです！だからきっとこの我々の宣言を聞かれても何ら恐れることなどないのです！逆に怖くなっていじめをしなくなってしまうかもしれないですね。まあ今から反省しても手遅れですが」

岩崎は自信満々に言い放った。その自信は聞いている者全てを圧倒している。

しかしここまで言う意味はあったのだろうか。正直半分くらいで十分だったと思う。

「とりあえず下っ端さんを捕まえたのでもう少しで解決できるであろうことを聞いてもらいたくて参上仕った次第でありますので、用事は済みました。何か質問は？」

二人を見た。二人は何も言わない。阪中は周りにいるであろう黒幕に怯えていたが、岩崎の圧倒的な自信を前に呆然としている感じである。気のせいか、焦点が合っていないようだ。俺のことを見ているわけでも、岩崎のことを見ているわけでもない。どこか中途半端な空中に視線を泳がせているようだ。

対して、山内はいつもの微笑を顔に貼り付けている。内面の変化は俺には把握できないが、外見は変化ないと思う。

「ではないようなので、私たちはこれで。申し訳ありませんでした。貴重な昼食タイムに呼び出してしまって。結果は追々お伝えしていきたいと思いますので悪しからず」

これまでずっと黙っていた俺だが、最後に一つ付け加えておくことにする。

「阪中は放課後六時くらいに中庭で待っててくれ。聞きたいことがある」

そう言って教室をあとにした。自らの教室に帰り、昼食である弁当を持ってＴＣＣの部室に向かう道中、

「あとはお前の求心力にかかっているぞ。せいぜいお前の交友関係の広さが本当であることを祈っててやるよ」

「間違いなく本当ですよ。任せて下さい。期待に応えて見せましょ

う。というか、できなきゃ私たちは結構ピンチなので死ぬ気でやりますよ」

そりゃよかった。別に本当に信じていないわけじゃないのだが、俺の人生があいつの力量にかかっているという事実が、なんだかとても俺を嫌な気分にした。

α―18

どうやら本当に彼らはやる気らしい。昨日、妙な光景に遭遇してから、それが夢であるように祈っていたのだが、夢落ちなんて都合のいいことは作り話の中のことのようで、少なくともあたしの周りの現実世界では存在していないようだ。彼らは相変わらずあたしに関わる気でいる。しかもあたしの敵である、山内を仲間にして。

昼休みにうちの教室に来て、何やら話していた。あたしは一番窓側なので話の内容はほとんど聞こえなかったが、岩崎さんが楽しそうに話していたから、どうやらいいことがあったらしい。それを山内に教えている時点から、その情報はあたしにとっていいことじゃなくなったと思うけど。

山内は心の中で爆笑しているに違いない。敵である自分にそんな情報を与えるなんて、という感じだ。

もう放課後になっていた。時刻は五時を回り、校内に残っている生徒は半分もいなかった。あたしはまた教室に一人で残っていた。何とかこの袋小路の状況を脱出する方法を考えているわけなのだが、正直思い浮かびそうにない。彼らのことを考えるだけで、気が気じゃない。

あたしに関わることを止めさせたい。でもあたしから彼らに近づくのは躊躇われる。いったいどうすれば・・・。

そこであたしの目の前は真っ白になった。難しいことを考えすぎて、頭がおかしくなったかと思ったが、どうやらそんなことはなく、

ただ真っ暗だった教室に明かりが点いただけだった。

あたしは蛍光灯のスイッチのあるドアのほうを見た。そこにいたのはまたしてもあいつだった。

「こんな遅くまで何をしてるの？」

気持ちの悪い満面の営業スマイルを浮かべた山内が、昨日のデジャヴのように、そこに立っていた。だが、昨日と違って、その背後に二人はいないようだ。

「あんたこそ、こんな時間に何しているんだ？」

「君が心配だったんだ」

「お生憎様。あんたに心配されるほど落ちぶれてないよ。いい加減あたしのこと、放っておいてくれない？」

あたしは冷たく言い放った。だが、山内はそんなことお構いなしにいつもの微笑を湛えたまま、

「放っておけるはずないだろ？君は僕の彼女なんだから」

「いつあたしがあんたの彼女になった！過去も、今も、未来も、あたしはあんたの彼女に成り下がるつもりは毛頭ないね」

こう言うと、山内は表情を一転させた。今までの善人面した営業スマイルは一気に消え失せ、代わりに怒りの表情を浮かべる。

「まだ、あんたは自分の立場が解っていないようだな。まあいい。今日はそんなあんたの石頭でも簡単に理解できるであろう、とっておきのショーを用意している。あんたに見せることはできないが、きっと明日、学年中の噂になっているだろうから、それを聞いて現

状を理解してくれ」

何やら意味深なことを言った。あたしは眉をひそめて、

「どういうこと？」

「この前紹介した、俺の敵であり、同時に仲間でもある連中が、今日の昼休みにうちの教室に来ていただろう。その二人が面白い情報をくれた」

二人が来ていたことはあたしも知っていたが、内容は知らない。とても嫌な予感がした。

「あの二人は誰かの依頼を受けてあんたをいじめから守るために動き出したんだ。その依頼主が阪中みゆきだと明かしてくれた。しかもクラス中の目の前で。これによって俺は、あの二人組みに加えて、もう一人の裏切り者に対して、制裁を下すチャンスを得た。俺があの二人に制裁を与えなかった理由は一つ。計画を俺にしか話していなかったからだ。俺にしか話していなかったはずの計画が、いじめの黒幕に筒抜けになっていたら、はっきり言って怪しい。だから俺は動くことができなかった。しかし公衆の面前で計画が話された今は、そんな心配はない。だからこれから処刑を決行することにした」

あたしは心臓が止まったかと思った。いや、実際に止まったのかもしれない。寒い。急に寒くなった。あたしの周りだけ、気温が一気に下がった気がした。そんな感覚とは矛盾し、身体中から生暖かい汗が噴出し、心臓はその鼓動を早めている。

止めてくれ！お願い、それだけは・・・。

あたしは叫んだ。だが、声は出なかった。声帯丸ごと、誰かに取

られてしまったかのように、全く声にならなかった。あたしが一番恐れていたことが、今現実になろうとしていた。

あたしは腰が抜けたように膝から倒れた。そんなあたしを見て、山内は満足そうにうなずいた。

「先に阪中の方に制裁をしよう。確か、男が呼び出していたな。そのあとにあの二人をやろう」

ゆっくりと身体をドアのほうに向け、山内が歩き出した。あたしは何とか這って動き、山内の足にしがみつく。そしてのどの奥から搾り出すように叫んだ。

「止めて！あたし、あんたの言うこと聞くから。何でも聞くからそれだけは止めて！」

「ありがとう。やっと僕の気持ちが届いたんだね。でも、いつ裏切るか解らないからなぁ」

山内の顔は、本性である悪人面から、営業用の善人スマイルに早代わりしていた。

「そうだ！君が二度と僕から逃げ出さないために、今回は保険としてやっぱり決行しておこう。そしたら君も誰が本当の主人であるか、忘れないよね？」

そう言って、得意の営業スマイルであたしに微笑みかけると、強引にあたしを振りほどくと、ドアの向こうの闇の中に消えていった。

「待って！お願いだからそれだけは・・・」

あたしの叫び声は、校舎中に響き渡り、そして消えていった。まるで、先の見えない、闇の中に吸い込まれていくように・・・。

β—20

すっかり陽は落ち、校内は闇に包まれていた。日中はよく晴れ、冬服に衣替えした制服では、にわかに汗ばむほど暖かかったが、闇に包まれえた現在は、師走を目前に迎えた十一月下旬に相応しい冬の気温になっていた。

先ほどまでグラウンドや中庭を暖かく照らしていた校舎の照明も消え、辺りはぽつぽつと心もとない街灯が、いくつか光を漏らしているだけだった。

高校にしてはなかなか広いこの敷地も、今では闇に閉ざされていて、その広さを感じることができない。そしてつい二時間前まで生徒たちの楽しそうな声で騒がしかったこの場所は、今はとても同じものと思えないほどシーンと静まり返っていた。人影もほとんど見当たらない。

そんな暗闇の中、中庭に備え付けてあるベンチに人影が一つ。はっきり言って顔などまるで見えないが、かろうじて制服から女子生徒であることが見受けられる。

その女子生徒は、誰かを待っているように見える。しきりに辺りを見回し、誰もいないことが解ると、校舎についている、大きな時計を見上げて一つ、大きなため息をついた。

そこに近づく人影があった。影は一つ。ブレザー姿で、ベースボールキャップを目深にかぶっているが、おそらくここの高校の生徒だと予想がつく。

ブレザーの男は女子生徒に限界まで近づいて、背後から声をかけた。

「阪中みゆき」

名前を呼ばれた女子生徒は、振り返った。そして、

「なんであんたがここにいる？阪中みゆきはどうした？」

「もう帰られましたよ。三十分前くらいですかね？」

男の、狐に化かされたような声とは裏腹に、女子生徒の声は少し興奮しているように上ずっていた。

「なぜあんたがここにいる？」

「それはですねえ・・・」

「あんたを罠に嵌めるためだ」

女子生徒――岩崎の言葉をさえぎり、俺が正解を教えてやった。

「あんたはすっかり罠に嵌ったんだよ。最初から阪中なんてここにはいない」

口元しか見えないそいつは、苦々しそうに口元を歪めている。が、すぐに、にやっと口角を上げた。

「俺は何もしていないぜ。何だか知らないが、人違いじゃないか？」

「しらばっくれるのはよせ。何の用でこんな時間に、帽子を目深にかぶって、背後から女子生徒に話しかける必要があるんだ？あんた

は昼休み、阪中が密告者であることを知り、俺たちがここに阪中を呼び出したのは聞いてここに来たんだろ？」

黙りこんでいるそいつに対して俺は言ってやった。

「あんたが、斉藤・横山を襲い、日向に対していじめを行っている黒幕だ」

「何のことを言っているか、さっぱり解らないな。だが、こんな冤罪で人の名誉に傷をつけていいのか？裁判沙汰になるぜ」

確かに、こいつはまだ何もやっていない。だが、そんなこと言って逃げられると思ったら大間違いだ。

「苦しい演技は止めろ、山内。俺がお前に気付いてないとでも思ったか？」

表情が変わった。と言っても、見えているのは口元だけだが、上がっていた口角が下がり、真一文字になっている。

「あんたには確か、クラスメート全員にいじめについて聞いてないと言ったが、本当は聞いていたんだよ。まあ、どいつもこいつも口ごもって曖昧な返事しか、得られなかったがな。しかしあんたはなんて言った？知らない、と言ったんだ！はっきり、言い切った。他のやつが全員口ごもって曖昧に返事したにもかかわらず、だ」

そいつは無言で返答する。

「他にもまだあるぞ。最初にあんたに相談を持ち寄ってとき、俺たちは、日向がひどい目に合っている、とだけ言ったのに、あんたはいじめだと正確に把握していた。そして決定的だったのは、あんたが俺たちを紹介したときの日向の反応だ。日向は暗くなった放課後の教室に現れたあんたに対して、明らかに警戒し、敵意をむき出しにしていた。まあ、阪中から、日向によく話しかけている人、として紹介されたときから怪しいと思っていたけどな」

日向に近づいたやつがターゲットになっているはずなのに、阪中が『よく日向に話しかける人』として認識していたやつがどうして狙われないんだ。はっきり言って、黒幕としての才能が欠けている。そして岩崎でも思いつくような、簡単な挑発に乗り、黒幕にもかかわらずこんなところにのこのこ出てきてしまったのは致命的である。

「これでもまだ、自分は関係ないと言い張るのか？」

俺はそいつに近づき、ベースボールキャップを吹っ飛ばした。

「本当に関係ないなら、なぜこんな変装じみたマネをして阪中に話しかけた？クラスメートなんだから普通に話しかければいいじゃないか？それと、俺たちに対して、正体を隠し通そうとした理由も一緒に教えてくれ」

ベースボールキャップを取ったそいつは紛れもなく、山内だった。山内はしばらく下を向いたまま、黙り込んでいたが、くっくと小さく声を出していたかと思うと、大声を出して笑い始めた。そして、

「そこまでバレていたとは、正直驚いた。なかなかの観察力だな。阪中を一人にしておびき出そうっている作戦もあんたが考えたのか

？完全に騙された！」

ゲシュタルト崩壊が起きたのか、山内は自分の失態を大声で笑っている。俺たちが見たことのない表情で、かつてこんなおかしかったことはない、というほど豪快に笑っていた。そんな山内を見て、岩崎は困惑したような表情を見せたが、気丈に言った。

「自分の負けと犯行を認めるんですね？」

「ああ、認める。全部俺が指示してやったことだ。あんたたちの推測どおり、俺が黒幕だ。俺は今まで気に入らないやつを実力行使で消してきた。クラスの連中は恐怖で押さえつけた。そして仲間は金で買った。そうやって一つの大きな集団を作って日向ゆかりをいじめていた。あいつが俺をバカにしたからな！お前らの予想は大方当たっていたことを認めよう。だが、俺はあんたたちの安い挑発に乗ってここに参上したわけじゃない。あんたたちと阪中は、どうやら結構深くまで知ってしまっているようだから、間違いがあるようじゃ困ると思って、用心のために来ただけだ」

「そうですか。これは安い挑発などして申し訳ありませんでした」

岩崎は、山内の話など、全く信じていない、という感じで返答した。内容も皮肉めいている。

「それと、さらにもう二つ、あんたたちは間違いを犯した」

山内も、岩崎の話など全く聞いていなかったようだ。気を悪くした様子もなく、何やら気になることを言った。

「ほう。それはいったいなんでしょう？教えて下さいませんか？」

「一つは、俺は自分がしたことは認めるが、負けは認めていない。そしてもう一つは、」

そこで一回区切り、いやらしく微笑みながらためを作った。すると微笑む山内の背後から、いったいどこで待機していたのだろうか、うちの制服のものとはおよそ違う、学ランを来た他校の生徒が三人、現れた。そして、

「ターゲットは阪中だけじゃなくあんたたちも、だったってことだ！」

山内は高らかに叫んだ。

山内の背後から、急に登場してきたそいつらは明らかに真面目そうには見えず、学ランを着てはいるが、学校に行っていないだろうという結論は、少し考えただけで簡単に導くことができる。そんな外見をしている。

そしてどうやら加虐趣味を持ち合わせていそうだ。三人が三人とも、実に楽しそうに、俺たちに近づいてくる。

「最初はどっちがいいかな？やはり女はあとに取っておくべきか」

俺にとって、とっても喜ばしくないことを山内が口走った。気のせいか、三人が俺のほうに向かって行進してくる。手足が震えているのが、見ずとも理解できた。これが武者震いってやつか。初体験だ。寒いはずなんだが、首元や背中にはびっしょり汗を掻いている。しかも外気に合わせ、上昇しようとする体温を抑えるために、俺の身体が躍起になって出している汗と違って、粘っこく、はっきり言えば気持ち悪い。

岩崎の、成瀬さん！という声が聞こえた瞬間、三人組の一人が、

俺の首元を掴むべく、棍棒じみた右手を伸ばしてくる。だが、その右手は俺に届くことなく、そのまま停止した。こいつはびびっているのか、顔を歪ませている。

「こういう展開を俺が予想できなかったと思うか？」

はっきり言って強がりにしか聞こえないセリフだが、俺の目の前に屈強なる他校の生徒が青ざめて、脂汗を掻いている事実があるせいか、山内は驚きを隠せない様子が、薄暗い闇の向こうから感じることができる。

俺の右手には秘密兵器、リーサルウェポンが握られている。岩崎印のスタンガンである。どこで入手したかは知らないが（聞いたら危険なことになると思うから、これからも聞かないつもりだ）、どうやら命に支障がないくらいに電圧を抑えてあるらしい。

岩崎がほっとしたような表情をしたのを目の端で捉えながら、俺は山内に向き直った。

「三人、あんたを含めれば四人か。問題ないな」

威勢よく言ったつもりだが、声が上ずった気がする。

「降参して下さい。私たちは危害を加えるつもりはありません」

同時に俺の真横で岩崎もスタンガンを自分のかばんから取り出した。

その様子を苦々しい表情で見ていた山内だが、またもや口角を上

げ、得意のいやらしい笑顔を作った。楽しそうに笑い、

「あんたたちいいよ。非常に面白い。だが、まだ詰めが甘い」

今度は四方八方から同じ学ランを着た他校の生徒が続々と姿を現した。その数は軽く十人を超えている。

「俺がこういう展開を予想できなかったと思うか？」

山内は、俺が先ほど言ったセリフをそっくりそのまま引用した。俺にこう言われたのがよほど頭に来たのか、もしくは今の状況を皮肉った嫌味だろう。

「さっきも言ったが、あんたたちはいろいろ知りすぎている。最低でも斉藤君くらいは弱ってもらわないと困るな。勢いあまって殺してしまったら、そうだなぁ、少々厄介だが、お父様に頼んで何とかしてもらおう」

簡単に囲まれてしまった俺たちはその場に立ち尽くしていた。岩崎の顔には、少なからず恐怖の色が浮かんでいる。

周りにいる他校生アーミーを制し、山内がゆっくり近づいてくる。そして俺に顔を寄せて、

「どうだ？この状況も予想できてたか？」

すっかり勝ち誇った顔だ。俺は言ってやる。

「ああ。この状況も予想済みだ」

言い終わったか否か、山内は俺の顔に思いっきり右フックをかまし、俺をぶっ飛ばした。これも初体験だ。今日は初体験づくしだ。全く嬉しくない。感想は痛い！の一言だ。

「強がりはたくさんだ！普通の凡人の癖に、この俺を見下すな！俺をバカにするな！俺は山内コンツェルンの一人息子だぞ！内務相の甥だぞ！」

頭がいかれたのか、妙なことを言い出した。

「家族の自慢なんてどうでもいいんだよ。お前自身は何者なんだよ。お前個人はいったい何ができるんだよ」

いかれた御曹司殿はもう一度、俺を殴った。感想は相変わらず、痛い！しか出てこない。

「あんたは自分の立場を理解していないようだな。だが、俺も鬼じゃない。状況を理解できていないようなやつをいきなり殺すなんてことはしない。助かる道を示してやろう」

そう言ってお優しい御曹司殿は、俺に向かって右足を差し出した。

「まず誠意をこめて謝りな！額を地面につけて精一杯謝りな。そして俺の靴を舐めて、俺に忠誠を誓いな！」

何か勘違いしているな、こいつは。今は江戸時代じゃないんだぜ。こいつをこんな風に育てたお偉い山内コンツェルンの代表取締役の顔が見てみたい。

「そっちの出方によっちゃ、許してやらないこともなかったが、も

う許さん。徹底的にいじめてやるよ」
「何言っている？聞こえなかったのか？日本語が解らないのか？あ・や・ま・れ！」

山内の言っていることを無視して、俺は質問で返す。

「あんた、神を信じるか？」
「はぁ？」

あからさまに変な顔をした山内。

「そんなもん信じるわけないだろ？」
「じゃあ、奇跡を信じるか？」
「いい加減にしろよ。まさか、神様が奇跡を起こしてくれてこの状況を打破してくれる、なんて考えてるんじゃないだろうな」
「それこそまさか、だ。俺も神なんて信じない。奇跡なんて単なる偶然だ」
「さっきから何言ってるんだ？結局この状況が解ってなかったみたいだな。もういいよ。こいつを殺せ！」

などと強気なセリフを吐いていた。だが、御曹司殿の自慢のアーミーどもは動く気配がない。

「そのセリフ、そっくりあんたに返すよ。周りを見てみな」

俺の言葉に、いぶかしみながらも、山内は周りを見渡した。

そこには山内の他校生アーミーをはるかに凌ぐ、屈強な戦士たちがいた。空手部、柔道部、合気道部、ボクシング部、その他いくつもの格闘系クラブに所属している生徒が、俺たちを囲んでいる他校

生アーミーの周りを、さらにぐるりと囲んでいた。その数、およそ四十人。

「俺は信じちゃいないが、斉藤はキリスト教徒。本気で神や奇跡を信じていたようだ。そういう敬虔なクリスチャンには、どうやら奇跡は起こるみたいだぜ」

これは予想外だったようで、山内はかなりたじろいでいる。彼自慢の他校生アーミーもびびりまくって今にも逃げ出しそうである。そんな迷える子羊たちに俺は救いの手を差し伸べてやることにする。

「これまたさっきも言ったが、俺たちは危害を加えるのが目的じゃない。それに目的は山内一人だ。他の連中は逃げたきゃ逃げていいぜ」

言い終わるか否か、俺と岩崎の周りにいた他校生アーミーは、蜘蛛の子のように、散り散りになって闇の中に消えていった。

一人になってしまっては、もはや何もできない坊ちゃんには、選択肢は一つしか残されていなかった。

「悪かった！俺がしたことは全面的に謝る！だから、だからどうか・・・」

「まあまあ。少し落ち着いて下さい。私たちはあなたと話し合いがしたかったんですよ。だからこんな暗がりではなく、明るいところで落ち着いて話そうじゃありませんか」

そう言って、岩崎は地面に転がったままの山内の首根っこを掴むと、まだ煌々と電灯が点いている昇降口へ引っ張っていった。

「さて、山内さん。我々があなたに望むものはたった一つです。クラスメート・横山さん・斉藤さん・阪中さん、そして日向さんに。誠意と反省をこめて謝罪して下さい。本当なら直接言っていただくのが筋だと思うのですが、その辺は妥協しましょう」

左手に持っていた自分のかばんを置き、何やらごそごそしたあと、憤然と胸の前で腕を組んだ。どうやら準備万端のようだ。

こう言ったが、対する山内のほうに反応がない。この期に及んでまだ駄々をこねているのか、この坊ちゃんは。呆れるね。それにとても面倒だ。

岩崎も俺と同じような気持ちになったのか、

「私は力ずくとかあまり好きではないのですが、これ以上抵抗するなら手段を選んでいられません。私は、良き友人たちのために心を鬼にしましょう」

後ろに従えていた屈強な戦士の一人に合図を送った。その熊みたいなやつは、のっしのっしと、下を向き立ち尽くしている山内の前に躍り出た。

それを見て、慌てたのか、

「ま、待ってくれ。謝る。今すぐ謝る。すまなかった。俺は少しやりすぎたようだ。反省している。これからはこんなバカげたこと絶対にやらないと誓う！だ、だから許してくれ！」

実力行使に簡単に屈した山内は、手のひらを返したようにあっさりと頭を下げた。

しかし、心を鬼にした岩崎にその誠意は全く届かなかったようで、山内の坊ちゃんの要求は却下され、

「頭が高いですよ？誠意を見せたいなら、それなりの態度っていうものがあると思いませんか？」

早い話が、岩崎は土下座を要求した。まさに鬼。一つ突っ込んでおくなら、こいつは被害者ではない。

そんな岩崎の態度に自尊心を傷つけられたようで、山内はしばらくうらめしそうにらめつけていたが、屈強な戦士を前に相変わらず選択肢は一つしかない。

「早くして下さい。それとも彼に手伝ってもらいたいのですか？」

岩崎に弱点を的確に見抜かれている。先ほど以上に機敏な動きを見せ、山内はとうとう土下座を決行した。

「申し訳ありませんでした！もう二度とこんなことはいたしません。どうか私にご慈悲を！」

「解りました。ここまでして下さったら、きっと皆さんも許して下さるでしょう」

あっさりした山内の態度に、加虐趣味に目覚めてしまった岩崎は物足りない様子だったが、不承不承うなずいた。

「成瀬さんは何か？」

突然俺に振られた。俺は別段力を注いでいたわけじゃないし、こ

いつに個人的な恨みはないから特に言うことはない。が、唐突に個人的な恨みを思い出した。

俺は正座している状態の山内のネクタイを掴んで、強引に立たせたあと、豪快に右のこぶしを顔面に炸裂させた。

「これでおあいこだ」

二発ぶん殴られたことを思い出したのだ。

「あんたのやったことは、紛れもなく犯罪だ。それ相応の償いといけないわけだが、それは明日解る。せいぜい神に祈るんだな。もしかしたら、奇跡起きるかもしれないぜ」

俺が言い終えると、山内はさっさとこの場から逃げ出していった。

一応これで事件のほうは終焉を迎えた。

岩崎は、自慢の格闘系クラブアーミーを解散させると、俺たちもやっと帰路につくことができた。

「これで本当に終わりますかね？」

「大丈夫だろ」

「山内さんはちゃんと反省してますかね？」

「そりゃ無理だろ。だからこうしてちゃんと最後の一手を考えてあるんだろ」

岩崎は、そうですね、と言ってしばらく黙っていた。

駅までの道のりは、なんだかいつもと違う景色に見えて、ちょいと早めのクリスマスイルミネーションをつけているイベント好きの家も、いつもと違って何だか穏やかな気分にさせてくれた。

駅に着き、電車に乗ったとき、ふと思った。何でこいつはこんなにしんみりしているんだ？

「おい」

「え？何ですか、成瀬さん」

「どうした？何しんみりしてるんだ？」

一応とはいえ、生徒会長からの依頼も、日向の問題もいい形で終わらすことができたのだ。いや、まだこれからやることが残っているのだが、とはいえひとまず、ここは喜ぶところであり、少なくともしんみりするようなところではない。こいつのことだ、いつも以上にハイテンションになることは火を見るより明らかだと思ったんだが。

「相談第一号を首尾よく解決したんだ。これからは相談も増えるかもしれないぞ。嬉しくないのか？」

「いえ、嬉しいです。全部ひっくるめてこんなにうまくいくとは思わなかったので、何だが不思議な気がして」

よく言う。いつも簡単そうに解釈して、解決を誰よりも信じていたのはあんたじゃないか。『こんなにうまくいくとは思わなかった』なんてセリフ、どの口で言いやがるんだ。

要は、こいつも心のどこかで不安だったのだろう。勢いだけで設立してしまったわけだし、依頼が来なかったときはかなり不安だっ

たはずだ。来たら来たで、一発目にしてはやけに難題、それに付随して自体はどんどん大きくなるばかり。不安で押しつぶれそうだったに違いない。口先だけでも大きく出て、成功を信じなければやっていけなかったのだろう。

「たぶんイベントのあとの喪失感みたいなものだと思います。実感できないんですよね、首尾よくうまくいったということが。明日には元の私に戻っていると思います。明日になれば実感できると思います。だからあまり心配なさらないで下さい！」
「もともとあんたのことは心配してないよ」
「そ、それはどういう意味ですか！」
「あんたが強い人間だって知っているからな」
「・・・それはどういう意味ですか？」

全く違うトーンで同じセリフを言った。

「今日は世話になったな。格闘アーミーやスタンガンも。助かったよ」
「いえ、そんな！当たり前のことをしたまでです！」
「そうか」

俺はそこで話を切った。もう今日は疲れた。二発も殴られたし、妙な汗も掻いたし。心も身体もボロボロだ。玄関開けたら二秒で寝ることができる自信がある。こういう日は電車がのろく感じてしょうがない。いつもは見落としがちな、ありきたりな風景にも目がいってしまう。

「あの・・・、成瀬さん？」
「何だ？」
「えっと、どうしたんですか？何だが、今日は、お優しいですね・・

・」
「そうか？」
「そ、そうですよ！いいいいつもはそんなこと言って下さらないじゃないですか！」
ただ単純にあんたがお礼を言われるようなことをしていないだけじゃないか？とはさすがに言わなかったが、そう思ってしまうほど俺は意識していない。
「俺もなんかおかしいのかもな。あんたと同じで、きっと明日には元に戻るだろうよ。今日はいろいろありすぎた」
岩崎は納得いかないようで、まだ何か言いたそうだったが、口を開いては躊躇って、意を決したように顔を上げたはまたうつむき、を繰り返していた。結局何も言わず仕舞いだったが、意外なことに、岩崎は上機嫌で窓の外を見ながら、時々思い出したように穏やかに、楽しそうに微笑んでいた。
今日はやはり何か変な日であるようだ。岩崎はいつも以上に情緒不安定になっているようだ。
「さっきから何ニヤニヤしてんだよ。あんた、今度は気を抜きすぎじゃないか？」
「そっ！そんなことありませんよ！ていうか、ずっと見てたんですか？」
俺がずっと観察していたことに気付いた岩崎は、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら怒るという高等技術を見せた。
「俺もどこかおかしいようだから、今日はいいが、まだ全て終わっ

たわけじゃないんだぞ。明日は最後の詰めをするんだからな」
「解ってますよ！任せて下さい。完璧にやり遂げてみせましょう！」
「頼むぞ。こう見えて、俺はあんたを結構頼りにしてるんだからな」

俺がこう言った直後、俺が降りる駅に到着し、ドアが開いた。

「なっ！や、やっぱり成瀬さん変です！絶対変です！」

そのあとも顔をさらに真っ赤にしながら何やらわめいていたが、発車を告げるベルの音に阻まれて、何を言っているか、俺にはさっぱり解らなかった。

そんな感じで、人生で一番疲れた今日は終幕を迎えた。はあ・・・。

α―19

心も身体も重かった。今日ほど学校に行きたくない日はない。

昨日、山内がいなくなってから、あたしはずっと学校の周りを走り回っていた。だけど結局阪中を見つけることができなかった。それどころか、成瀬も岩崎さんも、山内も見つけることができなかった。あたしは山内の制裁を止めることができなかった。

今日はやりきれない気持ちで心の中がいっぱいになっていた。行きたくない。そんな残酷な現実見たくなかった。だが、あたしが休むと誰かが犠牲になってしまう。

このジレンマに苛まれながら、重たい身体を引きずり、学校に到着した。また地獄のような一日が始まる。そして新たに加わるであろう嬉しくない情報。教室に入ると、

「おはよー」

本来なら普通である朝の挨拶が、あたしにはまるで関係ない。遠い過去の話のような気がする。

「あの・・・・・・」

あたしはこのときふさぎこんでいて、全く気付いていなかった。心ここにあらず、って感じだった。

「あの、おはよー、日向さん・・・・・・」

えっ？あたし？

あたしは驚きのあまり、すっげー勢いで振り返ってしまった。

「あ、日向さんおはよー・・・」

「・・・おはよ」

えっ？本当にあたしに言ったの？混乱しまくっていて、全然愛想よくできなかった。何？いったい何が起きてるの？これは何かのドッキリ？

そのあと、幾度となく挨拶してくれるクラスメートにどんどん混乱の渦に飲み込まれてしまって、ドア付近で立ち尽くしていた。

「あの、日向さん？」

はっとして、意識を取り戻すと、目の前には阪中がいた。ただの間抜けに成り下がったあたしが最初に言った一言は、

「これ、どうなってんの？」

今まで全く話しかけてくれなかったクラスメートが、朝の挨拶をしてくれているのだ。本来ならば喜ぶべきところだが、はっきり言ってどうしたらいいのか解らなかったのだ。

「ごめんなさい。今まで、本当に・・・」

「全然！気にしてないよ。あたしこそ・・・。あたしに関わったせいで事件に巻き込まれちゃって。ってあれ？もしかしてこれって・・・」

「全部解決したみたいですよ！」

あたしは阪中に教えてもらうと、すぐさま、机の中を見に行った。そこには手作りの新聞みたいな、カラーコピーで印刷されたプリントが入っていた。そこにはＴＣＣ新聞と書かれていて、一番の大見出しには『いじめ解決！黒幕は山内氏』となっていた。

『二ヶ月も続いていたいじめが、ついに！ＴＣＣの手によって見事解決！黒幕である山内氏を反省させることに成功し、謝罪させることにも成功した。もしまた彼の手によっていじめが行われるようなことがあったならばこの新聞を見せつけてやって下さい。それでも効き目がない場合は我々にご一報を！』

と書いてあり、カラーコピーで貼り付けてある写真は土下座で謝っているところや、恐怖に怯えているものであり、鮮明に表情が見て取れた。そして末尾には注があり、『動画が見たい人はＴＣＣまで』と記載してある。

これを見て、まずあたしはほっとした。成瀬と岩崎さんは無事だったようだ。制裁を受けなかったようだ。よかった。

改めて見てみると、山内はとてもひどい格好をしていた。なんだ、こりゃ。涙と鼻水で顔がすごいことになっている。そんなに怖いことがあったのか。でも少しも同情する気にならないね。あんたはそれだけのことをしたってことだ。これで少しは反省してほしいね。

それからクラスのみんなはあたしに代わる代わる謝ってきた。みんな真剣に謝ってくれたから逆に恐縮してしまった。悪いのは山内であって、みんなじゃないんだ。そんなに頭を下げられるとかえって後ろめたくなってくる。

それにあたしもみんなに迷惑かけた。あたしのせいでみんなを危険な目に合わせてしまった。本当に申し訳ないと思った。

一つ、山内に感謝したいことがあった。それはクラスメートが本当はいい人だということがはっきりと理解した。みんなは本当にいい人だった。この学校に入りたてのころ、みんなのことをよく知らないにもかかわらず、バカにしていたことを心から詫びたくなった。本当に申し訳ない。

この事件はとても苦しくつらかったが、学んだことも多かった。日本の高校に学ぶべきことなんて何一つないと思ったが、実際は無限にあった。正直、あたしがどんなに世間知らずで、どんなに無力であるかをまざまざと理解することができた。おじい様の言っていたことは真実だったね。おじい様には悔しいが感謝をしなければならないな。

今日は久々にいい一日だった。久しぶりにたくさんの人と話した。楽しかった。退屈そのものだった授業も、今日に限ってなかなか悪くないと思えた。本当にいい一日だった。

あっという間に、過ぎていった一日だった。あっという間に放課後になった。何か今日が永遠に続けばいいと思ってしまうほど、楽しかった。明日もこんな一日になってくれるだろうか？

でも、あたしにはまだやることが残っている。それは今日楽しく過ごすことができた、一番の要因であり、今回の事件、一番感謝しなければいけない人たちに会いに行くことだった。あたしは、ちょっと前まであたしの居場所だった、あのにぎやかな部室に向かった。

そういえば、結局山内は来なかったな。いったいどうしたんだろうか？

エピローグ

今日は本当に疲れた。

昨日は昨日で普段あまり体験することのない緊張の連続で身体が妙にこわばってしまって、朝起きたら身体の節々が筋肉痛になり、悲鳴を上げていた。それなのに今日は朝五時起きで、学校に行き、パソコンやらプリンタやらに向かってかなり事務的な仕事をこなしていた。なぜこんな朝っぱらから働かなきゃいかんのだ。どう考えてもつらすぎる。どの会社の会社員だってまだ仕事を始めていないだろうよ。

昨日言ったとおり、今日は総仕上げ的な作業をやらねばならなかったのだが、俺はまさかここまでするとは思ってもみなかったね。適当なサイズのコピー用紙に手書きで適当に事実だけを書いて、クラスの人数分コピーするだけでよかったんじゃないかと思うね。やりすぎだろ。いろんな意味で。

もし、自分の名誉とかプライドとか捨てて、山内が民事訴訟を仕掛けてきたら、かなり面倒なことになっていたかもしれない。まあ結局山内は名誉やプライドのほうが大切だったみたいだかよかったが。

写真などを載せるとはね。カラーコピーで。近年の進みすぎる技術について、深く考えたくなる今日この頃である。涙や鼻水までしっかり見て取れるほど、コピーの洗練化が進んでいるとは。驚きだ。

あのとき、岩崎のかばんの中には、手のひらサイズのビデオカメラが入っていた。そしてポケットには音声レコーダー。罪の自白の

場面では、音声レコーダーを使い、謝罪の場面では、かばんの隙間からビデオカメラを使い、動画として撮っていたのだ。例のプリントに載っている土下座シーン等の写真はビデオの一部を抜き出して載せたものだ。

動画のほうは、ＴＣＣの部室に大切に保管してある。自白の音声は、記憶デバイスにコピーして、山内に送っておいた。何かおかしな行動をとったらこいつを警察に送ってやるからな、という脅しの意味をこめて。

結局俺たちはあの場で事件を終わらせ、この事件を警察に通報しなかった。大きな事件にするのは日向も本意ではないだろうし、実際さすがに警察に通報するのは気が引けた。あいつの場合、保護者の育て方が悪かったんだ。そんなやつを警察の通報するのは何だか悪い。

まあ、ここまで大規模にやったのは初めてみたいだったし、要はしっかり反省させて、二度とこういうことをやらせないようにすれば良いわけだ。だったら他の方法で事足りる。

あのクラスに新聞として、この情報を配ったのは、またあいつが似たようなことをしたときに、対抗する武器としてこいつが必要になるだろうと思ったからだ。

さらにそれでも対抗できなかったときに限り、俺たちが動画やら、自白の音声やらを使って事を収めようと考えてこういうことをしたのだ。

実際、これで何とかなるかどうかなんて、はっきり言って俺には解らないことなのだが、どうや今のところ何とかなりそうである。

ほっとした。

今日は疲れた一日だったが、ようやく放課後である。早く終わってほしいが、まだやらねばいけないことがあった。

「いやー我々のＴＣＣ新聞、結構評判良いみたいですよ！これで相談者もガンガン増えるかもしれないですね。これから忙しくなりそうです！こりゃ大変そうですねー」

何だか、とても嬉しそうな岩崎を横目で見ながら、俺は窓から眼下に広がる平和な日常を見ていた。関係ない人たちにしたら、昨日までと今日は何ら変わりないと思うのだが、俺にはなぜか久しぶりに平和な光景を見ているような気がしていた。

岩崎はいつものハイテンションガールに元どおりで、やはり昨日は少しおかしかったということを実感しながらも、昨日くらいのテンションのほうがよかったのでは？と思ってしまう。

「何ですか？さっきからちらちら見て。何だかいやらしいですねぇ」

憎まれ口もいつもどおり営業中である。

「別に。それで横山や斉藤はどうなっているんだ？」

「二人ともいい感じですよ。横山さんは無罪放免が決まりました。不起訴処分みたいですよ。どうやら昨日の間に阪中さんが証言を撤回しに行っていたらしく、その新たな証言を元に、被害者の方に問い詰めたところ、とうとう自白したそうです。そしてめでたく横山さんの行為が正当であると証明されたわけです！よかったですね！」

「そうか。それで斉藤のほうは？」

「斉藤さんは意識を取り戻したようです。詳しくは聞いていないん

ですけど、目が覚めてからは見る見るうちに回復しているそうで、面会謝絶が解除されるのも時間の問題らしいですよ！こちらもよかったです！」

全てがうまくいったわけではない。日向はいじめを受けていたし、その影響として、斉藤は怪我じゃすまないレベルで痛めつけられ、横山は冤罪ながら勾留されていた。事実としてそれらは確実に存在していて、犯罪と呼ばれる行為が起こった。だが、事件は終わり、最悪の結果だけは避けることはできたようだ。

「どうしたんですか？成瀬さん。まだ情緒不安定なんですか？難しい顔したり、若干微笑んだりして」

こいつに言われるとどうも腹が立つな。お前のほうがよっぽど情緒不安定率高いだろうが！

「俺が情緒不安定だろうとあんたには関係ないだろ。迷惑をかけた覚えはないぞ」

「あります！昨日なんてどんなに私が迷惑だったか、成瀬さんには解らないでしょう！」

「解らないな。いったい俺が何をしてあんたに迷惑をかけた？」

「それは・・・」

「何だよ？」

「何でもありません！とにかく成瀬さんが情緒不安定になると私はいろいろ大変なんです！これ以上私を混乱させるようなことを言わないで下さい！もうっ、昨日の成瀬さんのセリフで、勘違いしてしまったじゃないですか・・・。私はてっきり・・・」

「はいはい。すみませんでしたね。これからはならないように努力しますよ」

岩崎の言っていることは全然理解できなかったが、こいつが時々理解不能なことを言うのは、以前から普遍的なことであり、深く考える必要はないのだ。

岩崎はしばらくぶつぶつと独り言をもらしていたが、落ち着いたのか、ふうと息を吐き、

「日向さん遅いですねぇ」
「そうだな」
「来ないんでしょうか？」
「そうかもな」

俺の生返事をどう思ったか、やる気のない年下の男を優しく諭すような口調で、

「成瀬さんは来てほしくないんですか？」

と言った。

「どうかな。来たら来たでめんどくさそうだしな」
「それは本当にそう思っているんですか？全く、日向さんには言っちゃだめですよ？」

こいつは本当に年上気取りで話しかけてくるな。何かむかつく。

しかし俺は正直本当に来てほしくなかった。俺がやったことは実に中途半端で、微妙なものだったからだ。日向は一番最初に屋上で会ったときから助けを求めていた。誰かに救ってほしいと思っていたのだ。結局俺が動き出したのはその約一ヵ月後。とても速やかな行動とは言えない。もっと早い段階で救うことができたはずだった。

そしたら、もっといろんなものを守ることができたかもしれない。

「なんでそんなに自分のことが嫌いなんですか？」

変なとこだけ、鋭い女、岩崎がエスパーでも使ったのか、俺の考えていたことを正確に読んでこんなことを言った。

正直返答に困った。俺だって好きになれるもんならなりたい。だが、どうしても無理なんだ。

「成瀬さんが思っている以上に周りの方は、成瀬さんに感謝していると思いますよ！もっと自分に自信を持って下さい」

「余計なお世話だ。そう簡単に割り切れないからこんな状態なんだろうが」

「またマイナス思考な意見ですね！」

どうやら怒っているらしい。情緒不安定なのはやはり岩崎のほうだった。そのまま俺のほうを睨んでいたようだが、俺の全く気にしていない態度に、呆れたようにため息をついた。

「一つだけ言わせてもらいますけど、」

「何だ？まだあるのか。説教ならお断りだ」

もうたくさんだった。他人にどうこう言われてもどうにもないということは俺自身が一番よく理解している。

「これだけは言わせてもらいますけど！成瀬さんが、わ、私を頼りにして下さっているように、私も成瀬さんを頼りにしてるんですからね！だからあまり後ろ向きなことばかり言わないで下さい！いいですね！じゃあ私はこれから一ノ瀬さんと待ち合わせがあるのでこ

れで」

一気にまくし立て、自分が言いたいことだけ言って、さっさと消えやがった。変なやつだ。だが、頭の中でこう考えているのとは裏腹に、俺はとてもいい気分だった。

コンコン。

ドアがノックされる。俺は専用のパイプイスから腰を上げ、訪問者を迎える。

「よう。久しぶりだな」

「そんなに久しぶりじゃないでしょ」

その反応は間違いなく日向のものだった。

さっさと中に入り、遠慮のかけらもなく、イスに座る。

俺は少々呆れながら、日向に続き、イスに座った。

「岩崎さんは？」

「生徒会長に用があるって、ついさっき出かけた」

この質問に対して興味がなかったのか、そう、と言って会話を終わらせた。

「で、今日は何の用だ？」

手元にあった、シャーペンを無意味に触っている日向に向かって、俺は言った。

「大した理由も言わずに辞めてったのはあんただぞ。その部室に何で来たんだ？」

日向は、しばらくうなっていた。そして出てきた答えは、

「そうだね、しいて言うなら文句を言いに」

「文句だと？」

「そう。あたしは関わるなって言ったよね？それに助けてくれとも言ってない」

なるほどね。どこまでも日向らしいこの反応に、俺はこみ上げてくる笑いに耐えることができず、思わず噴出してしまった。

「なっ！何で笑うのよ！」

「いや悪い。確かにあんたの言うとおりだ」

「じゃ、なんであんなことしたのよ」

「この事件は、別にあんたのために解決したわけじゃないからな」

日向は眉間にしわを寄せ、何が言いたいのか解らない、という顔をした。

「別にあんた個人のために動いたわけじゃない。あんたは俺たちが介入することを望まなかったかもしれないが、その他の、大多数のクラスメートが事件解決を望んだんだ。実際、依頼が来たしな。言うなれば、俺たちは社会秩序のために、この事件を解決したって訳だ」

この発言は予想外だったようで、日向は何か言い返したそうだったが結局何も文句を言えずに、どこか不満そうに、

「じゃあ、あたしのために動いてくれたって訳じゃないんだ」
「そういうことだ、がっかりしたか？」
図星をつかれたようで、急いで否定し出した。
「別に、そんなことないわよ！あたしはただ、人の力を借りずに自分で解決したかっただけなんだから！あんたこそ、調子に乗らないでよね、実際あたしはもう少しで解決できたんだから！」
確かに、と俺は思った。俺がしたことは、実際、余計なことだったのかもしれない。
日向ほどの能力があれば、どうにでもできるような、単純な事件だったし、山内もそんなに手ごわい相手ではなかった。俺なんかがしゃしゃり出てこなくても、事件は近いうちに解決できていただろう。いや、下手したら、俺が何かをしたせいで返って、事件解決が遅れたかもしれない。そういう意味では、俺のしたことは決して誇れるものではない。
「でもまあ、結局事件は解決したわけだし、みんなも喜んでたし、だからあんたのしたことは、そんなに悪いことじゃなかったよ！」
日向はあわてた様子で、唐突に、こう言った。どうやら黙り込んだことで、日向に気を使わせてしまったようだ。
「そりゃどうも」
この日向の言葉には、苦笑しながらこう言うしかなかった。
「それで、クラスのほうはどうだ？」

「ああ、うん。やっぱたどたどしいね。いじめ自体は終わったけど、事実として存在したわけだから、いきなり仲良くすることはできないね。あたしもつらかったけど、みんなもつらかったみたいだし。そう考えると、気を使っちゃうね、お互い」

日向は若干照れながら、さらっと言ったが、やはり相当つらかったみたいだ。この前教室で、山内を交えて話をしたときには気が付かなかったが、最初に会ったときに比べて、少しやせたように見える。吹き出物も少なからずあるし、想像できないくらいのストレスを感じていたんじゃないだろうか。夜もよく眠れなかっただろう。だが、

「でも、すぐ仲良くなれると思う。今日も朝、学校来てすぐ挨拶してくれる人も多かったし、半分くらいは後ろめたさからかもしれないけど。そのうち何とかなると思う」

日向は明るかった。疲れやストレスを感じさせないくらい、明るく話してくれた。無理をしているような気もするが、過去は過去のもとして、すでに前に歩き始めていた。

「そりゃ、よかったな」

心からそう思う。俺のしたことは、結局余計なことだったかもしれないが、日向が元気になって、未来に向かって歩き始めることができているのだから、結果オーライということにしてもいいんじゃないだろうか。

「全部あんたの力だ。運がよかったのもあったかもな」

俺は当然のことを言ったと思っていたのだが、日向にとっては予

想外の言葉だったようで、何だが変な顔をしている。

「どうかしたか？」

「あんた、それわざと言ってない？」

「どういう意味だ？」

俺には、それ、が何をさしているのか、そもそもどうしてそんな疑問が出てくるのかすら解らなかった。

日向は、何か言いたそうにしていたが、結局何も言わずに、

「まあいいわ。あんたは変なやつだからそう言うんだよね」

とてもバカにされたような気がした。

日向は急に話を変え、

「ところで、ずっと聞きたかったんだけど、」

と何だか、意味深なことを言い出した。

「何だ？」

「岩崎さんと付き合ってるの？」

突然何を言いやかがる。いったいどんな大脳をしていたらそんな考えが出てくるのか、さっぱり解らん。一度ＣＴスキャンかＭＲＩでも撮ったほうがいい。きっと、うねうね動き、たくさん足のある気味の悪い虫が、蠢いているに違いない。

「断じて違う」

仕方がないから、はっきり言っておいてやる。

「いったいどんな勘違いがあってそんな考えに辿り着いたのか、俺にはさっぱり解らんが、断じて違う」

そこまで言うか、こいつ。みたいな目で見られた。

「じゃあ誰か他に好きな人とか、付き合っている人とかいないの？」

「いないな。というか興味ない」

いったいこれは何のアンケートだろうか。

「そっかぁ」

日向はよっぽど窓の外が気になるようで、俺の方を見ずに、そう答えた。日向が聞いてきたから答えたのに、まったく興味なさげに、返事をされるととても不快である。

「あんたはどうなんだよ」

「えっ？」

「誰か付き合っているやつでもいるのか？」

「あたしはいないよ！」

言ってから気付いたが、聞かなきゃよかった。正直言って、俺は無神経すぎた。

気分を害して絶対怒鳴られると思って、恐る恐る日向のほうを見たら、また変な顔をしていた。俺が日向のほうを見ると、日向は表情見られたくないようで、相変わらず窓の外を見ていたが、ちらち

ら俺の方を見ているような気もする。顔もほんのり赤らんでいる。少なくとも怒ってはいないようだ。

「もし、もしあたしが、あんたに、えっと、その、」

何が言いたいんだろうか？俺は日向が言い終わるまで待っていたのだが、しどろもどろしていて、全く進まなかった。

すると、

「成瀬さん！今すぐ帰る準備をして下さい！今から、ってあああああ！」

という感じで慌しく、岩崎が帰ってきた。うるさい。

岩崎は、俺と日向を交互に見たあと、日向の顔をまじまじと見ていた。日向は困った様子で、明後日の方向を見て、決して岩崎と眼をあわせようとしなかった。

そして、矛先を俺に戻して、

「お二人はいったい何をしていたんですか？こんな時間に年頃の男女二人きりが密室でいったい何をしていたんですか！」

帰ってきて早々、うるさすぎる。何がそんなに気になるんだ。

「しゃべっていただけだ。他には何もない！」

「じゃあ何をしゃべっていたんですか？」

「他愛もないことだ」

「嘘つかないで下さい！他愛のないことなら、こんなピンク色の雰

囲気にはなりません。日向さんが頬を赤らめたりはしません！またどうせ成瀬さんが情緒不安定になって、恥ずかしいセリフを連発していたに違いありません！」

この状況を打開するのにはかなりの時間を要したのは言うまでもない。何度弁解しても岩崎は俺の言うことなど、全く聞かないし、日向はなぜか会話に入ってこないし、第三者がこの部室に来て何とか状況を収集することに成功したが、如何せん疲れた。このタイミングで来てくれた生徒会長に、とても感謝したい。

岩崎が急いで帰ってきた理由は、生徒会長とともに横山を迎えに行って、その流れで斉藤の見舞いに行こうということだったようで、状況を収集した後に、すぐさま出発することになった。

いろいろ大変だったが、こうしてＴＣＣ初の事件は終わりを告げた。最終的に、悪くないエンディングを迎えることができたが、当分面倒ごとに巻き込まれませんように、と人知れず願わずにはいられない俺であった。

エピローグ（後書き）

これでこの話は終わりです。前回に比べて、二倍くらいの量になりそこそこ長くなってしまいました。最後まで読んでいただいてありがとうございました。この程度の文章にみなさまの貴重な時間を割いていただいたと思うと恐縮です。今のところ、続編については未定ですが、もしよろしければまたお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2557c/

偶然という名の奇跡２～社長令嬢のジレンマ～

2010年10月10日13時57分発行